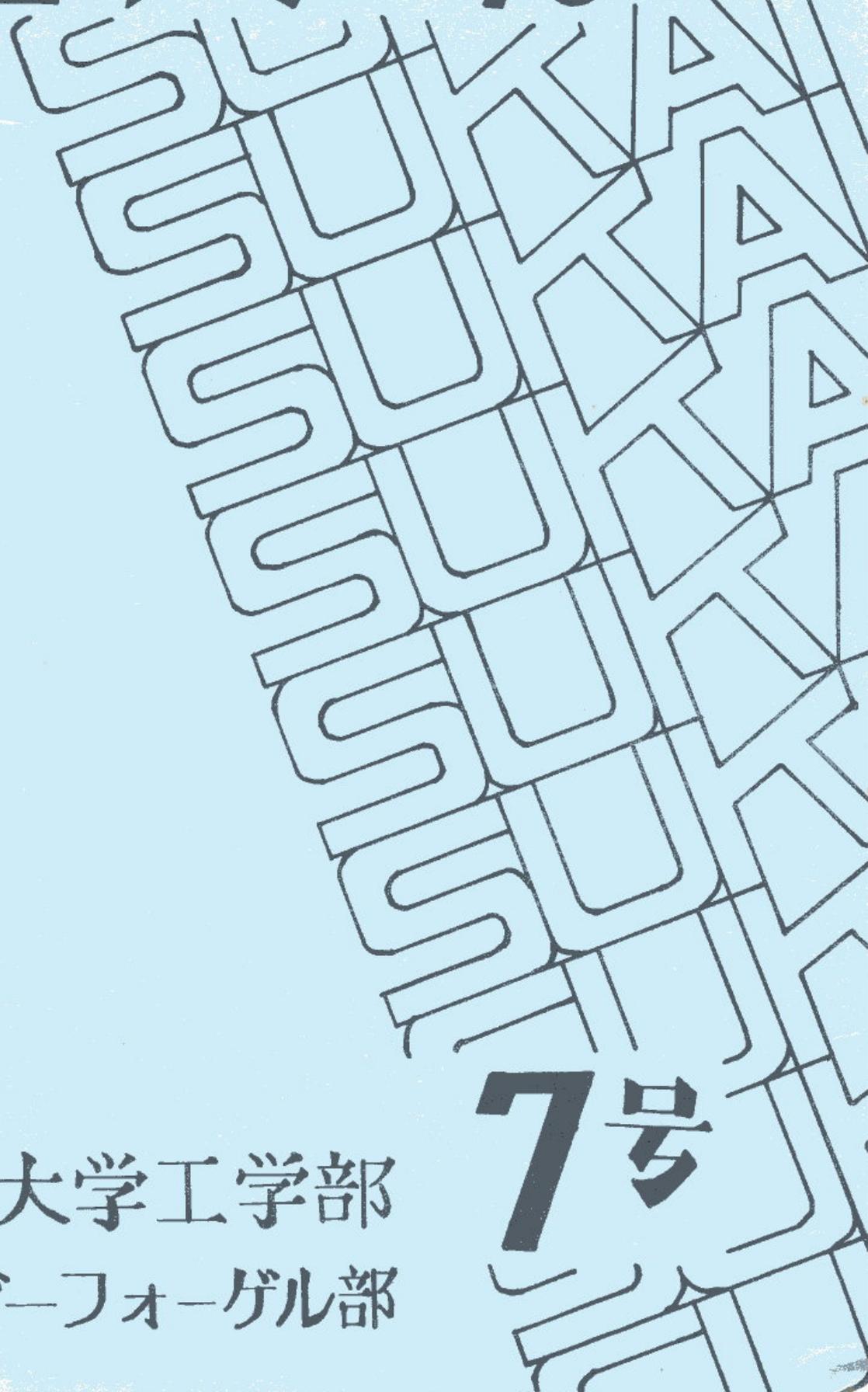


# 皇海 '70



7号

群馬大学工学部  
ワンダーフォーゲル部

## 巻 頭 言

部長 海 老 原 孝 司

部誌「皇海」7号をここに発行する。

1970年度のクラブ目標は、新役員のもとに「未開地の開発、及び足尾山塊再踏破」と決定され、この一年間目標を達成すべく活動してきた。だが目標は漠然と限りなく広範囲であつたため、具体的な焦点を欠き、十分な成果をあげられなかつたことは残念である。また、秋以後は部員の意欲も薄れがちになつてしまい、活動不振が目立ち、例年問われ続けていることだが、部員としての責任と自覚というものを、ここに再び提起せざるを得ない。GWVという集団内においては、もはや各人は集団内の一員として規制され行動し、集団の発展に努めねばならないことは自明の理であり、さらに、その指導者あるいは助言者は集団の方向を決定し、統率と起動とに活躍しなければならない。今後の課題として、この内部的問題を各人が再び考えなおしてもらいたいと思う。

今年度一年間の山岳活動は、その過半数が足尾山塊に集中されている。目標としての足尾というせいもあつたが、一年間で、GWVとして未踏の地もいくつか含め、主な尾根はほとんど歩いてみた。残された沢に関しては、技術的な点あるいは地理的に不便な事もあつて、全く十分には活動できなかつた。日光と足尾を結ぶ稜線の西側には、かなり魅力的な沢もあるだけに今後の活動に期待したい。さらに、尾根においても、春夏秋冬それぞれの時期の様子を知つた上で初めて、GWVのホームグラウンドとしての足尾がその意味を持つであろう。

例年部員数が減少してきたようだが、一日も早く、GWVとして他に地位を譲らぬ確固としたものを築きあげてゆかねばならないと思う。

# 目 次

巻 頭 言	部長 海老原 孝司	1 頁
目 次		2
昭和45年度クラブ行動概略		1
夏 合 宿		
夏合宿偵察		
守 門 岳		4
田 代 平		5
未 丈 ヶ 岳		7
浅 草 岳		8
夏合宿荷上げ		9
夏合宿準備山行	谷川岳—巻機山	10
夏合宿行動計画書(I)		12
夏合宿行動計画書(II)		16
夏合宿行動報告書		
御 神 楽 隊		19
未 丈 隊		31
気 象 報 告		42
反省会抜粋		43
公開ワンデルング		
公ワン偵察		
尾 瀬 ヶ 原		44
皿 伏 山～尾瀬沼		45
第8回尾瀬公開ワンデルング		
尾 瀬 ヶ 原		45
皿 伏 山		46
三学部合同ワンデルング		47
ス キ ー		
尾瀬スキー合宿		47
石打スキー合宿		49
野沢温泉スキー		50
巻機山スキー		51

個人山行

頁

谷川岳ザンゲ沢	52
仙ノ倉山荘(山岳部山行参加)	52
根名草山～鬼怒沼	53
中央アルプス山行	54
白峰三山縦走	56
白峰三山(医学部秋合宿参加)	57
足尾の山々	60
リーダー春山合宿	62
気象報告	65
新人合宿	
白根隊	68
社山隊	70
袈裟丸隊	72
気象報告	74
夏合宿準備山行 中倉山～オロ山～庚申山	75
第1次秋合宿(O.B.合同ワンデルング)	76
B 隊	76
A 隊	80
第2次秋合宿	82
日光白根山	84
錫ヶ岳～笠ヶ岳～三ヶ峰	85
袈裟丸連峰	87
袈裟丸山～庚申山荘	88
根本山周辺	90
O.B.寄稿	
草場 彰	91
松田 衛次	92
これから山に登ろうとする人へ	92
立 山	93
秋田駒ヶ岳	93
斉藤 譲	
巻 機 山	94
吾妻 耶山	95

大真名子山	96頁
浅間山	97
女峰山～大真名子山	98
石筵牧場～安達太良山	98
男体山	100
飯豊連峰	100
会津駒ヶ岳	103
根子岳～四阿山	104
苗場山	105
部員住所録	106
O.B.住所録	107
編集後記	110

## 昭和45年度クラブ行動概略

45年3月27日～4月1日 リーダー養成合宿

2年生のチームワークおよびリーダーシツプの養成

残雪期の足尾山塊の状況を知る。

4月20日～4月26日 第1回平地合宿

新部員を迎え新人合宿に備えて学内合宿

トレーニング、天気図作成解説、新人合宿および夏合宿の概要説明、スライド映写、新人歓迎コンパ

5月2日～5月5日 新人合宿

国境平を集中地として、日光白根方面から、社山方面から、袈裟丸方面からの3隊により、足尾山魁の主稜線の状況を知る。

第8回公開ワンデルング関係

4月22日 三学部打ち合わせ

燧往復、皿伏山、尾瀬沼、尾瀬ヶ原の4コースを決定。工学部受け持ち皿伏山、尾瀬ヶ原のコースの期日、募集人員など決定

4月28日 パンフレット、会員券印刷

4月30日 申し込み受け付け開始

5月7日 市内各種学校に募集ポスター、パンフレットを掲示

5月14日 コース責任者および担当者決定

5月16日～5月17日 皿伏、尾瀬ヶ原偵察山行

5月18日 三学部最終打ち合わせ

5月22日 会員名簿印刷

5月23日～5月24日 第8回公開ワンデルング

工学部よりバス3台、収益約27,000円

6月6日 第1回三学部合同役員会

遭難対策、学部間交流について検討

各学部連絡場所を確認

6月6日 三学部合宿コンパ

6月8日～6月10日 医療講習会

前橋日赤において、三学部合同で救急処置三角巾の使い方を講習する。

- 6月20日 第2回合同役員会  
役員名簿の交換  
遭難対策に関して細部検討
- 6月30日～7月2日 第2回平地合宿  
夏合宿にあたって強化トレーニング  
記録、気象、医療、食料、装備など各係別に細部を検討
- 7月4日 第3回合同役員会  
各学部の夏合宿計画解説、計画書交換 遭難保険について検討
- 夏合宿関係
- 44年12月5日 期日、コース立案計画開始
- 45年2月3日 期日、コース、隊編成、形式など検討
- 5月27日 御神楽山隊、未丈ヶ岳隊、室谷川隊、定着隊の4隊を編成。メンバー、集中地を決め各隊ごと計画準備を開始する。
- 5月31日～6月2日 第1回偵察山行、守門岳、五味沢方面
- 6月12日～6月15日 第2回偵察山行、中の又山付近および田代平周辺
- 6月13日～6月14日 第3回偵察山行、未丈ヶ岳周辺
- 6月29日 隊編成変更 御神楽岳隊と未丈ヶ岳隊、定着隊の3隊に減少。日程7月30日～8月12日。浅草岳山頂を集中地とする。
- 7月3日 各隊行動計画書(1)作成
- 7月12日 行動計画書(2)作成
- 7月19日～7月22日 準備合宿 谷川岳～巻機山。各隊のチームワークを養成する。
- 7月28日 最終打ち合わせ
- 7月30日～8月12日 夏合宿御神楽岳隊、未丈ヶ岳隊行動
- 8月13日 反省会
- 9月12日 第4回合同役員会  
各学部の夏合宿報告
- 10月10日～10月11日 OB山行  
庚申山にてOB3名を迎えて行なう。
- 10月11日～10月16日 第1秋合宿  
足尾坪川源流に中心を置いたが、思うような成果得られず
- 10月23日 第5回合同役員会  
合同ワンデルングについて日程場所を決定

3月下旬の春スキーを三学部合同合宿とし尾瀬で行なうことを決定

8月下旬に特定地域にて合同山行をすることを検討

11月7日～11月8日 合同ワンデルング

医学部担当で赤城にて行なわれる。

11月14日 第6回合同役員会

春スキー詳細検討

合同山行地域検討

11月21日～11月23日 第Ⅱ秋合宿

日光白根から社山へ縦走

12月5日 第7回合同役員会

春スキーに関して日時を3月24日～4月1日とし、長蔵小屋定着隊と山の鼻まわりの隊との2隊とする。各隊の計画書作成準備

次回公ワンについて形式、場所など検討

12月7日～12月12日 第3回平地合宿

強化トレーニング主体

12月20日～12月24日 第Ⅰスキー合宿

石打丸山スキー場にて基本練習

46年1月1日 新年会

OB現役30数名参加し親睦を深める

OB会役員改選、会計報告

1月2日～1月7日 正月スキー

野沢温泉にテントを張る。

1月21日 新役員選挙

1月28日 四年生追い出しコンパ

1月30日 工学部一年生歓迎会

前橋教室の工学部一年生との相互親睦を深める。

1月23日 第8回合同役員会

春スキーに関して、全員長蔵小屋定着と変更 スキーコース決定

2月13日 第9回合同役員会

春スキーに関して装備、買出し、荷の分担など決定

宇大との合ワンに関して検討

# 夏合宿偵察

## 守門岳

5月30日～6月1日 山口 大橋 尾高 長谷

5月30日～31日

桐生(22:25)→小出(5:07) 大白川(6:40) = 守門登山口(9:25) — (13:20) 守門岳(14:30) — (15:30) 1000 m地点(16:30) — (16:50) 登山口

6月1日

(8:15) — つり橋(8:35) — (9:07) 大白川(9:25) — 五味沢(10:30) 八十里越登山口(12:30) — (15:20) 大白川駅(16:30)→桐生

5月30日～31日 ①

夏合宿集中予定地、田代平を偵察する予定で出発する。前橋駅で教育のW.V.の諸君に出会う。谷川に登るとのことであつた。

小出に着いたのが4時ごろ。1時間の仮眠をとり只見線で大白川に向かう。駅で朝食をどる。シーズン中にはマイクロバスが浅草岳、田代平方面に接続されている。このバスは音松荘(五味沢)で運行しているようであつたから詳細は問い合わせればよいであろう。

大白川の部落に行くべきところをまちがえて六十里峠方面に向かつてしまう。近くの人に注意されて大白川の部落に向かう。部落に入って橋をこえて、すぐ左に曲がる。まっすぐ北に向かう。このまま北に進めば、つり橋に出て守門岳の登山口に出られるところであつたが、地図にその道はなかったの、地図に出ている道路に行く。大原の手前1kmで、踏み跡程度の道に入る。

途中ところどころ残雪もあり、また林道に出る。林道の道端にも雪が残っていて、今年の雪の多かつたことを物語っていた。林道に出てすぐに守門登山口に出る。導標がありわかりやすい。登山口から数10mで林道は終点となっている。登山口から急登がはじまる。急登を登りきると細い尾根に出る。天気は非常によく快適な気分である。ずっと一本道である。新緑の中をゆったりした気分が進む。だんだん残雪も多くなってきた。道は雪の中に消えてしまったが、目前にピークも見えているので雪の上を歩いていく。昼食を守門の手前のピークでとる。もう100m近くで頂上である。ここから雪は消えており楽々と頂上に立つ。予定では烏帽子に行くつもりであつたがひどいヤブであり時間的にも無理なのであきらめる。夏合宿で田代平から守門まで来る予定になっているが、この分ではまず無理であろう。

守門岳から大岳方面はなだらかに残雪が続いていて美しい。もうあとは下山するのみである。雪の上をすべるようにおいて、雪が消えてからは半分かけ足で行く。途中、天気図作成のため休む。天気図をとっているもののほか3人は眠り出してしまった。書いている者も途中眠ってしまい聞き

のがす失敗までしてしまう。天気図を書き終え1本道の尾根をまたも、かけおりにしてしまう。頂上から実質、1時間程で登山口に着く。時間的に大白川にもどることは無理なので登山口近くに幕営する。沢が近くにあるため、虫が多くて苦勞する

6月1日 ☉ → ☉

朝から雨にやられる。昨日別の登山者が守門川の方に下山して行ったので我々も道を捜してみる。林道の終点から用水の上を越えると道が続いていた。これを下山してみる。しばらく行くと畑の中に出てしまい道がわからなくなってしまった。農夫に聞いて守門川に出る。守門川にはつり橋があり、渡れば林道が続いている。雨はまだやみそうにない。しかし林道であるから楽である。大白川の部落の民家の下に荷物をおいて田代平に行く。雨の中のこともあり疲れやすい。五味沢を通り途中から右沢にそった林道を歩く。右沢を渡り、田代平へ行く道を見つけたが、橋がこわれて、対岸に渡ることはできそうにない。雪解けの水のため水量が非常に多い。また時間的にも無理なようなので田代平偵察はあきらめてひきかえすことにした。

## 田 代 平

6月12日～15日 太田 鎌田 海老原

6月13日

越後長沢駅(6:15) = (6:30) 八木前(6:50) = (7:05) 笠堀(7:10) — (7:35) 大江部落(7:40) — (10:40) 中の又山登山口

6月14日

◇(5:25) — (8:10) 940mピーク(8:35) — (10:00) 昼食(10:25) — (12:35) ◇(14:00) — (16:10) 林道終点

6月15日

◇(9:07) — (9:45) 鞍掛峠 — (10:25) 田代平(11:10) — (11:40) 八十里峠(11:45) — (12:45) 林道飯場(13:10) — (15:50) 大白川駅(16:30) = 桐生

6月12日 ☉

夏合宿に関する中の又山方面および田代平付近の偵察のため桐生を最終でたつ。

6月13日 ☉ → ☉

上越線東三条駅にて弥彦線に乗り換え越後長沢駅で下車する。ここよりバスで八木前まで行き乗り継ぎをして笠堀までスムーズに連絡している。笠堀より大谷川に沿って歩く。途中でマイクロバスに乗せてもらい大江部落まで便乗する。夜行の疲れがかなりひどく、全員しばしば睡魔におそわれてダウン。大江部落より大倉沢手前の県境尾根登山口まで実質50分程のところを、かなりの長時間を費やしてやっとたどり着く。計画では、ここより県境尾根に出て田代平までヤブコギの予定であったが、全員の体調不良、入梅直後の悪天候、ヤブコギのことなどを考え合わせ、県境尾根の

940 m ピークへのピストンと林道より鞍掛峠を経て田代平へとコースを変更する。テントは登山口より200m程南に寄った所に張る。

6月14日 ◎

県境尾根への登山口には、「歩道大倉沢林道」というクイがたっている。地図上の大倉沢より約1km北にある道である。1時間程すると道は尾根に出て残雪の烏帽子、守門が顔を出す。さらに1時間程幾つかの小さなピークを越すと県境付近の稜線に出る。ここまで登るに従ってかすかになってきた踏跡も、ここで完全に消え、あとは、県境より約500m程北にある940mのピークまでヤブコギとなる。ヤブは主に背の低い灌木で、枝は四方に入り乱れかなりのアルバイトとなる。

940mのピークも頂上はヤブで持参したナタで数m四方を刈り払い腰をおろす。ここからは、北方に粟ヶ岳、青里岳、矢筈岳など越後の連山と、駒形山、中の又山などが見渡せ、西に守門岳、南に浅草岳と絶好の展望が繰り繰り広げられる。

940mのピークより県境を東に約500m程行った小さなピークまでヤブをこいでみたが、から身であるのにかかわらず約40分程を費やした。合宿においての重いザックを背負ってでは相当な労働となるであろう。

中の又山方面への稜線と、八十里峠方面への稜線を確認して下山にかかる。道はもと来た道に戻る。尾根の北側の沢すじはだいぶ残雪がある。その付近に生えているゼンマイを取る人に出くわす。あとで聞いた話では、1日分の収穫で約7千~8千円にもなるという。

12時35分にテントに着く。腹ごしらえをしたあとテントをたたみ南下する。明日の行程を楽しむため、きょう中に田代平まではいっておきたかったが、林道終点で時間切れとなり幕営する。途中の大谷川の溪谷美はとてもすばらしい。

6月15日 ●→◎

昨日ゼンマイ取りに来ていた地元の人に聞いた通り鞍掛峠への登りにかかる。あいにくの昨夜からの雨はけさになってもあがらず、しばらく様子を見たが、遂に雨についての出発となる。道は地図上に出ているものよりもかなり東側にあり、これが鞍掛峠への近道だと教えられた。ここにも白いクイがたっておりそれが目印である。その道を約40分程登りつめると鞍掛峠である。ここより田代平へと向かう。道は昔の県道だったと地元の人には言っていたが、現在ではかろうじて道幅が普通の登山道よりは広いと感じられるだけで、草が茂り、所々崩れた箇所もあり荒れる一方のようである。楽ななだらかな下り道を40分歩くと田代平である。地図からすると、田代平のすぐそばを道が走っているように思えたが、実際には、木に隠されて、また、湿原もまわりから木に押し寄せられてかなり狭くなっている。だいたい20m X 50mくらいだろうか。一帯は、雨の日だったからかも知れないが、水びたしといった感じで、付近の木々の間までも四方に水流が走り、テントサイトとしては不適と言わざるを得ない。資料不足による田代平の状況の予想が全くはずれてしまったわけである。狭い湿原には、一面に水芭蕉の白い花が咲き乱れているので、尾瀬を手のひらほどに圧縮したようなものと考えればよい。

田代平を11時10分に出る。八十里峠までは30分。峠には大阪市大の道標があった。ここで福島県側に入叶津に向かう道と南に五味沢への道をとる。なだらかな道を40分程行くと右下に林道が見え、やがて、その林道へ続くらしい踏跡がわかれていたので、そこをおりて行ったら15分程で飯間川沿いの林道に出た。

飯場小屋で昼食をとったあと、再び雨の中を林道歩きとなる。途中でトラックでも通りかかれば乗せてもらおうと思っていたが、大白川の駅まで2時間40分の間ついに1台も通らず歩き通さねばならなかった。

## 未 丈 ヶ 岳

6月13日～14日 長谷

6月13日 ○→①

桐生 ~~→~~ 小出 = 栃尾又 (11:05) — (11:25) 尾根 — (15:30) ダオ — (16:15) 三又口小屋跡 

 6月14日 ①→◎

(6:00) — (7:00) 松の木ダオ — (9:15) 未丈ヶ岳 (9:30) — (10:30) 大鳥池分岐 (10:45) — 未丈ヶ岳 (11:45) — 松の木ダオ (12:40) — (13:10) 三又口 (13:30) — ダオ (14:30) = 小出 ~~→~~ 桐生

6月13日

銀山湖までバスが運行されている計画で出発したのだが、残雪のため栃尾又までしか運行されていなかった。栃尾又から道路を歩かずに、山道に行くことにした。栃尾又から沢沿いに行く。10分ぐらいで尾根の取りつき点に着く。尾根に取りついたのはいいのだが、道は左側についており沢を左に見ながら行く。5万分の1の地図では尾根の上に出るはずなのに、道はない。しばらく進んでも沢づたいなのでヤブをこいで尾根に出る。尾根には全然道はない。わずかに所々踏み跡らしきものがある。道は尾根より南側にあるはずだが下るのがめんどうなのでヤブをこいでいってしまう。足にからまるツルをはらいのけながら行く。疲れがひどくなるが、きょう中に三又口まで行かなければ予定通り未丈ヶ岳に行けないので進む。地図上の道にやつのことで出るが、草が繁っていて、道路の姿はとどめていない。この道をかけるように進んでいくと、銀山湖につづく道路に出る。ここまで来ればダオはすぐである。重たい足を引きずるように歩く。ダオから道が2本でている。北側の道を下る。30分もするとトンネル工事現場である。ここを通りすぎて細い山道を沢伝いに下る。まだ相当雪が残っており気持ちがいい。泣沢と黒又川とみかぐら沢の合流点が三又口である。三又口小屋の跡に幕営する。

6月14日

三又口小屋跡をまっすぐ進むと、三つの沢の合流点に出てしまい、対岸に渡ることはできない。

小屋跡より10mぐらい戻り左にはいり、かご渡して対岸に渡る。まっすぐ歩いていき、赤布がある所を右に入るとあとは一本道である。尾根にとりついてみると、思ったより急でない。サブザックのため荷が気にならず楽々ととばす。松の木ダオまでは道がはっきりしている。松の木ダオをすぎると、背丈の高い笹になってしまう。未丈まで数ヶ所道がはっきりしなくなるが一本道であるため迷うことはない。だんだん急になり、笹も高くなりはじめた。もうすぐ山頂であろう。山頂は少し刈りはらわれただけの殺風景なところであった。晴れば見晴らしはよいだろう。きょうは曇り空のため駒ヶ岳がうっすらと見えるだけだ。未丈の東側はまだ雪でいっぱいである。夏でもあれば大草原になり、お花畑となるであろう。未丈山頂から大鳥池分岐への道はない。ちょっともどり、そこから草原の方に道はのびている。

大鳥池へは東側が雪でおおわれているのでそこを歩いていく。雪の上であるからヤブもかくれてしまい、走るようにして行く。しかし、途中雪が消えヤブの中に入るが、踏み跡がしっかりしているため、そんなに苦労はない。大鳥池分岐へ出ると、赤紫沢の頭が見えるだけでその先はガスで全然見えない。夏合宿でもそんなに苦労するヤブとも思われない。大鳥池は半分雪にかくされてしまっている。時間もないので急いで引き返すことにする。ダオから栃尾又まで歩かなければならないので大急ぎである。未丈山頂までかけてもどり、三又口までも走る。三又口でテントをたたみ、トンネル工事現場までもどる。トンネルを歩けば早いと思って、トンネルを歩いてもよいかとたずねると無理とのことだったので、ダオから林道を歩くことにした。ダオから歩き始めると、すぐに豆をつくってしまい、びっこをひきながらいく。1時間も歩いて休んでいると乗用車が止まってくれて、小出まで乗せてくれるとのこと。これは天の助けと喜んで乗せていたゞく。歩いていれば栃尾又からの最終のバスに乗り遅れていただろう。

## 浅 草 岳

7月9日～7月10日 海老原 斉藤

7月10日 ◎時々①

大白川(6:30)＝(6:50)五味沢 — (7:00)登山口 — (7:30)白崩沢支流(8:00) — (10:10)カゲヨのポッチ — (10:40)浅草岳(12:00) — (14:25)五味沢 — (15:20)大白川(16:30)＝桐生

7月10日

前夜桐生を出る頃は雨が降っていたが、夜行列車に揺られているうちに止んだようだった。小出で乗り換え大白川に朝の6時半に着く。すぐに「音松荘」のマイクロバスが来て、五味沢まで乗せてもらうことにする。1人100円なり。五味沢の音松荘から数分の所に木材集積場があり、そこから10分も行くと浅草岳登山口である。ムジナ沢の橋を渡ったすぐの所である。標識がある。約30分と白崩沢の支流を渡る地点である。ここが最後の水場である。これよりなだらかだった斜面

も徐々に傾斜を増しサクラ尾根の稜線上の道となる。2時間も登り続けると、1484mの三角点のあるカゲヨのポッチに着く。ここを過ぎると、いよいよなだらかな浅草岳の山頂となり、草原になる。数ヶ所に稜線近くまで雪渓が残っている。山頂付近は一带が草原というのではなく、小さな草原が散らばっているといった感じ。山頂三角点よりやや南側に小さな池塘が一つある。あいにく天気はあまり良くなかったが、時々ガスの晴れ間から田子倉湖が見える。鬼ヶ面山方面への道の分岐と、八十里峠方面への稜線を確認する。集中用のテントサイトは、鬼ヶ面山への分岐付近の草原と決める。

山頂で昼寝をしたあと、今来た道を一気にかけおきる。沢の水場まで1時間15分。ここでしばらくゆっくりし、あとは五味沢を経て大白川まで。途中でトラックに便乗。大白川では列車が出るまで1時間あまり時間があつた。桐生到着は9時頃だつた。

## 夏合宿荷上げ (御神楽隊)

7月25日～26日 堀江、山口、太田

7月25日

桐生(8:00) — 長岡 — 東三条 — 大江部落 — 登山口 

7月26日

 — 860P. — 別の860P. — 820P.直下 — 荷上げ地点 — 860P. — 登山口 — 大江部落 — 東三条 — 越後湯沢 — 渋川 — 桐生

7月25日

8月7日の夜飯から10日の夜飯の分の食糧の荷上げである。前日の買い出し分と米で菓子カン3ヶにいっぱい。1度行った所なので車で行くことにする。車は堀江氏のブルーバード。行きはすべて堀江氏の運転。国道50号から17号へ。快適である。東三条から国道17号をそれる。ドライブマップだけで知らない町を走るのはとてもおもしろい。

大江部落から大谷川に沿ってゆくと、まもなく営林署の事務所兼木材置場がある。道には立入り禁止の柵がある。事務所に事情を話し、通してもらえるように頼んだ。この道は山から切り出した木材を運ぶためのものであり、大型トラックが1台やつとである。初め、「ウーン」とうなっていた事務所の人も先月偵察に来たことを話すと、「ア、橋のそばにテント張っていた人」など親しそうになり、通してくれた。前と同じ所にテントを張った。この前を通った大型トラックに乗っていた人達も親しげに、車を止めてあいさつしていった。こんな所に来る人間はいないのかもしれない(外部から)ので、顔でもおぼえられていたのかもしれない。山の中である。

7月26日

テントサイトを6時頃出発。誠に申しわけない話であるが、記録が不明である。同じコースを先月登っているので、そのコースタイムを参照してください。今回は荷をしょっているのでもっと

遅れぎみであるが。

この道は登山道ではなく、生活の道である。わらび取りのためのものである。初めの860Pの所で道が2分する。右に曲がればあとは尾根上の道になる。820Pの下までつづいている。先回は820Pを直登して、尾根のサブこぎをしたが、幸い地図通りの道を見つける。820Pからの尾根の腹を巻く道である。地図上で道が終る地点を荷上げの場所と決める。ここはちょっとしたササでテント2張りなら張れる場所である。それに水もほんの1分もどった所にある。縦走路もここで直角に曲がる地点があり好都合。しかもここから820Pからの尾根まではヤブもなく、まらかうおそれもない。小木の間に菓子カン3つとトイレトペーパーをビニールで包んで置いてきた。

帰りは太田氏の運転。堀江氏と山口氏はもう寝込む。スヤスヤ……。疲れないように六日町あたりから堀江氏と交替しながら車を走らせる。

## 夏合宿準備山行（谷川岳—巻機山）

7月19日～22日

海老原、太田、山口、酒田、田口、井上、長谷、尾高、鎌田、海老沼

7月19日

桐生(6:35) ~~→~~ (8:30) 土合(8:45) ~~→~~ 巖剛登山口(9:20) — (9:40) 昼食第1の沢(9:55) — (11:15) 西黒出合(11:45) — (13:20) 谷川岳昼食(13:55) — (15:00) — の倉岳 — (17:10) 茂倉岳 — (17:20) 茂倉避難小屋

7月20日

小屋(5:30) — 武能岳(7:00) — 蓬峠(7:25) — 七ツ小屋山(8:15) — (8:35) 清水峠(9:05) ~~→~~ (11:20) J.P(朝日ピストン) (13:05) — (14:00) 檜倉山手前鞍部 

7月21日

 (4:10) — 水汲み(4:55) — 檜倉山(5:45) — (6:45) 昼食(7:10) — (7:55) 柄沢山(8:15) — (9:20) 大休止(10:20) — (11:35) 巻機山 

7月22日

 (5:15) — 割引岳(5:40) — 小屋(6:10) — 清水部落(8:15) ~~→~~ <sup>トラック</sup> (8:45) 沢口(9:55) ~~→~~ 六日町 ~~→~~ 桐生

7月19日

夏合宿の準備山行として計画する。夏合宿に参加する2～3年全員参加である。

土合に着くと小雨であった。しかし、歩き始めるとすぐ止んでしまった。巖剛新道を登る。雨のため足元に水が流れている。早朝桐生を出たためか、全員腹ペコである。最初の沢で朝食兼昼食とする。最初はだらだらの登りである。まもなく、マチガ沢大滝を右に見るようになり、急な森林の

の中の登りになる。バテる者がでるが、どんどん進む。遅れるようになったので、1人つけて先に行く。ガレた小沢をこえ、まもなく、西黒尾根景雪小屋跡に出る。ここで遅れた者を待ち、レモンをかじる。ガスが濃くなる。やっと来たが、相当、疲れているようなので、谷川岳山頂までは、先に行くことにする。しかし、視界がきかないため非常に長く感じられる。山頂に着いて2度目の昼食をとりながら、待つ。まもなくやって来る。少しは楽になったようだ。

ガスが濃いため、山頂に着いてもおもしろくないので、一の倉岳に向かう。どんどんとぼして茂倉岳に着く。茂倉岳から、茂倉新道を下り10分程で茂倉岳避難小屋に着く。水場は5分程であるが、全然少ない。ポタポタとたれるだけである。

7月20日

3時15分起床。天気はよい。水は補給せず、茂倉岳に登る。北に下り、武能のなだらかな登りを登る。武能から蓬峠の草原が青々と見える。急坂をかけおり熊笹の蓬峠に着く。蓬峠から1567mピークを越え、小さなピークを数ヶ所越え、七ツ小屋山への登りとなる。下を見ると土合から清水峠へ続く道が見える。熊笹で囲まれた道の中を登る。七ツ小屋山から、熊笹の中をすべるようにして、清水峠に出る。ここで昼食とする。水を補給する。ここから先、水場の有無が不明のため節約することにする。ここから長い朝日岳への登りが始まる。予想以上に長い時間がかかる。急な上疲れがでてくる。全員バテぎみである。熊笹とも別れると、森林の中の道になる。景色はよくない。空は真青に晴れわたっている。汗が流れ落ちるようだ。なんとがJ.P.に着く。ここにザックをおいて朝日岳ピストンである。朝日岳で少々昼寝して、J.P.に戻る。曇り空に変わってくる。J.P.から下り、この道はやはり熊笹の中でよくすべる。何度もすべりながら下っていく。次のピークが小烏帽子山だ。次のピーク1819m P.が大烏帽子である。これはJ.P.のほうから見ると、ほんとに烏帽子のような形であった。大烏帽子を越えた鞍部の草原にテントを張る。だいぶ疲れている者もいることだし早めに幕営とした。小さな池塘があるが、相当よごれている。水は、テントサイトから北に5分程の沢を下れば得られる。急な沢のため足を滑らすと転落してしまいそうだ。

山溪を見て作ってきた保存食料の野菜と肉のラードでいため、かためたものは、悪臭がしはじめていた。夏合宿に持っていければ、便利であろうと思いつけてきたのだが、実用にならないようだ。保存食は悪臭がするが食べてしまう。

7月21日

2時起床。4時に出発し、昨日見つけた水場で水を補給する。檜倉山へはゆるやかな登りである。標識はないが三角点はある。檜倉からは、最初ゆるやかでだんだん急な下りになってくる。道は充分はっきりしている。この辺でもう腹がへったなどと言い出し始める。あとワンピッチ行ってから昼食にする。柄沢の登りが始まる。単調な登りにすぎない。気持ちよい天気ですぐ汗は流れる。柄沢山頂の手前に池塘があり草原となっていて、幕営可能である。柄沢山から気持ちのよいゆるやかな下りとなる。小さなピークを越えて、米子の頭へ向かう。柄沢山から米子頭山までは予想以上に早いペースで来てしまう。天気がよいと足どりまで軽くなってしまいうらしい。米子の頭を越えて、

10分程で東側斜面に草原がある。時間も充分余っていることだからと、昼食をかねて大休止を1時間行なう。昼寝をしたりあたりをぶらついたりする。沢までおりて冷たい水をくんで来たりしていた。

まだまだ休みたいのだがそれも言っていないので出発する。最低鞍部におり、そこから巻機へのだらだらした登りが始まる。だらだらしているようで割にくたびれる。どういうわけだか山頂までの時間は短くてすんだ。1時間足らずで登りきってしまった。きょう中に下れば下山できるだろうが、ゆっくり巻機で昼寝することにした。残り物で何か食べた後、牛ヶ岳へ出かける。牛ヶ岳から八海方面がガスにやられているが、かすんで見える。ゆっくり楽しんだ後引きあげる。

7月22日

3時10分起床。ニセ巻機への分岐にザックをおき割引岳へピストンする。かけあがり、ゆっくり展望を楽しむ。分岐にもどり、巻機小屋に向かう。ここで日大医学部の夏合宿に途中参加の人に出会う。予定より到着が遅れているらしく心配していた。巻機小屋は以前と同じく悪臭につつまれている、ゴミの山である。ニセ巻機をぬけて下りにかかる。全員早く下山したいのか、ものすごいペースである。どんとどんとぼしている。いきおいあまって窪地に落ちてしまう者まで出る始末である。あつという間に林道に出る。清水部落に着いてみると、30分程前にバスが発車してしまい、次のバスは4~5時間後になってしまう。沢口まで行けば、1時間おきにバスが出るそうだから歩くことにする。約5kmぐらいだから1時間ぐらいである。途中休んでいると、ちょうどトラックが通り、それに便乗させてもらい沢口まで行く。あとはバスにゆられて六日町に出るだけだった。

## 昭和45年度 夏合宿 行動計画書 (I)

7 月 3 日

期 日 昭和45年7月30日~8月12日

地 域 奥只見周辺地域

集 中 8月10日 浅草岳山頂

隊 編 成 A隊(御神楽隊)

CL 記録 海老原孝司 3E

SL 医療 太田博 3L

会計 気象 山口昌男 3M

装備 トランシーバー 酒田総嗣 2E

食料 井上正伸 2C

斉藤功 3M

堀江英雄 4L

### B隊(未丈隊)

CL 記録 装備	長谷健二	3E
SL	鎌田篤夫	3M
医療	海老沼義郎	2K
気象	田口久	2M
トランシーバー	尾高秀一	2E
	渡辺等	3M

### C隊(定着隊)

未決定

### 行動概略

A隊 八田蟹 — 御神楽岳 — 日尊倉山 — 霧ヶ森山 — 東岐山 — 小金井山 — 小金花山 — 中の又山 — 八十里峠 — 五味沢 — 浅草岳集中

御神楽岳へは、蟬ヶ平を経て栄太郎新道を登る。以後、八十里峠までの新潟、福島県境稜線は、これまでほとんど歩かれたことのない尾根、山々である。そのため、資料入手はきわめて困難であり、実際、資料としては、日本山岳会越後支部の出版した「越後山岳」のみが頼りであった。しかし、これも4~5月といったヤブのうまった残雪期の資料であり、完全な資料というものは皆無である。

稜線の特長は、1000m前後の山々が連なる低山帯で、そのほとんどが灌木におおわれており、行動はかなりの苦戦が予想される。事実、中の又山付近の県境偵察において、地をはうように入り乱れた枝々の上をとび歩いたり、わずかのすき間をぬって木々の中を行かねばならなかった。このような状態から行動は勿論、テントサイト、水の確保もなかなか苦しいようである。そのため、テントサイトは、すべて水を得るのに有利な鞍部とし、行動はだいたい14時~15時のうちには打ち切る予定である。

昨年度の夏合宿のヤブの中の行動と照らし合わせ、1日に行動できる距離は、かなり短いものと予定されるので、県境稜線の縦走は八十里峠までとし、以後、登山道を五味沢部落を経て、浅草岳集中を目ざす。また、中の又山付近まででかなり行動に遅延をきたした場合は、以後は期日内に集中地に到着できることを重点にし、行動予定を変更する。

行動目標はあくまで御神楽岳~中の又山~八十里峠~浅草岳の県境完全踏破であったが、前にも述べた通り、これはコース状況などにより、限られた日数内では相当無理が生じる。もし、八十里峠まで割合早いペースで行けて、浅草岳まで県境を直行するような場合、あるいは、事故発生によって非常ルートを下山するような場合、いかなる場合も絶えずB隊とのトランシーバー連絡を確認しながら行動する。

B隊 銀山湖 — 丸山 — 未丈ヶ岳 — 大鳥岳 — 毛猛山 — 前毛猛山 — 六十里越 — 鬼ヶ面山 — 浅草岳集中

銀山湖から丸山までは道があるが、未丈ヶ岳までの尾根はヤブとなっている模様。未丈ヶ岳までは資料がないから不明である。偵察により、未丈ヶ岳山頂は熊笹の中で、西部には雪田、草原（お花畑）があり、非常に気持ちの良い所である。未丈ヶ岳から大鳥池分岐までは踏み跡があり、赤布もあるためきびしいヤブこぎにはならないと思う。

大鳥池分岐から六十里越までの長い県境稜線は、低木のヤブのためかなりのアルバイトが予想される。1116 m ピーク（東の沢の頭）から鞍部まではわりと楽なようである。毛猛山へは南西部をトラバースして、毛猛山～百字ヶ岳の間の中ノ岳へ抜けてから、毛猛山へ登る予定である。毛猛山への登りは急登でシャクナゲなどの密生地帯でかなり苦しいだろう。また、毛猛山～百字ヶ岳ピストンは予定次第で中止することもあり得るが、このコースには道があるかもしれない。

毛猛山から1176 m ピークまでは相当苦戦するものと思われる。資料によると、稜線は非常に細く、通行不能の場合もあるかもしれないので、その場合は、毛猛山ピストン後、鬼ヶ面山より浅草岳集中とする。

1176 m ピークより前毛猛山までは稜線も広く楽なようだ。前毛猛山を下り、六十里越から浅草岳までは道があり楽に行ける。

C隊 8月10日中に浅草岳集中地に行く。

コースは大白川～五味沢～浅草岳集中地。定着隊はすべて4年生だが、現時点において参加者確認ができないため、行動計画、コース、人員など追って計画書を出す。

集中及び集中後の行動

集中は8月10日午後3時までには、浅草岳山頂集中地集中を目標にする。

8月10日に集中成功の場合は、8月11日を休養日とし、8月12日下山する。

集中が8月11日に遅れた場合も8月12日下山である。

行動日程

A隊（御神楽隊）

7月30日

桐生（6:35）~~→~~（7:10）新前橋（7:12）~~→~~（11:36）新津（13:02）~~→~~（14:05）津川 — 八田蟹 — 蟬ヶ平 — 西八ツ小屋沢 ↗

7月31日

↖ — 湯沢 — 高頭 — 湯沢ノ頭 — 雨乞峰 — 御神楽岳 — 本名御神楽岳 — 1100 m 鞍部 ↗

8月1日

↖ — 前ヶ岳 — 日尊の倉山 — 1130 m 鞍部 ↗

8月2日

① — 髭ヶ森山 — 雲河曾根山肩 — 1094m三角点 — 1000m鞍部 ①

8月3日

① — 東岐山 — 小金井山 — 800m鞍部

8月4日

① — 小金花山 — 908m標高点 — 840m鞍部 ①

8月5日

① — 940mピーク — 中の又山 — 五平小屋跡 — 860m鞍部 ①

8月6日

① — 1016m三角点東 — 1191m三角点 — 1020m鞍部 ①

8月7日

① — 1046m三角点 — 八十里峠 — 五味沢部落 — 1484m三角点 — 浅草岳集中地 ①

8月8日 予備日

8月9日 予備日

8月10日 予備日

予備ルート(1) 中の又山 — 五平小屋跡 — 940mピーク — 大倉林道 — 大谷川(丸倉林道) — 鞍掛峠 — 田代平 — 八十里峠 — 五味沢部落 — 浅草岳

予備ルート(2) 八十里峠 — 1010m三角点 — 県境尾根 — 浅草岳

行動が遅れて、8月10日中にも浅草岳に到着できないと判断した場合は、上記予備ルート(1)をとり8月10日の集中をめざす。

行動が予定よりすみやかに進み、日程の余裕がある場合は、その時の状況判断から予備ルート(2)をとり、県境完全縦走をする。

非常ルート 行動中に事故が発生した場合は、B隊とトランシーバー連絡をとりながら、下記ルートによって行動する。

- (1) 御神楽岳～日尊の倉山間……来た道を戻り八田蟹下山。
- (2) 日尊倉山～雲河曾根山間……大石田沢の林道へおりる。
- (3) 雲河曾根山～中の又山間……最も近いルートをとって蒲生川の林道へおりる。
- (4) 中の又山付近……上記予備ルート(1)により大谷川へおりる。

B隊(未丈隊)

7月30日

桐生 ~~→~~ 小出 = 銀山湖 — 丸山 — 1376mピークとの中間鞍部 ①

7月31日

① — 1376mピーク — 未丈ヶ岳

8月1日

△ — 大鳥池分岐 — 赤紫沢の頭 — 蓬沢の頭手前鞍部 △

8月2日

△ — 蓬沢の頭 — 三ノ沢の頭 — 一ノ沢の頭手前鞍部 △

8月3日

△ — 一ノ沢の頭 — 毛猛山南西鞍部 △

8月4日

△ — 毛猛山 — 百字ヶ岳ピストン — 毛猛山直下 △

8月5日

△ — 1176m ピーク — 前毛猛山南西鞍部 △

8月6日

△ — 前毛猛山 — 962m ピーク — 六十里越 △

8月7日

△ — 鬼ヶ面山 — 南岳 — 浅草岳集中地 △

8月8日 予備日

8月9日 予備日

8月10日 予備日

予備ルート

8月6日迄に毛猛山に到着できない場合は、百字ヶ岳～太郎助山を經由して下山し、六十里越から浅草岳集中とする。また、毛猛山 — 1176mピークの間は、通行不能の場合があるので、その時も上記コースをとり、時間的余裕がある場合、前毛猛山へ登る。

非常ルート

行動中に事故が発生した場合は下記ルートによって行動する。

- (1) 丸山～未丈ヶ岳の間 丸山から銀山湖へ逆コースをとるか、未丈ヶ岳から三又口を経て下山するか、いずれか一方をとる。
- (2) 未丈ヶ岳～一ノ沢の頭間 大鳥池から只見川を経て銀山湖下山。
- (3) 一ノ沢の頭～1176mピークの間—百字ヶ岳— 太郎助山 — 国道のコースにより大白川下山。
- (4) 1176mピークから先 ほとんど六十里越に下山。

非常ルートにより下山する場合は、両隊とも必ずトランシーバーにより連絡を確認し、連絡本部（桐生）への連絡、あるいは、集中地のC隊（定着隊）への連絡をする。

# 昭和45年度 夏合宿 行動計画書(Ⅱ)

7月12日

## 定着隊行動日程

8月7日

桐生(22:25) ~~〇〇〇〇~~

8月8日

~~〇〇〇〇~~ (4:07) 小出(5:07) = (6:18) 大白川 — 五味沢 — 浅草岳

8月9日 集中地定着

8月10日 同

8月11日 同

8月12日 下山(桐生到着予定16:00)

## 定着隊参加者

院1W	広田雅司
4W	五十嵐和男
4W	宮川英夫
4W	大橋進
4P	高橋徹夫
4P	吉野栄二
4P	河野政美
4P	滝野哲司
4P	鳥居寿一
4L	浅見武義 (10名)

## トランシーバー

規格 「トリオ移動用50MCソリッドステートトランシーバー」TR-1000

電波型式電話(As)

周波数 50,3 Mc

コールサイン JH1AXZ

空中線電力 1W 水晶発振

終段入力 2W 出力 1W

幅 275 X 高さ 77 X 奥行 1720 cm

重量 3.8 Kg (電池含)

申請社団「GWVアマチュア無線クラブ」

A、B隊のトランシーバー交信時刻

午前9時15分

午後2時00分

医 療

現地医療施設

五十嵐医院（内科、外科、他）

新潟県入広瀬村大字大栴山（電）19

入広瀬村診療所（内科、外科、他）

入広瀬村大字穴沢（電）77

入広瀬村診療所大白川出張診療所（医師 非常駐）

入広瀬村大字大白川新田（電）112

滝沢医院（外科、内科、ベッド有）

福島県大沼郡金山町大字横田字上横田

金山町玉保診療所（内科、ベッド有）

同 金山町大字川口字金洗

黒田医院（内科、婦人科、ベッド無）

同 金山町西谷字中田

新潟県東蒲原郡津川町役場管内

県立津川病院（電）2～3311

診 療 所

石川医院（電）2～2027

倉田医院（電）2～2121

広瀬医院（電）2～2704

新潟県南蒲原郡上川村役場管内

上川診療所（医師常駐）

上川村大田（電）豊川8番

A、B隊携帯医療品

内服薬

解熱鎮痛剤 バッファリン

総合感冒剤 コンタック600

抗生物質 クロマイ

サルファ剤  
総合胃腸剤  
ビタミン剤  
外皮用薬品

サルハロンA錠  
三共胃腸剤、正露丸  
アリナミン

殺菌消毒剤

マーキュロクロム  
オロナイン軟こう  
サビオ(大中小)

目薬

Vロート

鎮痛消炎剤

ゼノール  
エルシュプス

筋肉疲労

サロンパス

虫さされ

ムヒ  
キンチョール

医療品

バンソウコウ 三角巾 包帯 ハサミ ピンセット 体温計 ガーゼ 脱脂綿

連絡本部(夏合宿中)

高橋 徹夫 足利市助戸新山町1559 (電) 0284(4)2242  
吉野 栄二 桐生市天神町3-452 啓真寮 (電) 0277(22)9828

## 夏合宿 御神楽隊

45年7月30日~8月12日

CL 記録	海老原	(3)
SL 医療	太田	(3)
気象	山口	(3)
装備、交信	酒田	(2)
食料	井上	(2)
	齋藤	(3)
	堀江	(4)

7月30日

桐生(6:35)——新前橋、新津——(14:03)津川(14:05)——(14:35)八田蟹  
(14:40)——(15:45)蟬ヶ平

7月31日

2:30  (4:25) — (7:00) 湯沢尾根取付点 — (9:10) 稜線下 (10:05) —  
(10:20) 落雷跡 — (11:50) 湯沢ノ頭 (12:15) — (13:55) 御神楽岳 (14:30) —  
(15:30) 本名御神楽岳 — (16:00) 

8月1日

5:00  (7:45) — (8:00) 1100m地点 — 前ヶ岳 — (14:00) 最低鞍部 (860  
m) 

8月2日

2:05  (6:05) — (7:05)  (940m地点)

8月3日

2:05  (7:15) — (9:25) 日尊の倉山 (10:00) — (14:05) 最低鞍部 (1130  
m) — (15:55) 貉ヶ森山肩 — (16:45) 貉ヶ森山北西ピーク — (17:15) 

8月4日

3:00  (6:00) — (6:30) 貉ヶ森山 (6:40) — 雲河曾根山肩 — (15:40)   
(1094m 三角点東鞍部)

8月5日

2:10  (8:20) — (9:10) 三角点 — (9:50) ピーク 1120m (10:00) —  
(11:20) 1048m ピーク分岐 — (11:30) 休 (16:20) — (17:40) 小金井山東鞍部  
(900m) 

8月6日

2:30  (5:40) — (6:05) 小金井山 (6:20) — (9:00) ピーク 880m (9:  
25) — 鞍部 (11:20) — (12:00) ピーク 920m (12:25) — (13:50) 雷雨待機  
(14:30) — (14:35) 小金花山 — (16:00)  (小金花山西下)

8月7日

2:15  沈殿

8月8日

2:30  (5:15) — (6:30) 908m 標高点 — (8:25) ピーク 880m — (8:  
35) 田代 (9:05) — (10:00) ピーク 860m (10:20) — (11:15) ピーク (11:  
40) — (12:00) ピーク — (13:20) 中の又山 — (13:40) 休 (14:05) —  
(16:30) 尾根分岐点 920m (16:45) — (18:35) 荷上げ地 

8月9日

6:05  (9:15) — (11:10) 休 (12:00) — (12:15) 丸倉林道 (12:20)  
— (14:40) 林道終点 

8月10日

2:00 (5:45) — (6:30) 鞍掛峠 (6:40) — (7:15) 田代平北 (7:25) —  
(7:50) 八十里峠 (8:20) — (9:10) 林道飯場 (9:25) — (10:20) 五味沢登山口  
(10:40) — (11:15) 水場 (11:55) — (14:15) 浅草岳集中地

8月11日

沈殿、自由行動

8月12日

2:00 (4:30) — 五味沢 — 大白川 — 桐生

7月30日 ○ 一時

桐生を朝出て、新津に1時に着く。そこより磐越西線にて津川まで。津川ですぐに待ち合わせていたバスで八田蟹まで行く。広瀬方面へ行く街道との分岐に御神楽岳の案内図がある。遠くの空で雷鳴が聞こえる。暑い日である。

蟬ヶ平部落に着く頃、急に空の様子がおかしくなり雷雨が今にもやって来そうな気配になる。蟬ヶ平の部落長宅にて登山名簿に記入を済ませる。部落の南のはずれにある小さな神社の境内にテントを張ることにする。それが済むか済まないうちに雷鳴と共に雨が降り出した。御神楽岳方面は低い雲でおおわれている。

7月31日 ① → ②

2時半に起きた時は星が輝いていたが、出発する頃になると次第に雲がかかってきた。広谷川沿いの林道をしばらく進む。途中、廃虚のような所を過ぎ、だんだんと草がおおいかぶり、心もとないような道になってくる。2時間半で御神楽岳への登山道である湯沢尾根の取付点に出る。道標も何もない。尾根を30分程登ると展望が開ける。真夏の暑い日さしの中を進む。岩尾根で傾斜は急である。しかし、遠く阿賀野川を隔てた飯豊連峰を眺めるには絶好である。

午前9時15分の第1回目のトランシーバー交信は全く不能であった。午後2時の時も合わせ1日2回の交信は以後合宿中ずっと不能であった。合宿後に判明したことだが、当隊のトランシーバーの内部故障による受信不能とわかった。昨日、運送中に故障してしまったらしい。

10時頃御神楽岳よりの尾根に出る。やや上った所が落雷跡である。小さなプレートがある。湯沢の頭に着いたのはもう昼近い。猫の額ほどの小さなピークである。ここより御神楽岳の岩壁やつばくる尾根の岩壁などが迫ってくる。

御神楽岳午後2時。1386.4m。本コース中では、集中地の浅草岳を除けば最高峰である。一口に言えば、今年度は、低山帯における夏合宿といえよう。

山頂には三角点がある。また、プレートや名刺を入れたびんなどもある。そして、途中ではあまり見られなかったゴミも散らばっている。

山頂からは、これから縦走を目ざす会越国境の低く長いうねりが見渡せる。薄く雲にかすんだそれらの山々は、随分と長いものであることを感じる。一休みして本名御神楽岳へ向かう。当初の予定で2時あるいは3時頃までにはテントサイトを決めるとしてあったので、その適地を探しながら

歩く。しかし、意外と見つからず、結局、本名御神楽岳の山頂より5分程東の稜線上にテントを張る。4人用テントと3人用ツェルトを何とか張れる広さの所である。水は、稜線の北側の小さく残っていた雪溪に汲み取りた。下り10分上り20分とかなりかかるが、水量は少量である。

夕方より、南西の空から雷光及び雷鳴が次第に近づいてくる。夜になって遠のいたように思え一時寝入ったが、8時頃目をさますと、光と音との間隔が、わずか1秒ぐらいな程になってしまっていて、木の無い山頂近くの稜線上にテントがあるので、全員雨具を用意して避難待機する。大粒な雨の中を、テントのポールをはずし、沢筋に5分程下った所で2時間の避難であった。絶え間ない光と音と雨の中で2時間もの間立ちつくして頭上の鳴動を息をこらして見つめる。雷は、ほぼ水平に火の玉が走るようなものが多い。見ようによっては異様な美しさというものがある。

雨も小降りとなり、10時頃一段落ついたようなのでテントに戻る。急いで避難したので、つぶしたテントの入り口も閉め忘れ、シュラフの中まで水びたしてあつた。着ていたものもだいぶ濡れ、着替えを済ませ、再びシュラフにもぐつたのは、もう11時近かつた。明日の起床予定を3時間遅らせて5時とする。

8月1日 ③ → ① → ③

朝方、昨夜のなごりか遠雷が聞こえていた。

本日よりいよいよヤブが始まるわけである。一旦本名御神楽岳へ戻り、そのまま前ヶ岳方面への道を下る。道は県境尾根通りに、すぐに南下している。急傾斜の所をそのまま975m標高点方向へ尾根上を下っている様子だったので、見当をつけ、途中より西に折れ県境尾根上を進む。早くも灌木やスズタケのひどいヤブであるが、ところどころナタで切ったあとがある。ヤブにより、急激に歩行速度がダウンする。

前ヶ岳の稜線上は、時々岩尾根となり、南側に鋭く落ちる岩壁や、北側に御神楽岳の盛り上がるような山容がのぞまれる。日尊の倉山がばかに近くに見え、きょうの予定の日尊の倉山の南鞍部までは、楽に行けそうに思えた。

前ヶ岳の主稜線は、県境尾根をはずれそのまま西にのびているので、日尊倉を目安に方向を南にとる。やや西方に行き過ぎていたせいか、県境に戻るのに時間がかかった。さほどきついヤブではないが、地図上のわずか数cmを進むのに、平常の数倍もの時間を食っている。ようやく前ヶ岳と日尊の倉山との最低鞍部に着いたのが14時であった。昨夜の寝不足と水の補給を考え、この鞍部を本日のテントサイトとする。早くも大幅に行動予定に遅れがでる。空も曇におおわれ天候はかんばしくない。しかし、鞍部の森林帯なので、昨日のような雷による心配はしないで済んだ。水場は近く、西側の沢筋に下り3分上り6分である。

8月2日 ④

2時起床。あたりは真暗であるが、霧雨のような深いガスがかかっていた。天気図より、丁度前線が通過するところなので、一時出発を見あわせていたが、あたりもすっかり明かなくなった6時に出発をする。ガスが深く、磁石と稜線のみが頼りである。

900 m付近で尾根はほぼ直角に南西に折れるが、この頃より、雨が本格的に降り出してくる。歩き始めてわずか1時間であったが、急に雨が強くなった。しばらく、木の枝にビニールシートをひっかけ、屋根を作って雨宿りをしていたが、シートを打つ雨の音は更に強まるばかりである。じっとしていると、服が濡れているので震えが襲ってくる。天候は一向に回復しそうにないので、平らな所を見つけその場にテントを張り行動を打ち切る。960 m付近である。水は尾根より北西へ下り6分上り8分の所にあった。雨の方は、強くなったり弱くなったりで、遂に一日中降りっぱなしであった。予定行動に、すでに2日分の遅れをだす。

8月3日 ③→④

目をさますと相変わらずの雨である。朝食だけを済ませ、そのまま雨のあがるのを待つ。7時頃になってようやく雨はやんだが、濃いガスがあたり一面を包む。行動予定に遅れがでてきたため、当初の一日の行動予定距離と、実際に進める距離とを比較すると、実際ではかなり距離が短いようなので、きょうも、昨日に引き続きガスをついての出発となる。

日尊の倉山への長い登りは主に灌木帯である。足元には熊笹が茂っている。稜線をはずさないように慎重に進む。傾斜がきつくなり肩の荷に重みを増してき、ようやくピークに出る。日尊の倉山であることは確かなのだが、あたりを探しても三角点は見つからなかった。時々ガスの切れ間ができて、東側の小笠倉山の斜面に林道が延びているのが見えた。ピークにて第1回目の昼食をとる。

山頂より数十mくらい急な下りで、ヤブが急にひどくなる。スズタケと共に、あちこちからんでのびるブドウのようなツルに、しばしば行く手をはばまれる。傾斜はそれ程急ではないのだが、動く速度が遅いので、かなりの疲労感を伴う。

西から東へ流れ去るガスは、時々東方に切れ間ができ、大石田沢沿いに、地図で示されているより実際にはもっと奥まではいってきているような林道が見え隠れする。さらに、東側眼下に、小さな池も確認できた。地図には小さくその印があるが、ちょっとうっかりすれば見過ごしてしまうだろう。まわりをうっそうとした樹々に囲まれ、そこだけポツンと小さな静寂を保っている。

あたりは依然とガスに包まれたままである。最低鞍部が近くなり、尾根もやや広がりを見せてきた。3人でワンピッチずつトップを交替しながらヤブの中を進んだが、この1100 m付近で、完全なリングワンデルングをしてしまった。トップを交替してすぐに、もと来た道をまっすぐ北上していた。この時、丁度、リングワンデルングをしていると気づいたのが、先刻の池が、通り過ぎたはずなのに再び現われたからであった。15分程でそうと気が付いて幸いであった。なだらかな尾根が四方にのび、さらに視界はガスでほとんどきかないので、こうしたちょっとした目印のおかげで失敗を大きくせずに済んだことは幸いであった。

14時に最低鞍物に着く。先を危く。貉ヶ森の登りは最初は傾斜がゆるい。しかし、往々にしてこういう所はヤブがひどい。平らなのでどっちへ行ったら良いのかちょっと見ただけではわからず、磁石だけが頼りとなる。貉ヶ森山の1200 m付近に着いたのが15時55分であるので、高さに

してわずか10.0m登るか登らぬのに2時間も費やす。そこで16時の天気図をとる。時々霧ヶ森山の双峰が姿を見せ、またガスの中に消える。

霧ヶ森北西のピークに着いた頃は、もうあたりは夕闇が迫りつつあった。ガスっているのでなおさら暗さを感じる。17時15分に三角点のある南東のピークとの小さな鞍部に着き、時間を考え、比較的なだらかな場所のヤブを刈り払いテントを張る。水は各自持っていたもののみで間に合わせ補給はしなかった。

8月4日 ① → ②

6時10分出発。運よくガスはかかっているが、薄曇りの空である。20分で霧ヶ森山の三角点に出る。こんな山でも登る人はいるものとみえ、三角点わきに、氏名を書き連ねた紙があった。行く手には、細長い雲河曾根山が見えている。この山までは、見た目には、本当に目と鼻の先とでもいった感じであったが、スズタケと、灌木とそれらにからまるつるで猛攻撃をかけられた。稜線は、山頂まで行かぬ肩で西に折れているので、そのつもりでやや西側斜面をトラバースぎみに進んだが、西への稜線が確認できぬまま、30分程行き過ぎてしまった。木に登って稜線を探しあてる。尾根が広く視界は常にヤブでさえぎられているので、何度も木登りをくりかえす。この頃より、再び雲行きが怪しくなり、ポツリポツリと雨が降り出してくる。朝露にさんざん濡れ、かわききっていない体なので雨が降ろうと同じ事である。ましてや、きょうまででいやという程雨の攻撃にあつたので、しまいにはこういうものだと諦めになってくる。

雲河曾根山をおりた鞍部付近は、所々尾根が細くなって続いている。細長いなだらかな起伏を越した鞍部に15時半頃着く。あたりはただ、だだっ広いのみで、どちらの方へ稜線が続いているのか見当がつかない。ひどくはないが雨も降っていることなのでその場にテントを張る。1094m三角点の500m程東側の地点である。短く速雷が聞こえる。水は南側に下り8分上り12分の所にある。

夕食後これからの行動計画を協議する。予定と較べて、きょうまでで約3日分の遅れをとっている。連日の雨、及び去年と比較して予想以上のヤブの悪さで、この先もどういう状態になっているか見当がつかず、非常の場合を考え、また、中の又山までは稜線縦走を完成させようと思い、明日から食糧を節約することにする。

8月5日 ③ → ④ 時々 ⑤ → ⑥

きのうからの雨は、遂にあがりきらず、6時まで待機する。6時ごろから雨は小止みになり、8時20分薄くガスのかかった曇り空の中を出発する。かなり広い鞍部なので、あっちへ進んだりこっちへ引き返したりを繰り返す、ようやく1094mの三角点に出る。こんな所に三角点があるのかと思うような所である。石柱のまわりだけ木がかけられていて草が生えている。

ゆるい尾根をしばらくすると、約1120mのピークである。なだらかな頂きなので、北西へ延びているはずの稜線にどこから入りこんで良いのかわからず苦勞する。100m程下った所から北に1048mピークへの小さな尾根を分ける。この付近で、木の幹に何か刻み込まれているのを

見つける。相当以前のものらしい。

第1回目の昼食の時、ふと、きょうのコースは昨日までと較べて幾分楽になってきていることを感じる。これは、第2回目の昼食の時に、はっきりと感じられるようになった。あれ程悩まされたスズタケやつるがなくなってきた。ヤブも灌木だけが相手なら随分と肉体的、気分的に楽である。それでもやはり木々の間を縫ってスイスイという訳にはいかない。

西風が吹き午後は所々青空ものぞき、時々視界が少しでもひらける所に出ると、御神楽岳だとか日尊の倉山だとか、苦勞を重ねて越えて来た山々が薄く見える。何だかんだ言っても少しずつ目的を達成しつつあるという感慨にふける。

東岐山に14時15分に着く。標高1008m。途中で1ヶ所ガレ場があった。おりる途中でもヤブが切れ岩尾根状になっている所がある。この付近から南側の沢筋を見おろすと、地図で印されているよりかなり奥まで延びている蒲生川沿いの林道がわかる。

東岐山からは尾根はせばまり、左右は大きく落ち込んでいるので、方向を誤ることはない。忠実に地図通り稜線をたどれば良い。北側に室谷川を隔てて、岩肌をさらす駒形山の雄姿をのぞむことができる。山頂から下まで岩とガレの山である。

きょう中に小金井山を越えておきたかったが、出発時間が遅れたため、17時40分で行動を打ち切る。小金井山の500m程東の地点にテントを張る。ひどい傾斜地で、よくもこんな所にテントが張れたと驚く。水は南側下り5分上り7分。

8月6日 ①→②→時々③

テントサイトより小金井山までは30分とかからず楽に登れた。山頂には三角点がある。駒形山をはじめ新潟県側の山々が良くながめられる。だが、起床時には星が光っていた空が次第に雲におおわれてきた。

約880mの小さなピークまで、ヤブの中をなだらかな稜線が続く。ここで1度目の昼食となるが、おり悪しくわか雨に見舞われ、またまた濡れる事を余儀なくされる。全く連日の雨でうんざりする。

約800mの鞍部はうす暗い感じであったが、鞍部より次の約920mのピークまでは、ヤブも低く所々山肌をさらしている部分もあり歩き易い。このあたりでは割合高い方のピークである。展望も良い。灰色の雲に山頂を隠された中の又山が大きく望める。西の風がやや強くなってくる。2度目の昼食をとる。

稜線上のヤブはこれまでより、だいぶ楽である。所々クマザサや草の部分もある。もともと、そういう所は極めて短い、それでも灌木帯からの開放感と一種の安堵感を味わえる。

空模様はいよいよ怪しくなり、南側から北側へ稜線を越してガスが低く流れ飛ぶ。遂には、小金井山手前5分の地点で、猛烈な雷雨が襲ってきた。すぐさま尾根より南側へ10m程下った小さなガレ場に全員かたまって、ビニールシートをかぶりうずくまる。足元を雨水が流れ、雨のあがるまで40分を費やす。再び冷たいガスとバラつく雨の中を出発。この分だと、またすぐにも雨が降り

出してきそうなのでテントサイトを探しながら歩く。小金花山南西 500 m の小さなピークまでの間でテントを張る事を決める。小降りの雨の中を探しまわったが、適地がなく、1 時間程して、ひどくゆがんだ傾斜地ではあったが、何とかがまんできるくらいの所を見つけ、ヤブを刈り払いテントを張る。小金花山の山頂から 200 m 程西の地点である。時刻はすでに 16 時であった。水を取りに尾根の北側へおりたが、沢は岩が多く、水は 20 分も下らないと得られなかった。

8月7日 ○ → ◎ → ①

朝から雨である。2 時より 6 時まで行動を見合わせる。8 時頃より雨は小やみになったが、稜線の南側は一面低い雲におおわれ、中の又山方面も雲がかかっている。うす暗い天気である。連日雨に降られ、全員疲れぎみなので、きょうは、初めての沈殿を決める。

8 月 4 日からの食糧制限はずっと続けられており、10 時に朝食兼昼食のラーメンをひとり 1 個ずつ食べ、16 時に夕食を食べる。満腹感に飢え、食糧の荷上げをしてある中の又山のことばかり考えるようになる。

天気不良のままだろうと思っていたきょうであったが、どういう訳か午後から晴れ間がのぞく天気になってしまい、思わぬ好転に喜んだり残念がったり。シュラフや衣類、ザックなど濡れた物をそこいら中に広げて乾かす。18 時、明日の好天を願って就寝。

8月8日 ◎ → ①

2 時半起床。あいにくとガスが流れる空模様である。やはり昨日の晴天は 2 日ともたなかった。しかし、中の又山までの予定予備日 2 日はすでに使ってしまい、更に、昨日沈殿したので 3 日間の行動の遅れを出しているの、食糧に不足をきたし、本日はどうしても中の又山あたりまではどうしても行きたい。食糧制限を続けてきたおかげで、明日中に、中の又山の先の荷上げ地点に到達すれば良いのだが、できることなら、きょう中にそこまで達して、ゆっくりした夜を過ごせることを期待する。

ガスの中を出発。幸い稜線は細くわかりやすい。小さなガレたピークを越え、908 m のピークまで意外と楽に行けた。ヤブがかなり楽になっていることを感じる。ガレた地点が次第に多くでてくる。

稜線が南寄りに大きく弧を描き、その一番北の 880 m ピークに 8 時 25 分に着く。やはりピーク付近は木がなくガレである。この頃より、ガスは切れ間を見せ始め、やがて青空となる。中の又より北東にのびる尾根がはっきりとわかる。

このピークへ来る 1 時間程前に、2 箇所程ごく小さな草地があったが、ピークを 10 分おりた所に、40 m × 15 m くらいの田代があり、思わぬ所を見つけたと全員大喜び。何しろ、きょうまで、あっちにひっかかり、こっちにぶつかりといったヤブばかりだったので、小さいながらもこの意外なる楽園でしばしの間なごむ。きょうまでの長かった日々を思いうかべたりする。

できることなら田代にテントを張り 1 日ゆっくりしたいものだったが、もう日程がギリギリのところまで来ているので、全行程中ただ一つであったこの田代に長居をすることは許されず、再び稜

線を歩く。予定していた時間よりかなり早く歩ける。道こそないが明瞭な稜線と晴天のおかげである。この分だと、きょう中に中の又山を越え、食糧の荷上げ地まで行くことができるかも知れないという心が、歩調を早めることを手伝っている。所々かすかな獣道らしき踏跡がついている所がある。中の又山は既に目前に大きな広がりを見せている。

12時にこれから中の又山への登りにかかるという最後のピークに立つ。北側の沢は室谷川の本流で、きれいなスラブが見える。920 mのこのピークより南へのびる尾根を分け、県境上を北西にカーブしながら中の又山への登りとなる。ピークをおりた最低部の西側に湿った草地があり、容易に水が得られる。

いつの頃からか、メンバー全員が抱き続けてきた「中の又山まで……」という目標を思いつつ一歩ずつ山頂に迫る。

全く残念な事に、確かに中の又山山頂に着いたのだが、あたり一面の思わぬヤブの悪さで、三角点は遂に見つからなかった。それに、数年前、日本山岳会越後支部が残雪期に来た時の標識も見つからなかった。最後のピークをきわめた感慨がやや薄れる。

予定時間よりもかなり早く山頂に着いたので、きょう中に何とか荷上げ地まで行くことを決定する。日没で暗くなる頃までには行けそうである。

中の又より県境上を南西に下る。2 km近くひどいヤブに再び襲われる。地図からもわかるように急に尾根が広くなり、斜面もなだらかな所もあり、しばしば方向定めに苦勞する。クマザサの広い緩傾地では、今にもクマが出てきそうである。この一帯はクマが多く、更に北海道日高でのクマの事件を知っているのでなお悪い。途中黒い糞を見つける。自然、あたりに気をとられながら歩く。

幸いクマとの見合いはせずに済んだ。しかし、だいぶ時間をくった。県境が西北西へ向きを変える所あたりから、太陽は西に大きく傾きかける。ここからやっと悪いヤブに解放され、岩場の稜線がやや続く。既に16時半を過ぎている。あと2 km余である。北に落ちている砥沢川の源流地帯は岩場である。

荷上げ地に近づくと従い、あたりも少しずつ明るさをおとしてくる。しかし、偵察、荷上げで来た時の記憶がもどってきて、あたりの景色も見覚えのあるものとなる。昨年合宿ではライトをつけながら歩いたこともあったが、きょうはどうやら、そうなる前に着けそうである。

18時35分、待望の荷上げ地に到達する。空には月がかかっている。荷上げ地は県境が大きく南に屈折する地点である。すぐにテントを張り食事の用意にかかる。数個の罐に入れた荷上げ食糧はすぐに見つかる。水は、大谷川の林道へ下る道を1分程行った所に流れている。

この夜の腹いっぱい夕食と、ぐっすりとした睡眠は言うまでもない。

8月9日 ◎→①

6時起床。10時出発の予定だったので、もう少しゆっくりとしていても良かったのだが、きょうまでの習慣でこの頃になると、もう目がさえて寝てはいられなくなる。

日程の遅れを考え、きょう以後の八十里峠までの県境縦走はあきらめ、

計画の予備ルートを取り、ここより大谷川沿いの丸倉林道に下山し、鞍掛峠、五味沢部落を経て明日の浅草岳集中をめざすことにする。

荷上げ品を分配して9時15分出発。あまり歩かれていない様子の荒れた道を大谷川へ下る。偵察や荷上げでメンバーのうち何人かは既に歩いている所なのでこれからは楽である。

昼に林道に出る。ホッとする。南に林道を歩く。林道終点14時40分着。偵察の時と同じ所にテントを張る。

明日はいよいよ集中である。予定では7日集中であるので3日の遅れである。

トランシーバーが通じず、どういうことになっているのかわからない未丈ヶ岳隊の面々の事などを思い浮かべる。

8月10日 ○

いよいよきょうは集中である。絶好の天気である。最初の予定では、7日に既に集中していたはずであるが、本コースの思いもよらぬヤブの悪さで、最短の予備ルートをとってさえ、きょうの10日になってしまった。

鞍掛峠を越え、県道であったという道に出る。昔の姿を思い浮かべるよすがは何一つない。あるいは崩れ、あるいはクマザサの中に埋まった隘道同然の道が細々と続く。時おり浅草岳が見え、合宿の終わりを感じさせる。

6月の偵察時には、水芭蕉の一面に咲き乱れていた田代平を横眼に通過、八十里峠を越え、やがて林道に出る。そこより五味沢の浅草岳登山口まで約1時間。気がはやるにつれて足の方も速くなってくる。途中の水場で昼食。最後のサクラ尾根の長さには耐えるだけとなる。しかし、背中のキスリングも最初に比べればだいぶ楽になり、それ程の苦も感じない。

浅草岳手前のカゲヨのポッチ付近にて、定着隊の者であろう人影を認める。全員着のユニフォームに着替える。

浅草岳集中地着14時15分。定着隊の人々や既に到着していた未丈隊の者の出迎えを受ける。去年に引き続き今年も無事に集中できた事を喜び合う。

定着隊の面々は、もう何日も同じ所にいるわけで飽きている様子であったが、明日一日を自由行動とし、明後日下山と決める。

この日は、各隊の苦勞話に花が咲いたことは言うまでもないだろう。

8月11日 ①

自由行動日。天気が良いので、三々五々鬼ヶ面山方面あるいは浅草岳三角点方面へ出かけたりする。草地の上にビニールシートを敷いて思う存分の日光浴を楽しむ者もいる。穏やかな1日であった。

8月12日 ①

2時起床。4時半全員下山にかかる。おとといまでは、わずか10人にも満たない人数で行動をしていたので、きょうのように、20人もの人間がいっしょに行動すると、さすがに合宿という気

分になる。

速いペースで五味沢へ下山し、そこより数ピッチで大白川の駅に着く。予定の時刻よりだいぶ早かった。

桐生にて、夏合宿慰労コンパを行なう。

## 夏合宿御神楽隊・検討

合宿中、最も強く感じたことは天候の悪さということであろう。ヤブの中における実行動日数のうち、ほとんど毎日と言って良い程雨が降ったり濃いガスの漂う湿った日が続いた。夜の雷雨避難であるとか、行動中の雷雨などによる待機、あるいは、出発時の雨や10m先も確かでないようなガスが、本隊の行動を大幅に遅らした第1の原因である。合宿日数は限られているものであり、食糧の点も考えると、ガスが濃くても出発せずにはいられず、途中で雨にあたりしても行動は続けたりしたが、やはりそれには限度があり、晴天の日と比べれば、気分的なものも加わってそこには差が生じてしまう。この差は、いたしかたないものであるので、コース計画時にそれだけの余裕を持たねばならないわけであるが、本隊の計画には、食糧の点、日数の点において、余裕が十分ではなかったと思われる。行動が遅れた事は、悪天候につけ加えるに今年の合宿から判断したヤブの状況の予想を上回る悪さというものがある。実際、中の又山付近までは、山という山はすべてスズタケや枝の入り組んだ灌木、それにかみつくツルによっておおわれており、低山帯というものがどういふものであるか知らされた感が強い。わずか800mにも満たない鞍部など、本コースの中央部はほとんど千mを割っており、このような低山帯における合宿は今年が初めてであり、その様子を知るには良き機会であった。

以上の悪天候、悪条件、及び計画のゆとりの不足によって、本隊は予定コースであった荷上げ地点より県境尾根をたどって八十里峠までのコースは断念し、行動が遅れた場合の予備ルートとして考えておいた鞍掛峠を越える林道に一旦下山し、そこより浅草岳に向かった。このコースをとってさえ、集中限度日の8月10日になってしまったことを付記しておく。

その他、行動に必要な水の確保は、すべてテントサイト付近の沢筋に水があり心配はなかった。またテントサイトであるが、ヤブの稜線上であれ、どこでもテント2張りくらいなら、斜面も気にならぬくらいの所は見つけ出せる。ヤブを切り開きさえすれば、おおかたは快適とまでいかなくても寝るには十分である。

# 未 丈 隊

7月29日～8月12日

CL	記録	装備	長 谷	(3)
SL	写真		鎌 田	(3)
医療	食料		海老沼	(2)
気象			田 口	(2)
交信			尾 高	(2)
			渡 辺	(2)

7月29日～30日 ①→⊙雷

桐生 ~~→~~ 小出 (6:50) = (8:30) 銀山平 (8:50) ~ 奥只見 (9:45) — (10:45)  
丸山登山口 — (13:30) 丸山

7月31日 ⊙→⊙雷

◇ (5:10) — (11:30) 草原の上の稜線 — (14:30) 1367m P. の鞍部

8月1日 ⊙→○ガス

◇ (5:40) — (12:45) 1367m P. — (15:30) 鞍部

8月2日 ⊙ガス

◇ (5:30) — (6:45)

8月3日 ⊙→⊙ガス

◇ (6:15) — (10:40) 草原 — (12:20) 未丈ヶ岳 (13:20) — (15:30)  
大鳥池

8月4日 ⊙→○ガス

◇ (5:10) — (9:40) 赤紫沢の頭 — 蓬沢の頭手前草付 (15:00)

8月5日 ○ガス→⊙

沈 殿

8月6日 ⊙→○ガス

◇ (4:40) — (5:25) 蓬沢の頭 — (6:50) 三ノ沢の頭 1318.5m — (10:50)  
二ノ沢の頭 — (12:30) 一ノ沢の頭 — (15:05) 鞍部

8月7日 ⊙ガス

沈 殿

8月8日 ①

◇ (4:45) — (5:50) 一ノ沢の頭 — (10:05) 623m P. (12:00) — (12:40)  
舟着場 (13:45) — (14:05) ダム — (15:10)

8月9日 ○

◇ (5:30) — (8:50) 大白川 (9:45) — (10:15) 六十里越 (10:45) — (11:10) 六十里峠 — (13:35) 南岳 — (14:45) 鬼ヶ面山 (15:00) — (17:15) 定着地 浅草岳 ◇

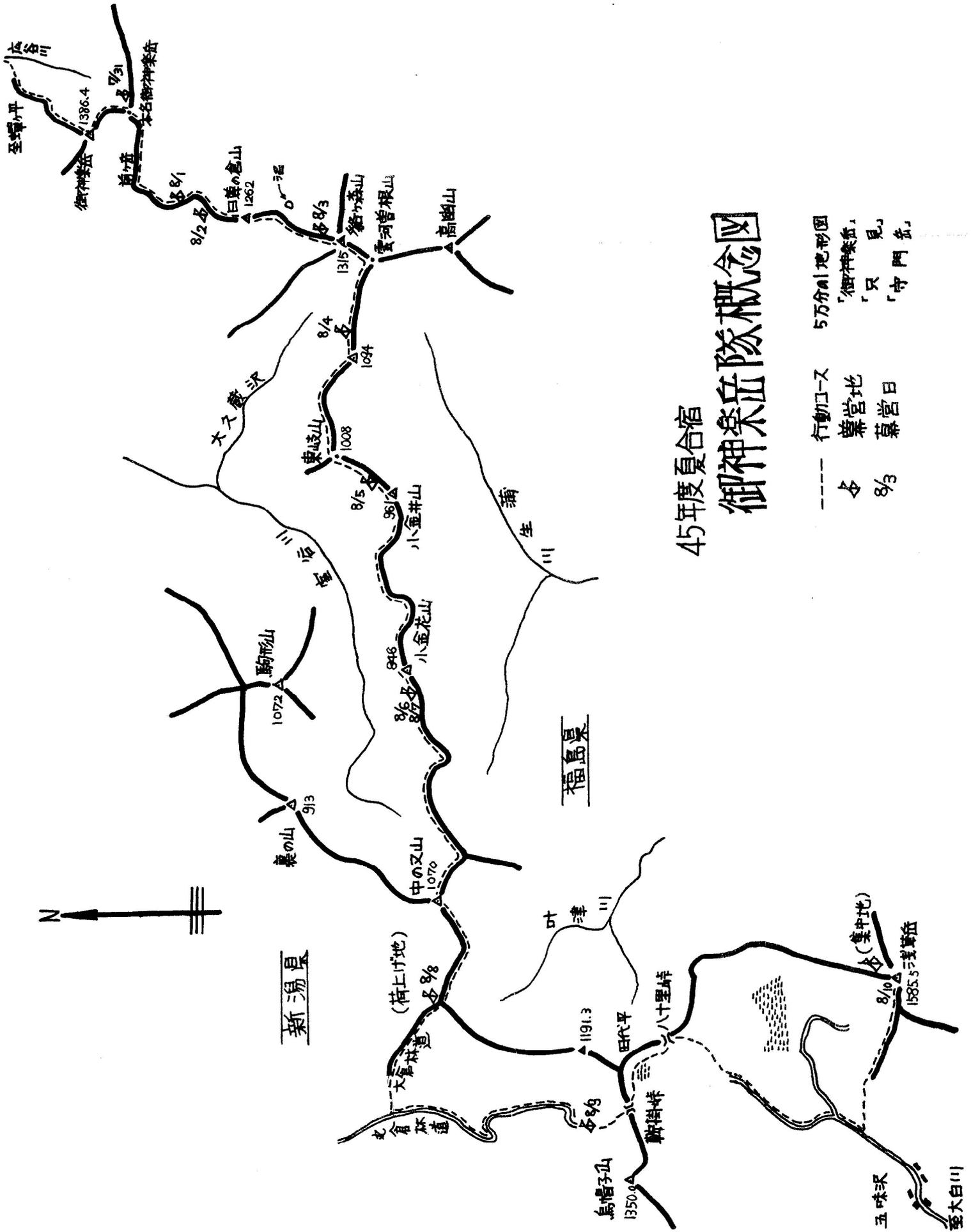
7月30日

29日の夜行で桐生を出発する。トンネル経由奥只見行きバスが不通ということが、合宿直前に判明したため、夜行となってしまった。合宿としては、まずいが、計画通り実行することにした。小出に着いて仮眠をとり、始発のバスで銀山平に向かう。銀山平付近も、去年の集中豪雨の跡がまだ残っていた。銀山平から船を使って、静かな湖面を奥只見口に向かう。奥只見口に着いてみると去年と変わらず、中学生等観光客でいっぱいである。ここから丸山への登りであるが、地図上にある道を捜してみたがわからず、売店で聞いてみた。地図上の道は急であり、もう一本道があるとのことで、こちらの方が楽であるとのことであつた。楽な道を選ぶ。

合宿の一步目を踏み出す。背中の荷が、非常に苦になる。ダムを右に見て変電所に向かう。変電所へは、よい道が続いているが、それを左に見て、右の砂利道を進む。林間学校の宿舎である山の家の中を通りぬけて、裏手に出る。そこが丸山への登山口である。ここには大きな導標が設けられている。丸山の登りは、最初は急である。薄暗に樹林帯の中の道を各自黙々と、背中の重みに苦しみながら進む。30分—5分のペースであるが非常に苦しい。予定よりだいぶ時間を費やしているようである。途中で昼食をとる。腹はペコペコ。全員よく食べる。だがザックの重みはだいぶこたえているようである。ゆるやかな登りとなっているが、なかなか山頂へ着く様子はみられない。小さな沢を数ヶ所越え、急な登りが見えてくる。たぶんこれを登りきれば、山頂であろう。しかし、1名遅れ気味になる。この沢はわずかに水があり、汲むことが可能である。もうまもなく山頂であるので、遅れ気味の者に1人つけて、残りは先に進む。10分程で山頂である。山頂手前5分程のところ、左への分岐がある。たぶん、地図上の道であろう。時間的に考えれば、地図上の道をとるべきであつたかもしれない。山頂は大きく切り開かれており、アンテナか何かであろうコンクリートの柱が1本建っている。

全員の疲労、時間的な関係、これから先が、ヤブであることを考慮して、山頂に幕営することにする。山頂に着いた頃は晴れていた空が、だんだん曇り空に変わってきた。テントを張り終えてから、明日からのヤブの状態、方向の確認のため、偵察に出かける。しかし、とうとう夕立となってしまう。雨の中を、偵察に向かう。地図でもわかるように、これから先は、広くなだらかで目標となる山もないため、ぜひとも偵察が必要である。ヤブの状態は予想以上にひどい。全く、視界はきかない。ただ木々が見えるだけである。丸山から5分程北に進み、そこから西北西に進めば良いであろうとみて偵察を終える。山頂に戻るところには、一時雨もやみそうになっていた。食事を終えた頃から雷が鳴り始める。しかし、たいしたことなく止む。19時就寝。

7月31日



# 45年度夏合宿 御神樂岳隊概念図

- 行動コース
- △ 幕営地
- △ 幕営日
- 5万分の地形図
- 「御神樂岳」
- 「只見」
- 「守門岳」



3時起床。空には星がまばゆいほど輝いている。初日から行動に遅れを生じているので気はあせるが思うような行動がとれない。ヤブの中でこれ程行動が制約されるとは、思いもよらなかった。丸山からは、偵察通り北に5分程進み、そこから西北西に進路をとり、木に登り、西北西に見える小さなピークを目標にとる。目標にとったのは良いのだが、行動中は一切見えず、頼りになるのは磁石だけである。最初のうちは、ナタを右手に持ち、ツル、小枝などを切りはらっていたが、とうとう、腕が痛くなり、あきらめる。腕とザックで木々をはらいのけながら進む。いくら進んでも樹林帯の中である。目標としたピークには、いつまで行っても近くならず、だんだん気持ちにあせりがでてくる。ザックはまだまだ軽くならず、苦しいこと、この上ない。登りはたいしてないのだが平地であるので、蛇行につく蛇行である。丸山の北西にある湿地帯はついに発見できなかった。地図上で1200mの等高線で囲まれたひょうたん形をした北西部に着いたのが、8時半ごろである。ここで道に出る。この道は南北に走っているようである。この道が1376mピークへ続いていることを期待して北の方向に10分程偵察してみるがどんどん下っていくようなので、あきらめて戻る。たぶん「かうのき沢」の方向に続いているのであろう。ここで1回目の昼食とする。A隊との交信、天気図の作製を行なう。交信は不可能であった。予定からすれば、きょうは御神楽岳への登りであるから、交信できないのも無理はないかもしれない。

尾根筋を進むとヤブが非常にひどいので、沢筋を進むことにしたが、急であつて、ザックの重みに引かれてあぶなっかしい。沢筋を登りきり、また尾根筋を行く。1時間程すると、やっと視界が開かれ、稜線上に出る。やっとヤブから開放される。それでも腰ぐらいまでは、松や笹のヤブである。松に足をとられながら進む。ここからは北に進路をとる。ほどなく右下に湿地帯、草付が見えてくる。水もあるようなので汲むことにする。2人水汲みに行く。下り10分、登り20分位のようだ。湿地帯にはアヤメ、ニッコウキスゲ、クルマユリ、モウセンゴケなどあるそうである。沢が流れており、水は豊富とのことである。昨日の雨の影響か、水はややにごっていた。この湿地は、かうのき沢の湿地でないようである。先程発見した道は、この湿地帯に通じているのではないか。方向としては、そのようであるが、未確認である。近くには、ガラスの破片があることからして、以前、相当前であろうが、何か道があつたことと思われる。ここで充分休みをとる。空は晴れ渡り、眼下には草原が広がっていて、この上ない気分である。これから先またヤブこぎと思うと、うんざりである。予定よりだいぶ遅れているがくたくたである。進むのがめんどうであるが、腰をあげることにする。ここからは稜線をまっすぐに進めば、道に迷うことはない。北に進む。だんだん下りに向かう程ヤブの状態はひどくなる。鞍部はまた樹林帯となってしまう。またまた磁石だけがたよりとなってしまう。トランシーバー交信を樹林帯の中で行なうが、全然応答なしである。あきらめて進むが全員バテ気味であり、疲労の色はかくせない。そろそろ、幕営地を捜し始める。わりと良い幕営地を見つけさせたのでそこに決定してしまう。何はともあれ一服する。タバコのうまいこと。テントを張り終え水場探しである。幕営地付近に、鋸目が数ヶ所あるがどこから入ってきたか不明である。

水は北側の沢を下ることにする。どんどん下る。約20分程下って豊富な水に出合う。しかし、非常に急なため登りには苦勞する。登り約30分程である。この辺は標高が低いので、ほとんどの沢を下っても水はあるようである。

夕食を終えてシュラフに入った頃からものすごい雷が鳴り始める。7~8時まで続く。テントの真上を稲光が走る。いつテントに落ちるか不安であるが、まわりは高い木々に囲まれているので、テントに直接に落ちることはないであろう。また避難の場所がないので避難はしないこととする。雷は沢に尾根から走るといわれているので、沢に避難することは危険である。

しかし、それにしても恐ろしい。不安であるがどうしようもない。8時ごろ雷はおさまる。8時半就寝。

### 8月1日

2時起床。今までのペースでは、ちょうど1日遅れである。このままのペースで行けば未丈ヶ岳へはあと2日はかかりそうである。何としてでも、急がなくてはと思いつつも気があせるだけで思うように進まない。

テントサイトから本格的な登りのヤブとなる。ザックが木にひっかかり思う様に進まない。急な登りを木につかまりながら進む。足より手である。これがヤブこぎの本当の姿であろう。小さな枝が顔にあたり、顔中傷だらけである。方向は真西で稜線を進めばよいのだから楽である。しかし、思うようにピッチはあがらない。やつのことでピークに到達できた。ピークは小さな草付きになっており気分は最高に良い。休んで昼食。その後は小さな登りくだりをくり返す。しかし、草地は一部分で、あとはひどいヤブである。

このあたりでW氏の皮膚に発しんが出始める。どうも木にかぶれたようである。まさか木にかぶれるなど予想もしなかったことである。このあたりはつるなどないが、下草が多く、まだまだ低山地帯であることを思わせる。

青々とした木の葉に囲まれるのは良いがどうしても前進しにくい。きょうは1376mP. を越えた辺りであろう。ピークへ出れば楽であるが、小さな鞍部にでも入ればまったくひどいものである。だんだん空模様が悪くなる。まだ雨にはなりそうにもない。ピークに出ても視界はよくない。景色が見えないことは何んと味気ないものか。1376mP. 手前で交信ならびに昼食とする。しかし、A隊の通信を聞くことができない。こちらの予想以上の遅れを連絡しなければならないのに。何んとくやしいことか。トランシーバーを投げ出したい気持ちにもなってくる。1376mP. の登りは急であるが、ヤブの中であるため、急であることを感じさせない。ただ、黙々とヤブの中の前進である。1376mB. に到着できたのは13時前であった。もう空はどんより暗くなっている。今にも降り出しそうである。ピークで休まずに進む。割合と急な下りである。この下りはひざぐらいのヤブとなっている。しゃくなげの木が足元からみつく。しゃくなげが多い。鞍部近くになると、やっぱり樹林帯となってしまった。鞍部に出てから、テントサイトを捜し始める。鞍部から1時間ぐらいのところで、尾根上の沢筋とでもいふべきところであろうか、幅2mぐらいの細い木々に囲

まれたテントサイトを見つける。雨が降れば下には水が流れるのはわかっているが、他に良い場所は見つかりそうにもない。このテントサイトの手前で、沢を下って水捜しを行なうが、急になってしまって降りられない。約30分程下ってみたがそれ以上は危険で下れなかった。東西両方の沢に別れて下りたのだが両者とも失敗であった。水は得られなかったがテントサイトのすぐそばに雨水が溜っていた。これを用いることにした。16時頃から雨が降り始める。水不足のおり好運な雨である。しかし、明日の行動までには晴れてくれることを祈る。この雨は時々止むだけで一晩中降り続ける。明日の天気が気にかかる。この雨は、東北地方を低気圧を伴った前線の通過によるものと思われる。

8月2日

朝から雨。2時起床を雨のため延期。5時頃から小止みになる。雨が止んだ合い間をぬって出発する。30分も進まないうちに本降りとなる。全員ずぶぬれとなってしまう。寒さも加わり休むこともできない。とうとう幕営地を捜すことにする。しかし、ヤブの中であるためなかなか良い場所が見つからない。昨晚と同じような沢筋を見つけだし、そこに幕営することにする。どしゃ降りの雨となってしまう。どうも東北地方の前線が活発化したようである。全員素裸になりラジウスで体を暖める。体が暖まった頃には、浸水である。グランドシートの下を水が流れている。ほんとうに川のようにになってしまう。食器で水をかいたす。一時強く、一時弱くなることをくり返している。またこれで1日遅れとなることを考えるとうんざりである。まったく予期しなかったアクシデントである。

9時のA隊との交信はできず。A隊の行動、様子を知りたいがどうにもならない。12時頃退屈しのぎに他のアマチュア無線局を呼び出す。八海山にいる移動局と交信して2時のA隊との交信の中継を頼む。方向的には全く逆であるが何とか交信できたらのことからである。しかし、2時の交信では八海の移動局され入らない。この頃から雨は小やみとなる。ときどきザーとくるだけであった。夕方グランドシートとビニールシートを入れかえ濡れないようにした。水はポンチョを揚げ雨水をとる。ラジオのパッキング不完全からラジオが故障してしまい天気図をとれない。肝心な時にも思ってもあとのまつりである。ラジオ内部に水が入ってしまったようである。

8月4日

2時起床。ラジオが直った様なので、山岳気象解説を聞いてから出発することにする。雨は止んでいる。しかし、一面濃いガスである。山岳気象解説から判断して一応天気はもつようである。渡辺氏のかぶれはだんだんひどくなり、きょう中に下山させることにする。顔にまでかぶれが現われてきて目のまわりなどはひどいものである。何んとしても末丈ヶ岳には12時まで着かなければ下山できそうにもない。急ぐことにする。前日の雨のため、全員びしょ濡れとなってしまう。風のため、寒さがこたえる。休めばなおさら寒くなるので休むこともできない。ピッチを長くして休みを少し長くする。木にさわるだけで顔中水だらけになってしまう。鞍部になると倒木、落葉、ツルがひどくなり、下草、熊笹にも苦勞する。まだガスに包まれたままである。ただ磁石で北を目指して

いだけである。次のピークを見つけようにも全然見えない。下りはまだましであるが、鞍部から登りにかけてはヤブがひどくなってくる。ツルがザックにひっかかり、体で押し分けても前に進めない。びっしりつまったヤブである。未丈に近づけば近づくほどひどくなる。急な登りが多くなってくる。急であることはそんなに苦にならない。それよりヤブがものすごい苦痛である。渡辺氏は早く下山してもらおうために1人で先に行ってもらふことにする。とうとう人員は5人になってしまふ。さびしいかぎりの夏合宿である。

急な登りになってきた。先に行った渡辺氏から北東に進むとガレ場に出るから西よりに進めと声がかかる。西よりに道をとって行くとヤブがひどくなってきたのでヤブの薄い方に進んでしまふ。案の定ガレ場に出てしまふ。とても登れそうにないので少し登ってからまたヤブに再突入する。足にからまるツル、シャクナゲが足手まといになる。しかし、このピークを越えてみるとほどなく草原に出る。気分は良いが、まだガスがかかっている。こんな草付きが東面に3ヶ所ぐらい続いている。今までの中でここはまともなテントサイトと思われる。水の方はまずだめであろう。

このまま未丈まで続いていたらなあと思っているうちにすぐヤブに突入である。もう未丈に近いことだし全員元気を盛り返し、進んで行く。またシャクナゲ、ツルがひどくなってくる。ザックにからまると身動きできない。未丈手前に6ヶ所ぐらい小さなピークがある。みんなでここが頂上だと思いつつ悪戦苦闘である。これで晴れていたなら未丈がはっきり見えるはずなのに。未丈岳数100m手前から道がある。背の高い熊笹の中と変わる。山頂手前で左に三叉口への下山路の分岐があり、まっすぐ行くと左に山頂への道がある。まっすぐ行くと草原に出る。まだ雪渓がある。小さいが水は豊富である。所々、日光キスゲ、モウセンゴケであるだけであるが、久しぶりに道に出た喜びの方が大きい。

この草原も、もう少しすれば、一面美しい高山植物でおおわれるであろう。草原で1時間の大休止をとる。全員ここで幕営したがっているが、予定が大幅に遅れているためどうしても大鳥池までは行かなくてはならない。

未丈から草原の上の道を進む。草原には数日前のものと思われるテントサイトのあとがあった。草原からまたヤブの中に入る。しかし、ここから赤布もついており、踏み跡もしっかりしてほとんど道になっている。未丈までのヤブに比べれば数十倍も早く進むように思える程早い。しかし、調子に乗って赤布を見落とし道が不明になるが、すぐに見つけだす。ここでは、踏み跡さえ慎重にたどれば迷うことはない。走るようにして大鳥池に向かう。大鳥池分岐からはずっときれいな道が続いていて、まちがえることはまずない。大鳥池は割にきれいである。しかし、池の中にはオタマジャクシ、かえるなどいろいろ小さな虫がいるようである。この池の水を飲料水とする。池は前日までの雨のためか増水している。池の西上方にテント1張りの草付きがあり、そこに張ることにした。虫が多く、さされてしまふ。水場のそばであるからしょうがない。4時頃一時雨がパラつく。ガスが強くなる。

8月5日

まだ雨が時々パラつく。大鳥池から分岐まで約100mの登りとなる。割に急な登りをもとに戻る。大鳥岳への分岐には数日前の踏み跡があり、草の倒れた跡がある。未丈までのヤブに比べれば全然楽である。踏み跡をたどるだけである。大鳥岳分岐はちょっとわかりにくい、適当に方向をとって行けばそのうち踏み跡に出るであろう。

数日前のパーティの踏み跡がなければ相当苦勞すると思う。分岐からの最初の鞍部は幅が広く赤紫沢の頭への登りあたりから天気は回復してくる。青空がときどき現われるようになる。やっと晴れてくれた。赤紫沢の頭への登りに人影を発見する。「オーイ」と呼ぶと返事が返ってくる。合宿6日目にして人の姿に出会う。前のパーティーに追いつこうと急いで行く。赤紫沢の頭の数ピーク程手前のところにビバークした跡がある。なんでこんなピークにビバークしたのかわからない。あたり一面ゴミだらけであった。たぶん先程の人達のものであろう。もう少し常識を守ってもらいたいものである。赤紫沢の頭でA隊と交信しようと思ひ急いだが、9時までには着けそうにもないので途中で交信する。全然応答がない。

そこからすぐ赤紫沢の頭である。頭には、小さな標識がある。残雪期の縦走の時取り付けたものと思われる。赤紫沢の頭は1369mである。わずかに踏み跡がある。ピークはジャクナゲや松の小枝でいっぱいである。ピークはこんな状況で鞍部はツルと倒木、密集した木々に悩まされる。赤紫沢のピークから小さな草地が見え始める。その草地で先程のパーティーが濡れたものを干しているようである。ゆるやかな登りを進む。依然として、先程のパーティーの踏み跡が残っている。この踏み跡によってだいぶ楽をさせてもらっている。しかし、楽とは言っても丸山から未丈の間に比べてのことであって、ヤブこぎに変わりない。5万分の1の地図の大鳥岳の岳の字の付近に小さな草地と池塘がある。テントは4~5張り程度可能であろう。この池塘の水はあまりきれいではない。しかし、きょうから本格的な水制限をしているため全員この池塘の水を飲んでしまう。ここで1時間程休み、濡れた物を乾かす。予定より遅れているのに休むのもどうかと思ひしたが仕方がない。疲れているのである。12時から13時までである。この先沈殿をしたならば予備ルートを用いても集中不可能となってきた。きょうはどうしても、蓬沢の頭を越えたい。草地を過ぎてからまた稜線上のヤブこぎである。だんだん慣れてきたのか、ペースがわずかに早くなったように感じる。1時間-5分のペースにもっていきたいが、残念ながらそのペースではちょっと無理なようである。蓬沢の頭手前鞍部で東側から声が聞こえてくる。よく見ると、先程のパーティーが幕営している。草地も割と広く南北にのびている。前のパーティーに追いついた気のゆるみから、きょうはここまで決めてしまった。上級生のいない甘えからかもしれない。時間的にはもう少し進めたのだが、なんとなく幕営地としてしまった。

聞いてみると東工大のワングル部ということであった。20人以上いるらしい。われわれは5人である。なんとわびしいことか。われわれ全員ボロボロの服装である。

北側の草地を幕営地とする。池塘があるがあまりきれいでない。北側の沢に下ってみたが30分以上下っても急になるばかりで、水は流れていない。池塘の水を用いることにする。池塘の中には

大きな生き物はいないようである。この草地には相当多くのテントを張ることが可能である。しかし、稜線上から注意深く見なければ見えないので気づかずに通過してしまい恐れもある。

16時頃から雨が降り始める。ガスも濃くなってきた。明日の天気が心配である。

8月5日

1時10分起床。時計を見まちがえて1時間も早く起こしてしまった。めんどうなので起き出してしまふ。ガスが深い。視界は非常に悪く10mぐらいしかない。ときどき雨。風も一時強くなる。行動したい。しかし、ガスに囲まれて磁石1本でヤブこぎする自信がない。つくづく4年生でもいてくれたならばなあと思えるのだが。出発を見合わせる。10時までガスが晴れないならば行動を中止することにする。実質的に沈殿2日目となる。もう予備ルートをとるしかない。予備ルートでも集中予定より遅れる可能性の方が強い。10時までガスは晴れない。11時頃から晴れ始める。やはり出発すべきであったのか。半日のんびり過ごす。

8月6日

2時20分起床。幕営地から約5分程で北側に大きな池塘がある。2張りぐらい張れそうである。蓬沢の頭の手前には池塘が多い。

まず池塘の水は干あがることはないだろうからテントサイトには好適であろう。この辺では沢に下つてもほとんど水は得られないだろう。水は雨水か池塘に頼るしか方法がない。

大きな池塘の先を右に入れば良いものを左に入ってしまう道をまちがえる。すぐ気がつきもとに戻る。またまたひどいヤブである。この辺から下草が少なくなる。しかし、ツルが多くなり木はびっしりとつまっている。東工大が残していった木の皮のむけた跡を頼りに進む。しかし、快調なベースである。この分ならば毛猛山の鞍部までは行けそうであろう。蓬沢の頭には標識はない。三の沢の頭には三角点がある。標識もある。三の沢の頭からはピーク付近ではほとんどひざ下のヤブとなる。しかし、足が重たくなる。1204mピーク付近に前日のパーティのピバークした跡があった。ゴミが一面散らかっている。非常識この上ない。ガスは朝からずっと濃い。次のピークが全然見えない。がむしゃらに進むだけである。鞍部に出ればヤブが濃い、ピークが割合に多いのでベースは早い。二の沢の頭の手前でA隊と交信する。しかし、全然応答なし。二の沢の頭から一の沢の頭まではすぐである。一の沢の頭には12時過ぎに到着できた。予想以上の早さで来てしまった。ここから東工大のパーティは黒又湖に下山したようである。われわれは予定通り北東に方向をとる。三の沢の頭から一の沢の頭まで幕営好適地はない。しかし、鞍部に無理すれば張れないことはない。一の沢の頭からは東工大の踏み跡もなくなりちょっとめんどうである。ここからは青々とした葉は目につかないようになる。足元は落葉と腐触土だけである。それでも木は密集している。ちょっと急な下りになる。下つてしまふとあとは幅の広いヤブの中となってしまう。ガスがひどく暗い感じがする。2時頃交信。その間に沢を下つて水を捜してみる。沢にはほとんど水は流れていなくて、雨水がたまっているだけである。雨水を汲んでいる最中にザーと降り始める。大急ぎでまた出発である。全員またもやびしょぬれとなってしまう。ほとんど今まで毎日雨にやられている。雨はや

みそうにもない。もう少し進みたいが幕営地を捜し始める。なかなか良い場所が見つからない。やっと一の沢の頭の最低鞍部に張ることにする。張り終えた頃には雨が止んでしまう。明日の天気心配である。夕方から夜にかけて雨が降り続く。

#### 8月7日

2時20分起床。昨日の天気図から判断して前線は北上するだろうと予想したのだが、残念ながら南下してきたようである。朝からひどい雨である。山岳気象解説を聞いてから停滞するか決定することにする。山岳気象によると、新潟地方は集中豪雨という話であった。A隊のことが心配となる。寒冷前線が南下している。この前線通過による雨と思われる。出発したいのだが危険性もあるので停滞とする。これによりこの先の行動を変更しなければならない。毛猛山から百字ヶ岳にぬけて鬼ヶ面に向かっても最低3日間は要する。集中最終日には間に合わない。かといって毛猛山～前毛猛山はなおさら不可能である。最も安全な方法は未丈ヶ岳に戻ることであろう。これも4日間は少なくともかかる。残る唯一の方法は一の沢の頭から黒又湖に下山することである。これも難関がある。黒又湖までは道があることは確かである。黒又湖に橋があるかないかである。もしなければたいへんなことになる。上流に戻れば水量が少なく渡河できるであろうと予想する。一応黒又湖下山、道路沿いに大白川に向かい時間を見て、六十里越か五味沢経由で浅草岳集中と決定する。雨は12時頃小止みとなる。ときどき陽がさすようになる。やっぱり進むべきだったかとも思われる。前線が南下してしまっただけでいい。明日から天気は回復するようになるだろう。水は一切雨に頼る。沢で水を得ることはほとんど不可能である。1時間以上沢を下ればなんとかなるかもしれない。しかし、急な沢であることは注意を要する。

#### 8月8日

2時起床。全員足取りが重そうである。無念にも縦走途中であきらめるとは、なんとしてもやりきれない。それでもペースは早い。内心ヤブから解放されることを喜んでいるのかもしれない。雲海が全くすばらしい。晴れてくれて全くよかった。一の沢の頭に戻ると毛猛山がくつきりと雲海の上に見える。無念の一語につきる。昨日の幕営地の上を雲が流れていく。合宿10日目にしてやっと雨にやられずにすみそうである。

一の沢の頭から1時間程はヤブであるが、あとは快適な道が続く。もう足取りは非常に軽い。完全に道である。走るように下っていく。途中のA隊との交信は一切だめである。これでA隊に途中下山を伝えることはできなくなってしまった。

こんな良い道が続いているのだから黒又湖にもなんらかの渡河施設がありそうである。あつという間に623mピークに出る。ここから道が2つに分かれている。西側の道におりてみると途中で消えてしまっている。急なガケを偵察してみるがほとんど下れそうにない。あきらめて北側の道に戻ることにした。北側の道を偵察すると炭焼き小屋があったのでこれは下れそうである。炭焼き小屋からもっと下ってみると水面に出てしまいあたりを見まわしても渡河施設は全然見えない。こわれかけた舟着き場があるだけであった。対岸には道があるのがわかる。全然渡る方法がない。湖水

に沿って上流に行くこともできない。もとに戻って尾根の途中の沢を下るしかない。ここから戻るわけにもいけないので、イカダを作り渡ることにした。ザックだけはイカダで渡し、あとは泳いで渡ることにした。対岸まで約50 mあり、ほとんど流れはない。

その時舟のエンジンの音が聞こえてきた。釣舟のようである。お客が1人乗っていた。大声をあげたが見向きもしてくれなかった。しょうがないので、小屋のこわれた材木を用いてイカダを作り始める。1時間程でイカダの外形ができあがった頃また舟がやってきた。先程の舟である。釣客をどこかでおろしてきたらしい。今度は近づいて来てくれた。事情を話して対岸まで渡してもらいたいと言ったところ黒又ダムまで乗せていってもらえるとのことであった。助かったと思った。イカダをばらして材木を元どおりにして舟に乗船する。約20分程でダムに着いてしまった。よくお礼を言って別れる。ちょっと休み、すぐ林道を歩き始める。ヤブから解放され、喜び勇んで進む。舟着き場からワンピッチのところまで幕営する。アブが多い。

8月9日

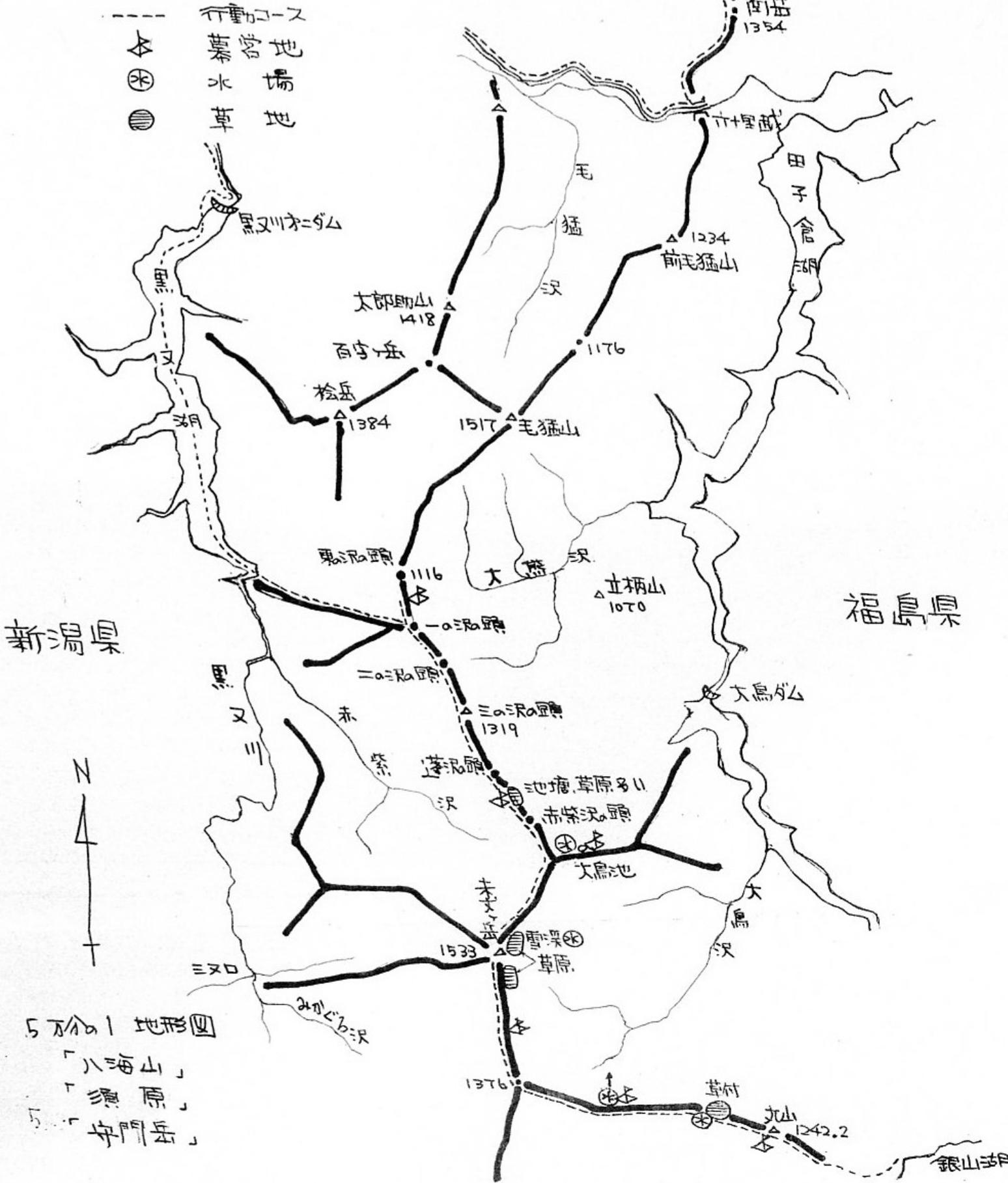
3時起床。快晴である。黒又第1ダムの林道を湖に沿って進む。ダムをぬけて国道に出る。国道から小型トラックに乗せてもらって大白川まで行く。五味沢と六十里越の分岐でまたトラックに便乗させてもらい六十里越に向かう。天気は快晴。トラックもまた楽しいものである。ほとんどの車は六十里越までは、はいていないようである。ほんとに運がよかったのだろう。

浅草岳登山口から登り始める。坦々とした道を登りつめると六十里峠である。前毛猛田子倉湖が美しい。マイクロウェーブの中継所を右に見て、ほどなくで鬼ヶ面小屋である。屋根だけは新しく、内部はかたむいているようである。送電線の下を通り、裸山乗越の分岐を通りほとんど登りはない。南岳への登りは割合とゆるやかである。南岳から右側はバッサリ切れており、雄大な岩場となっている。恐ろしいより美しい。鬼ヶ面の登りあたりで1人バテてしまう。もう少しのしんぼうであるからがまんしてもらおう。ヤブこぎに比べれば十分楽なはずなのに少し急いだためかと思われる。鬼ヶ面を越え、もうほんの少しで浅草岳である。もう少しで集中地であろうと思われる所でユニフォームに着換える。ちょっと登ってみるとすぐ下にテントが2張り見える。定着隊のテントだ。定着隊はまだわれわれが来たことに気づいていないようだ。一気にかけおける。やっと気がついたようで、全員で、迎えてくれた。

45年度 夏合宿

# 未支隊概念図

- 行動コース
- △ 幕営地
- ⊗ 水場
- ⊙ 草地



5万分の1 地形図

「八海山」

「須原」

「守門岳」

银山湖

## 夏合宿 A隊気象報告

7月30日

太平洋の高気圧が、はるか東方より張り出していて、夏型である。日中は晴れて暑い。16:00頃より雷鳴がして、16:45～5:45まで雷雨に見舞われる。

7月31日

台風6号の弱まった熱低が九州南西にあり、日本の上層には冷たい空気があり、又下層には南の海上より湿った暖かい空気が流れ込んでいるので、大気の状態は不安定であるという。

日中は曇ってときどき薄日がさすが、蒸し暑く積乱雲のような雲も見られ雷が心配された。でもT.S.に着いた頃は晴れて雷は来ないようだった。しかし、19:00頃より雷雨となり、22:00～22:10まで雷が激しくなったので避難する。雷が去ってからは星が輝く。

8月1日

朝のうちは曇っていたが、昼頃までは晴れて暑い。午後はまた曇ってしまった。

8月2日

寒冷前線の通過のため、2:00に起きた時は、すでに雨が降っていた。小降りになって出発するが、雨は止むどころかますます激しくなるばかりで、1時間ぐらい歩いて行動を中止した時は、完全なドシャ降りとなる。本日は夕方まで雨は降りっぱなし、ガスもかかって寒いくらいだ。

8月3日

南の高気圧は弱まってしまって、北の高気圧が張り出しているのので、気温は低めであり、天気も曇りでときどきガスがでて、雨もちょっとパラつくという、はっきりしない天気であった。

8月4日

午前中は曇りであったが、雲の間から陽が射すこともあった。しかし、徐々に天気は悪くなり、ガスもかかり雨もパラつく。15:30以後のT.S.後は雨が降り続く。

8月5日

朝から曇り空であり、14:00頃までにわか雨が降ったりする。それ以後、晴れてきて、夜は星さえ輝いた。

8月6日

朝のうちは雲が多かったが、晴れそうだった。雲海もきれいに見えた。9:00頃から雨が降ったりやんだり、午後は雷もくる。それ以後は雨が降り続く。

8月7日

前線が通過のためか夜中から雨が激しく降り続く。新潟地方は大雨洪水注意報が出される。雨が8:00頃あがると、太陽が輝きだし暑くなる。

8月8日

9:00頃までガスが出ていた。視界は5～6m。日中は晴れて、夕日がきれいだった。

8月9日

朝8:00頃までガスがかかっていた。それからは晴れてきて暑い。

8月10日

朝風が強くて目がさめる。9:00頃までは快晴。それ以後は雲が出たが、あいかわらず晴れて暑い。

8月11日

朝のうちはガスが出ていたが、日中は晴れて暑い。

8月12日

晴れて暑くなる。無事、学校に帰る。

おわび

夏合宿B隊気象報告および天気図は、部誌係の管理不備により紛失してしまいました。この紙上をもって深くおわびいたします。

B隊係

## 夏合宿反省会抜粋

8月13日

隊に長老がいた方がよい。なぜなら、2,3年だけでは意気消沈しちゃうからネ。いろいろな相談相手になってもらえるしヨ。来年は4年生に多く出てもらいたいナ。

午後の2時~3時までにはテントサイトを見つけるのは早過ぎはしないか。出発がガスのため遅れたもんナ。天気が悪かったからナ。でもさ、4時までには行動を終わらす必要があるで。

天気の事についてちょっと。天気は全体的に悪かった。8月に入ってからでは悪いと思うから、来年は7月20日あたりから合宿を行なった方がよい。

では食料係から、昼食のパンは考えるべきで、ジャム、マヨネーズは長くもたない。1回はパン、1回は弁当にした方がよいのでは。

装備からは、ペグを1日、1日かぞえなかったのは失敗であった。出発前にちゃんとすればならないと思う。A隊のラジウスをB隊が持って行ってしまったのは失敗。合宿出発の前夜にゴチャゴチャやりだすからサ。数日前から個人装備など整えるべきだろうな。そうすれば、そういうまちはいいおこらないだろうし、磁石を持って来ない者など出て来っこないよネ。

写真は景色だけでなくヤブの状態、水場の状態、どんな所にテントを張ったかなども記録した方が、これから大いに役立つと思う。

ヤブこぎの場合、トップをワンピッチずつ交替してやるべき。それに、後についた者は磁石で方向を確かめながら進むように、楽なんだから。広い尾根や分岐では時間がかかったなあ。計画段

階でこれからそういう所は時間を多くとっといた方が良いな。

来年の計画はもっとゆるやかにした方がよい。沈殿や予備日などにも気をつけて。来年の夏合宿はこれからすぐ始めた方がよい。偵察に出て、多くの資料を集めるように。

## 公ワン偵察 尾瀬ヶ原

5月17日 海老原、酒田、田口

5月17日

沼田(2:15) — (3:50)富士見下(4:35) — (5:05)田代原 — (5:15)馬洗淵 — (6:15)富士見峠(7:35) — (9:10)竜宮小屋(9:20) — (10:45)富士見峠(12:10) — (13:10)富士見下(13:45) — (16:35)沼田(16:40) — 桐生

桐生を前日の夜行で発つ。新前橋からの電車は、尾瀬や谷川方面の登山客でいっぱいである。沼田からはすぐにバスが接続している。

桐生から電車に乗った頃より降り出した雨は、遂に一日中降りっぱなしで、帰るまで、濡れネズミであった。

富士見下より30分程歩いた田代原あたりより雪が現われ出し、あとはずっと雪の道であった。しかし、かなり踏み固められているのでもぐる心配はない。馬洗淵を過ぎ、1時間半で富士見峠に着く。やや早いペースである。もともと、雨が降っているのでものんびり休んでいるなんてことはできなかったのだが。富士見峠にて、天候の回復を待とうと、だいぶ休んでいたが、いっこうに良くなりそうにないので、カサをさして出発する。竜宮小屋への道は、標識に従って進んだところ、行くうちに、何度も右に分かれたり左に分かれたりする踏み跡にぶつかって、適当な方向に従って来たつもりだったが、途中で遂に踏み跡が消えてしまっていた。しかたがないので、方向を確認して、北にそのまま進んだ。かなり急な所をおり、出た場所は、竜宮小屋より500mばかり西側の地点であった。尾瀬ヶ原は、まだその60~70%を雪でおおわれていたが、雪の消えた所々に、水芭蕉の小さな花がつつましく咲いていた。

竜宮小屋には休憩所がないので、10分程雨やどりをしただけで、すぐにひき返すことにした。小屋付近にも水芭蕉は咲いている。今度は、踏み跡を忠実にたどる。急登を越え、ゆるい尾根をしぼらく行けば、再び富士見小屋に着く。ここで気がついた事は、行きに通った道と、今出て来た道とは、10m程東にずれているということであった。まだ雪の踏み跡も、確実にはっきりしているという程のものではなかったので、最初の時に道をまちがえたのかも知れない。

小屋の休憩所は、雨やどりのための登山者でいっぱいであったが、1時を過ぎる頃にはだいぶ減っていた。おおかた居なくなった頃、われわれも、靴の中をびしょびしょといわせながら下山にか

かった。

## 皿伏～尾瀬沼

5月17日 山口(昌)、井上、海老沼

5月17日

桐生 ~~＝~~ 沼田 (2:15) ~~＝~~ (3:50) 大清水 (4:15) — (5:10) 一の瀬休憩所 — (8:00) 皿伏山 — (8:50) 治右衛門池 — (9:07) 小沼 — (9:20) 沼尻小屋 (10:05) — (10:45) 長蔵小屋 — (11:05) 尾瀬沼山荘 (11:15) — (11:25) 三平峠 — (12:00) 一の瀬 (12:15) — (13:00) 大清水 (14:00) ~~＝~~ (16:10) 沼田 (16:40) ~~＝~~ 桐生

土曜日の夜行で発つ。電車は谷川、尾瀬へ行く乗客で満員である。沼田より大清水、富士見下行きバスはすぐ乗れる。大清水を4時過ぎに出発して自動車道を一の瀬へと進む。雨のため道がぬかるみ歩きにくい。一の瀬までは尾瀬沼へ行く人が大ぜい歩いている。一の瀬より道を東におれ沢づたいに皿伏山へと向かう。30分ぐらい歩くと雪のため道がなくなる。道標も見あたらない。しかたなく荷鞍山～皿伏山の尾根を目標にして雪の上を進む。雪は1mぐらいあるが、だいたい固まっているのでぐることは無い。道を見失ってから約1時間でやっと尾根に出る。道がなくなってから左前方に見えるピークを目指して上がって行ったが、ピークの方へは行かずそのまま沢に平行に進んだ方がよかった。尾根へ出てから皿伏へは道標もあり所々道もあった。皿伏の頂上から景色は見えない。皿伏から尾瀬沼山荘へ下る予定であったがコースを北よりにとったため沼尻の方におりてしまった。下る途中で雪のヒウチがすぐ正面に見える。皿伏から尾瀬沼までのコースには道標があると思うが、よほど注意して探さないと見つからない。沼尻小屋に着くと人が大ぜいいた。沼尻より長蔵小屋、尾瀬沼山荘へは人も多く歩いているので雪は完全に固められ道ができています。所々木道も出ている。長蔵小屋の付近には水芭蕉がたくさん咲いていた。山荘より三平峠への坂を上がると、もう大清水まで下りである。峠を少し下ったあたりから雪はなくなりぬかるみの道である。雨はあいかわらず降り続けている。その雨の中を大清水へと向かう。

## 第8回尾瀬公開ワンデルング

5月23日～24日

### Dコース、尾瀬ヶ原

5月24日 ①

まだ暗い3時前にバスは富士見下に着く。約1時間程バスの中で仮眠したあと出発する。あたりは

だいぶ薄明かるくなってきている。富士見峠に着く頃には、先頭と最後とでは約1時間近くずれてきていた。会員の数に比して部員の数が少なかったため、整理に苦勞する。50人ぐらいずつ2隊に分けて行動したが、それでも、会員の体力の差と部員不足で、常に行動は遅れがちであった。

尾瀬ヶ原への急降は、まだかなり雪が残っており、運動靴で来た人にしてみれば不安だったようである。尾瀬ヶ原では2時間程自由行動としたが、大部分の者は、あまり動かなかったようである。原には水芭蕉やリュウキンカが咲いていた。また、1週間前までは、尾瀬ヶ原をあれほどおおっていた残雪も、全く解けてしまっていた。時期的に幾分早めだったせいも、今年は他の登山客もあまり多いとは感じられなかった。

尾瀬ヶ原を出発しようとして人員の点呼をとっていた時、Bコースの尾瀬沼から道をまちがえて尾瀬ヶ原まで来てしまったという人が1人現われ、部員2名がすぐに尾瀬沼の隊に連絡に走り、いっしょに下山する。

バスの待つ富士見下まで再び前とうしろとでは、かなり間があいてしまったが、たいしたけが人も出ずに無事に終わる。

## Cコース、皿伏山

5月23日～24日 ①

大清水(3:00) — (3:50) 一ノ瀬 — (5:05) セン沢田代(5:10) — (5:40) 皿伏山(6:02) — (6:40) 治右衛門池 — (7:07) 小沼 — (7:15) 沼尻(7:45) — (8:45) 長蔵小屋(10:20) — (10:35) 尾瀬沼山荘(12:00) — (12:10) 三平峠 — (12:50) 一ノ瀬 — (13:40) 大清水

Aコースが出発して、5分ぐらい後に出る。一ノ瀬に着いた時は明るくなっており、一ノ瀬の手前をセン沢沿いに登る。20分も行くと笹の茂った斜面となる。先週の偵察で、雪に埋まっていた登山道も、だいぶ雪が解けて、道を見失うことなく快調にセン沢田代へ着く。セン沢田代から東のピークよりに道がついている。道は大部分が雪で埋まっていたが、赤印をたよりに進めば皿伏山頂には、簡単に着ける。至仏山、平ヶ岳が木々の間から美しく見え、皿伏山頂は、われわれのパーティだけで静かだった。山頂からは、大清水平への赤印のついた道を下るが、途中で沼尻へ向かうこととして、治右衛門池へと下る。先週は、池の上が渡れたが、もう氷が解けて渡れない。東岸の小さな尾根を、北へと下ると小沼へ出る。そこから沼尻はすぐである。沼尻でしばらく休んで、長蔵へ向かう。長蔵に着いてからはBコース隊と行動を共にする。

# 赤城三学部合同ワンデルング

11月7日～8日

4年生 堀江、高橋、宮川

3年生 海老原、長谷、山口、鎌田、太田、渡辺

2年生 海老沼、尾高

院 1 広田

11月7日

17時赤城山寮集合

11月8日

山寮(9:15) — (10:20)地蔵岳(11:00) — (12:00)荒山(12:35) — (13:00)荒山高原(13:25) — (13:50)鍋割山(14:05) — (15:55)料金徴収所 — (16:30)畜産試験場

11月8日

前日の夜は、恒例の合同コンパを行ない、楽しい時を過ごす。前夜は、雪が少しちらついていたが、きょうは快晴。頂上に立つと、上越の山々が一望に見渡せ、遠く富士山もその美しい姿を見せている。回りの景色に心を奪われてか、コースタイムも上記のごとく、まことにノンビリしたものとなった。後でこのことは問題になったが、結局は、年に一度くらいは、歩きなれたコースをノンビリと歩くのも良いのではないか、という結論に達した。事実、評判も良かったようである。これからは合ワンはこのような形式で行なわれると思う。そして、今までの合ワンにかわるものとして、三学部合同の新しい山行が、見出されてくるものと思われる。

## スキー

### 44年度 尾瀬スキー合宿

高橋、堀江、吉野、宮川、斎藤、渡辺、鎌田、海老原、長谷、滝野

山口(修)、山口(昌)、松田

4月6日 ①

桐生 ~~沼田~~ (11:30) = 戸倉 (14:35) — (16:30) 大清水 

4月7日

 (5:45) — (6:40) 柳沢 — (7:00) 一ノ瀬 — (8:10) 三平峠 (9:10) —

(9:50)長蔵小屋、泊小屋(12:30) — 沼山峠(13:05) — 小屋(14:40)  
スキー

4月8日 ○

小屋(7:30) — (10:10)燧ヶ岳 — (11:00)昼食 — (14:00)小屋

4月9日 ①

皿伏山と小沢沢田代に分散してスキーに出かける。

4月10日 ①

ナデクボ沢に全員でスキー訓練に行く。

4月11日 ○

小屋(9:15) — (10:00)三平峠 — (11:00)一の瀬 — (11:40)大清水 — 戸倉  
二沼田 桐生

4月6日

3月中旬に計画して一の瀬まで入ったのだが、雪深く装備も軽装であったため、残念ながら断念したのだった。今回は大清水からの雪も完全にしまっていて、もぐりそうにもない。きょうは大清水に幕営する。

4月7日

夜、雪も降らなかったため雪の状態は非常に良い。楽々ともぐることもない。前回に比べれば全く楽なことだ。柳沢の水場、一の瀬とすぐに来てしまった。ワカンなど不要である。一の瀬から冬路沢を登る。少しもぐるようになるがそれ程気にならない。三平峠から全員スキーで尾瀬沼に下る。2年生は重たいザックを背負って、スキーにもなれていないせいかすぐ倒れてしまう。倒れても起きあがれない。ザックをおろしてやっと立ち上がり、またザックを背負うのが苦勞である。とうとう田君は倒れて足をねんざしてしまふ。ケガ人第1号である。他の者はなんとか尾瀬沼に着くことができた。またここから長蔵小屋まで、沼の上をスケータィングして行くが、3年生はほとんど先に行ってしまう。2年生だけが、倒れながら急ぐ。

予定より早めに到着したので、沼山峠に午後から出かけ、ゆっくりと峠付近にゲレンデを作りスキーを楽しんでくる。

4月8日

燧ヶ岳へと登る。山頂から3年生数名が滑り降りる。スキーのじょうずでない者は鞍部からである。何人かある程度滑り降りたところで、最後の方にいた田君とM君が転倒してケガをしてしまふ。田君は10m以上落下して足をねんざしてしまふ。M君はちょっと倒れただけで、肩を脱臼してしまつたらしい。田君は1人で歩けるが、M君は歩けそうにもない。ストックで肩を固定して1人つきそって下山する。3年生3名が小屋にスノーボードを取りに行く。途中でスノーボードに乗せて小屋まで運ぶ。田君は小屋についてもスキーをできそうにもないのでM君と共に下山してもらう。3年生がつきそってその日のうちに下山する。

4月9日

皿伏山と小淵沢田代とに別れてそれぞれ山スキーを楽しんでくる。皿伏の方は、樹林の中で豪快に滑り降りられるような所は全然ないが、木の中もまた楽しいものである。小淵沢田代の方は、滑りやすくよかつたらしい。

4月10日

全員でナデクボ沢に行きスキーの訓練を行なう。ナデクボ沢は訓練にはなかなか良い場所である。ナダレの心配もない。

4月11日

天気が悪く、みぞれになっている。三平峠まで歩いて行き、そこから3年生と2年生の一部がスキーをつけて滑り降りて行った。残りの2年生はケガをしたくないので歩いて降りる。スキーをつけた2年生もすぐ、はずして歩き始める。やっぱりスキーでは無理なようである。歩いて行った者が大清水に着いたのはスキーで着いた者たちより1時間近く遅れてしまった。大清水では雨に変わっていた。売店で昼食にして、雨の中を戸倉まで歩いて行く。

## 石打スキー合宿

12月20日～24日

海老原、長谷、太田、鎌田、山口、海老沼、尾高、林(教)、  
武井(教)、壬生(教)、外部外者 2名

20日 桐生 ~~→~~ 石打

21日 丸山スキー場

22日 丸山スキー場

23日 丸山スキー場

24日 石打 ~~→~~ 桐生

出発が日曜日であったので、日帰りのスキー客で電車が非常に混んでおり、やっとのことで電車に乗り込む。ほとんどが中里で降りてしまい、石打ではわずかであった。30分程歩いて適当な田んぼを見つけ、許可を得てテントを張ることにする。全員1列に並び、肩を組んで雪を踏みがため、テントサイトをつくる。昼食をとり、さっそく滑りに行く。初日なので準備運動を兼ねて、リフトは使わず、登ったり滑ったりする。水は近くの民宿へもらいに行く。「おフロに入って行きませんか。」とすすめられたが、さすがに遠慮した。子供がうまく滑っているのを、なかばあきらめ顔で見ている者、顔面制動をしながらもがんばっている者、イグルーをつくる者、ほてはトイレをつくる者……、皆、それぞれに5日間を過ごす。夜はお得意のノドを聞かせる。酒は2日目だけであったが、アルコールには関係なく、毎夜美声(?)が聞かれた。3日目には雨が降るなど、天候はあまりよくなかつたので、ほとんど日やけした者はいなかつた。雪は少なく、雪質もあまり良くなかつたが、無事5日間の合宿を終えた。

今回は何の事故もなく、合宿を終わったが、ケガ等は、まだなれていない初日が最もおこりやすいものであるから、このような合宿においては、今回のごとく初日はリフトを使わずスキーに慣れ、徐々にリフトを使って練習を進めるのが、適切であろう。

## 野 沢 温 泉 ス キ ー

1月2日～7日

堀江、斎藤、海老原、山口、海老沼、大浦(顧問)、草場(OB)、松田(OB)

1月2日

桐生(8:12)→(9:01)高崎(9:08)→(12:40)長野(12:51)→(14:04)  
戸狩(14:05)→(14:35)野沢温泉

1月3日～6日

ス キ ー

1月7日

野沢温泉(12:15)→(12:45)戸狩(12:56)→(14:01)長野(14:59)→  
(18:26)高崎(18:32)→(19:23)桐生

前日が、OB諸氏を交えての新年会であったため、電車に乗った時には二日酔いぎみの人が数人みられたが、碓氷トンネルを過ぎてからの雪景色によって、かなり酔いの方はさめたようである。バスにぎっしりとつめられてスキー場に運ばれ、すぐにテントを張る。場所は去年と同じ所で、グレンデまで歩いて数秒というところ。さっそくスキーをつけた人もいた。次の日は、全員スキーをかついで、リフトを横目でにらみながら上ノ平まで約1時間半の登山。上ノ平では大浦先生のコーチで半日練習。その後はめいめいの力量に応じたコースを通過してテントに帰る。1人だけ、分不相応のコースを選んだためかなり苦戦していた人もいた。夕食をすませると風呂に行く。いくつもの風呂をのぞいたが、結局最初のにぞいた風呂に入る。気温はかなり低く、少しでも寒さを防ごうということで、アルコールを流しこんで寝る。4日はテントに帰る時間を確認して、自由練習。午後になると雪がちらつき始める。テントに帰るとかなりの雪が積もっている。早速雪かき。この雪は5日の夜まで降り続き、Aテントにおいては、ポールが雪の重みで曲がってしまうというアクシデントもみられた。この日、OBの松田氏と大浦先生は一足先に帰る。5日は一日中雪。しかし、若いわれわれは降りしきる雪もなんのそのと一日中滑りまくる。夜は例によって風呂。この日あたりから風呂のハシゴをやり始める人も現われてくる。夜に、高橋氏がヒョッコリと現われる。研究室の人たちで民宿に泊って楽しんでいるという。OBの草場氏もこの日に帰る。結局、6人用テント

2張りに現役5人だけになってしまった。6日はスキー最後の日。降り続いていた雪も止んで快晴。全員思い思いにスキーを楽しんで夕食。それでもまだ未練があるらしく、全員でナイトスキーに出かける。その後、野沢温泉における最後の風呂で疲れをとり、夜の街を楽しみ、満足の内に眠りにつく。野沢温泉スキー場は村営のスキー場で大小おりまぜ13基ものリフトがある。コースも初心者向きから上級者向きまで各種あつておもしろい。民宿も多く、共同風呂もわれわれが見つけただけで6か所もあった。

## 巻 機 山 ス キ ー

44年12月5日～6日 高橋、草場(輝)

(1) 12月5日 (○)

Kと前橋にて落ち合い、通い慣れたる上越線鈍行に陣取る。今年は上越国境の積雪も早々でスキーを持った客もわれわれの外にチラホラ見える。確か昨年(1949)の蓬峠スキー12月8日頃はスキーなどは正に気が早い感であつたのに。

工事中とかでバスは六日町駅より沢口まで入ってくれなかつた。清水部落まで1時間程歩かされたるるか、部落が近づくにつれて道いっぱいの雪道となり、米子頭山であろうか真っ白に見える。民宿のオヤジと途中いっしょになり、のんびりと世間話に花を咲かせて歩いて行く。全くいい日である。

12月6日 (○)

昨晚ちょっとヒッカケたものだから6時頃、のこのこと準備にとりかかり、民宿の人に見送られ出発する。12月だというのに気持ちが悪い程のぬるまったいような風が吹いており、頂上方面の雲の動きも速く、雨の心配やら濃霧の心配やら気が気ではない。

五合見付近まで登らなければ大して雪もないと言うのに、他にもスキー板をかついで登る者2、3人。ばかばかを見て心が安まる感じがした。偽巻機にたどり着くにつれ風が思いのほか強く、体温がひどく奪われ、顔面が冷たく目をあけていられぬ程の時もあり、急いで巻機小屋へと下る。Tはそこから巻機山頂へ向かうが、山頂の風はものすごく、あさつての方へややもすると飛ばされるので、はうようにして写真を撮り、スキーをつけて滑り始めようとするものの風が頂上めがけて吹きあげチッカリでも滑らぬ。身体を丸めるようにして、ようやく小屋まで滑り降りた。小屋前ではどうしたとか、うそのように風はない。民宿のオバサンが作ってくれたオニギリ(すごくデッカイ)をバクツイテから偽巻より滑り始めた。この偽巻よりかなり急傾斜面をコロゲ落ちる。あっけなく雑木帯に入り、あっけなくスキーは足から取りはずす。それにしても強い風であつたけれど、それが幸いしたのかガスもわかず、谷川、苗場、越後沢、駒方面は余すことなく見えた。雪も未だ未だ少ないせいか頂上から清水まで滑りおりることなど無理であつた。今朝出発の時、民宿の主人

から「頂上までは、雪があることだし無理でしょう。」と言われたのだが、宿に着いて「なんとか頂上まで行けました。」と言ったら「よかったですねえ。」と言ってくれた。4時頃宿にたどり着いたろうか。宿の主人は「行商の人の車で、帰れるならどうですか、六日町駅まで乗せてもらったらどうですか。」と、車の手配までしてしてくれたのである。ここの民宿の当世、気味の悪くなるようなサービスに感心しながら、12月の巻機山を滑った事を喜びながら夕暮れの六日町駅前まで車をおりた。

## 個人山行 谷川岳ザンゲ沢

9月15日 酒田、長谷

9月15日 ●→◎

桐生 ~~→~~ 土合 (8:40) — (9:00) 西黒沢 — (9:25) 天神尾根分岐 — (10:40) ガレ沢分岐 — (12:25) 稜線 — (13:00) 谷川岳 (13:30) — (14:10) ガンゴウ新道分岐 — (14:30) マチガ沢 — (15:00) 登山口 — 土合 ~~→~~ 桐生

9月15日

土合に着くと雨が降っていた。小止みになるのを待って出発する。西黒沢に入ると、天神尾根分岐近くまでは荒らされている。このあたりからは静かなものである。転石づたいに行く。天気はよくないが、雨も止んでしまい、ときどき青空も顔を出す程になって気分はよい。草小屋跡まではたいした滝もなく、ここまでの滝はほとんど直登でき水しぶきをあげながら進む。草小屋跡で本谷とも別れ、ザンゲ沢に入る。右にガレ沢を見て、しばらく進む。この辺でまちがえてザンゲ沢と別れてしまい右に入ってしまう。上の方はガスが濃く、わからなくなってしまった。適当に沢をつめて稜線に出る。景雪小屋跡からしばらく登った、稜線に出たらしい。もう後は山頂に登るだけである。山頂もガスが濃く、風も強いのですぐに引き返し土合に下山する。

## 仙ノ倉山荘 (山岳部山行参加)

12月4日～6日 海老原、渡辺

12月5日 ◎→⊗

仙ノ倉山北尾根にて、山岳部がアイゼンワークなどの基礎訓練をするというので2名が同行する。4日の夜行で桐生を立ち、8日未明土樽着。平標方面に冬山合宿の偵察に来た足利工大山岳部のパーティーと会う。

駅にてオーバズボン、オーバーシューズ、ワカンなどをつけすぐに出発。1.5m～2mの積雪である。仙ノ倉山荘までトレールが全くないためラッセルを強いられる。新雪のため腰から胸あた

りまでもぐる所があり、予想のワクを大きくはみだす程の時間をくう。50mおきぐらいにトップを交替し、トップはから身になってトレールをつける。

途中、雪の中からリスが現われ出たり、ウサギがかけまわっている姿を見かける。

夜行というのは、時間的には得をするような気になるけれど、睡眠が全く不十分になるので、体は調子悪いし、眠くてたまらない。そこで、まだ上越線の鉄橋が見えるあたりで、ツェルトをかぶって6人全員仮眠。寝ている間に、あとから来た足工大のパーティーが先行し、トレールが手に残る。

2時間程仮眠したが、トレールのついた雪道は、まずまず調子良く歩ける。

途中で足工大のパーティーに追いついてしまい、再び先行、ラッセルに悩まされる。小屋のある堤防を過ぎ、やっと仙ノ倉山荘に着いたのは、14時半。思いもよらぬ長行程であった。

時間的に遅くなってしまったため、北尾根取付点のトレールづけはやめにする。夜は1升ビン2本と、ウイスキー1本なりをからにする。

12月6日 ⊗

昨晚飲み過ぎで、眼をさましたのはすでに10時半。それに昨夜来の雪は1晩で30センチ程積もり、予定の北尾根は中止にする。またの機会を願って16時に小屋を出る。平標方面へ行く予定だった足工大のパーティーはひき返したらしく、トレールのついた雪道は順調であった。来た時の事を思うと、実に簡単に土樽の駅に着く。ラッセル訓練に終わった今回の山行であった。

## 根名草山～鬼怒沼

5月30日～6月1日 鎌田

5月30日 ⊙→①

桐生(3:53)→(15:35)東武日光(16:40)→湯元温泉(18:00)→金精峠トンネル(18:50)↙

5月31日 ①

↙(5:50)→金精峠(6:10)→温泉岳(7:25)→念仏平(8:00)→根名草山頂(9:15)→(10:30)日光沢温泉(12:00)→鬼怒沼(15:15)㊦

6月1日 ⊙

㊦(6:20)→鬼怒沼山付近→㊦(8:00)→物見山(8:20)→大清水(10:10)→沼田(12:40)→桐生(13:56)

5月30日

東武日光駅で1時間待たされて湯元行きのバスに乗る。金精峠行きのバスはなく、約1時間歩く。この日はトンネルの手前にキャンプする。

5月31日

トンネルの左側の道を登る。右側に導標があるが、トンネルのすぐ上でこの道は合流する。金精峠から温泉ヶ岳への道は良く整備されている。雪の消えた黄土色の白根山が美しい。温泉付近の道は右に巻いている。知らぬ間に温泉を過ぎてしまった。温泉を過ぎた鞍部にはテントサイト適地がある。この付近から雪がかなり残っていて、導標をたよりに進む。念仏平で約10人の女子高生のパーティーと会い、いっしょに日光沢温泉まで行く。途中鬼怒沼がよく見える。日光沢温泉の少し上流で昼食をとる。ここから鬼怒沼までの登りは長くかなりきつく感じた。天候悪化のようなので小屋に泊ることに決め、鬼怒沼でしばらくのんびりして小屋に行く。

6月1日

雨が降っていたが鬼怒沼山付近まで行く。途中道に迷い引き返す。物見山から下ることにする。物見山は、名前に反して、展望がよさそうでない、すぐに下る。この尾根は倒木が多く、カサがじゃまになった。大清水からはバスがすぐに出て、ずぶぬれのまま乗車。

## 中央アルプス山行

10月7日～10日 広田、宮川

10月7日 ○

駒ガ根(2:50) — (4:05)千畳敷(4:20) — (4:55)前岳コル — (5:05)中岳小屋

10月8日 ○

中岳小屋(6:00) — (6:10)駒ヶ岳(6:15) — (6:20)中岳小屋(6:30) — (6:40)前岳分岐(6:55) — (7:05)宝剣岳(7:20) — (7:40)三ノ沢分岐(8:05) — (9:00)独沢大峰(9:10) — (10:10)檜木尾岳(10:30) — (めし30分) — (14:00)東川岳 — (14:20)殿越 場

10月9日 ○→◎

空木岳(6:10) — (7:20)空木岳(7:45) — (8:40)南駒ヶ岳(9:20) — (10:35)空木岳(11:30) — (14:30)池山小屋

10月10日 ①→◎→●

池山小屋(6:00) — (6:45)管ノ台

10月7日

長い汽車の旅も終わり、駒ガ根に着く頃はまいってしまった。駒ガ根のバスのホコリの中から南アルプスが浮び上がってくる。日数が少なかったため、千畳敷までロープウェイを使う。千畳敷には水場はあるが幕場がないため、水のない前岳コルに登らなければならなかった。巻雲がでてきたが高層雲までで、夜には晴れ上がった。中岳小屋は管理人がはず、前岳コルの小屋の管理人が夕方

見回りに来る。しかし、小屋に着いたのが遅かったので、管理人はもう来てしまったらしいので、無断で泊ってしまった。その夜は、ウイスキーとすきやき風ゴツタ煮で2人とも酔いしれ、久しぶりの山行であるため、小屋の窓からの満天の星、町の明り、黒く浮ぶ南ア、ローソクの薄明りに夜遅くまで心がうばわれていた。

10月8日

天気はきょうで3日間快晴である。すばらしいというより、ものすごい雲海の朝である。気温は0℃で霜柱がいたる所5~10cm。駒山頂に大きな社が2つある。山頂から雲海上に、御岳、北ア、乗鞍、八ヶ岳、南ア、奥秩父等がくっきりと浮んでくる。コースは宝剣下りがちょっと急なだけである。紅葉の境がくっきりとしていておもしろい。檜木尾岳は結構大きな山である。しかし、このコースは変化に乏しくつまらない。ただ南ア、空木、南駒のながめですくわれているようだ。2人とも暑さと単調さにまいってしまった。テント場は料金を取られる。水場は5分程小屋の側道を行った所である。夜、月光の下の雲海と山々が美しかった。

10月9日

越百から下山の予定であったが集中豪雨、台風のため越百からの沢が荒れていると小屋の管理人に言われ空木から池山に下ることにする。朝は結構冷える。八ヶ岳方面にレンズ雲の群が見える。風強く天気を心配する。急登で空木に着く頃には風も弱まり快晴となる。空木から南駒は弁当を持つてのピストンである。2山とも白砂とハイマツの世界である。この2山で誰にも会わず静かである。空木へもどる時カモシカに会ったが、向こうはあわてて逃げて行ってしまった。ほんの8mぐらいの所だった。空木へもどってしまうと、もう池山までだったのでゆっくり休む。空木小屋は、稜線上池山への下り150mぐらいの所にあり新しかった。その右手下の方に小さくもう1つの小屋が見える。駒石を過ぎるとやがて森林の中に入り、紅葉の世界となる。やがて前方に伐採されたハゲ山が見えると左手遠方にバス道が見え池山もすぐである。池山小屋は道の右下の30mぐらい下、沢の近くにある。小屋の中には誰もいなかったので、腹のへった2人はラーメンを煮る。早大W.V.の7名が夕方着く。

10月10日

本日で山行も終わりである。あれだけ良かった空も曇ってきた。大きな道を下ると30分程で林道の上に出る。林道を幾度か横切ると管ノ台に着く。霧の流れる鉱泉前バス停で20分ほど待つてバスに乗る。根ヶ根駅に着いて群がるハイカーを見てうんざりする。きょうは連休初日なのだ。家へ着く頃はいつしか雨になっていた。静かな山行であったが、ケーブルで登ってしまったためか、あまりおもしろくなかった。

# 白峰三山縦走

9月6日～9日 山口(昌)

9月6日 ①

太田(6:40)→新宿(10:10)→甲府(13:00)→(15:00)広河原→広河原小屋

9月7日 ①

広河原小屋(5:40)→(5:55)御池小屋分岐→(7:40)大樺沢二俣(7:55)→(10:30)八本歯コル(10:40)→稜線小屋への巻き道分岐(11:40)→(12:00)吊尾根分岐→(12:20)北岳(12:50)→稜線小屋巻き道分岐(13:25)→(14:00)稜線小屋

9月8日 ①

稜線小屋(5:45)→(6:15)中白根(6:30)→(7:45)間ノ岳(8:40)→(9:30)農鳥小屋(9:55)→(10:55)西農鳥(11:20)→(12:00)農鳥岳(12:25)→(12:53)大門沢下降点(13:10)→(15:00)大門沢小屋(15:15)→(17:00)

9月9日

(5:45)→(6:50)林道(7:00)→(7:35)奈良田(8:00)→(10:30)身延(11:10)→(12:06)甲府→(18:30)太田

9月6日

あれもこれもと忙しくパッキングしたザックの重さを気にしながら、早朝1人で白峰三山へと向かう。甲府に着いた時は、暑いくらいで、2時間近くバスを待った。広河原行きのバスには、他に登山姿の娘さん2人と、男の人1人の4名しか乗らず、ゆったりとしていた。広河原に着くと、雷鳴と共に、雨が降り出す。晴れていたなら、河原にでも寝てしまおうと考えていたが、これ幸いと小屋に急ぐ。吊り橋の所まで来たら、何十名もの登山者が居たので驚くが、小屋の人から、昨日、北岳パットレスで遭難があったと聞く。4時過ぎ、夕飯を作っていたら、遺体を背負って下りて来た。

9月7日

朝食を早々に歩き出す。大樺沢に入ると、すぐに、北岳八本歯の稜線が見える。大樺沢二俣までは楽な登りで、ここに2つ程テントが張ってあった。ペイントやケルンを目印に、八本歯のコルへと登るが、だんだん登りがきつくなり、1人であることも手伝って、休みが多く、すぐ近くに見える鞍部になかなか着かない。パットレスからは、登山者の叫び声が聞こえるが、姿は見えなかった。やつのことで八本歯のコルに着いたら、少々ガスが出てきて、農鳥岳の方は、半分ぐらい見えなくなった。けれど、沢すじにちょっぴり雪を残した間ノ岳と稜線小屋がきれいに見えた。ここからワンピッチ歩いた所に稜線小屋への巻き道があり、ここにザックをおいて、カメラ片手に北岳へと行く。道の両側には、高山植物がたくさん咲いて美しい限りである。あこがれの3192.4mの頂上には、ゴミが多くて、少々ガッカリした。暖かいので、パットレスを登って来たらしい3パーティー

10名ぐらいが、カラピナをジャラジャラやっている所をちょっと離れて、寝ころぶ。稜線小屋に着いて寝ていると、昨日、バスに乗っていた娘さん2人が着いて、にぎやかになる。小屋には、主人を入れて7人しか泊らず、ゆったりだった。

9月8日 ①

5時20分頃、日の出だと起こされ、太陽が昇るのを見てから、朝食抜きで出発する。中白根まで、例の女の子2人が散歩だと言って、いっしょに歩く。よく晴れて、富士、秩父連山、八ヶ岳、北アルプス、中央アルプス、近くは鳳凰三山、駒、仙丈がきれいに見える。10時頃になると、ガスが出るとかで、間ノ岳までは急いで登る。間ノ岳からは良く見える。北岳を中心にして、前に書いた山々、農鳥が目の前に、それから塩見岳、赤石方面の山々がまことによく見えた。農鳥小屋で小屋の人から休んで行きなさいと言われたが、通り過ぎて10分ぐらい歩いた所で休んでいたら、小屋の前でゴミ焼きをしていた若い男がこちらに向かって、「バカヤロー」と叫んだ。頭にきたから、すぐザックを背負って歩き出す。ここからは、まったく1人旅で気楽なものだ。大門沢下降点は、ガスっていたけれどもすぐわかった。大門沢小屋には、意外と早く着いてしまったので、泊る気にならず、行ける所まで歩くことにする。しばらく歩いて、コゴモリ沢の手前の沢を渡って休んだら、もう動くのがいやになり、河原にビニールを敷いて寝ることにする。いやな気分で、なかなか眠れなかったが、星を眺めているうちに眠ってしまった。

9月9日

まわりが明るくなったらすぐにアメ玉をなめながら、歩き出す。吊り橋を5つか6つ渡り終わると、すぐに林道へと出る。奈良田から、学生がたくさん乗ったバスに乗って帰る。

## 白峰三山（医学部秋合宿参加）

10月27日～30日

（医） 草場、清水、桜井、久保田

（教） 田口、児玉

（工） 海老原

10月27日 ○

桐生 ~~→~~ 甲府 ~~→~~ 広河原小屋

10月28日 ● → ⊙ → ⊙

小屋（5:55） — （8:25）御池小屋（8:45） — （9:55）休（10:50） — （11:55）稜線 — （12:35）北岳肩ノ小屋

10月29日 ① → ⊙

小屋（6:45） — （7:25）北岳（7:45） — （8:35）稜線小屋（9:15） — （10:00）

中白根山(10:55) — (12:05)間ノ岳(12:15) — (13:05)農鳥小屋

10月30日 ○

小屋(6:00) — (6:55)西農鳥岳(7:05) — (7:45)農鳥岳(8:15) — (8:40)大門沢下降点(8:50) — (9:50)大門沢(10:45) — (11:10)大門沢小屋(11:20) — (14:10)第一発電所 — (14:35)奈良田 = 身延 ~~→~~ 桐生

10月27日

医学部の秋合宿に参加するべく朝桐生を発つ。高崎にて全員合流して八高線に乗りこむ。一行は7人。甲府よりバスにて広河原まで。11月からは道路工事のため、バスは夜叉神峠までのことで遅らく広河原までバスで行けた。広河原に着いたのが3時頃で管理人のいなかった広河原小屋に泊まる。夜半より雨が降り出す。

10月28日

4時起床。昨夜からの雨はいつこうにあがる気配がない。雨はそんなに強くなく、雨についての出発となる。最初からかなりきつい登りが続く。御池小屋近くの道がほぼ楽になるあたりまで、標高差約700mに2時間あまり費やす。昨夜からの雨は、この付近からは雪であつたらしく、樹々にうっすらと雪が積もっている。御池小屋より先はもうかなり雪の白さが目だってくる。しかし、大した積雪ではない。数cm程度である。雨はあがったが、風があるためかなり寒い。ガタガタと震えながら昼食をとる。

稜線へ出る。ガスの切れ間にときどき鳳凰三山がちらりと見えたりする。肩の小屋12時半。北岳は明日に残してきょうはここに泊まる。水場は東側往復30分。夜8時頃の外気温 $-7^{\circ}\text{C}$ 。小屋の中は $-3^{\circ}\text{C}$ 。

10月29日

昨夜は満天の星であつたが、朝方晴れていたのも束の間、雲はいつの間にか広がり一日中ガスと強風なり。10cm程の新雪はさらさらとした細かいザラメのようになり、それが強風とともに容赦なく顔に吹きあたる。

北岳。3192.4m。7時半着。ただ寒いのみ。早速に稜線小屋への道をとる。小屋には管理人がいた。熱い茶をすする。

中白根、間ノ岳と3000mの稜線を歩く。強風と寒気でからだがかたまりつくようである。歩いている間はいくらか忘れることができるが、止まると震えの波状攻撃をかけられる。おまけに、強風に乗ってガスがあたりを埋めてくる。間ノ岳の下りのガレはケルンや道標に従って行かないと、方向を誤りやすい。

農鳥小屋1時。若い管理人が一人、犬といっしょにいた。テントは張らずに小屋泊りとなる。小屋の中は火を焚いていたが、立ちのぼる煙を逃がすため、表と裏の戸を開け放しにしてあるので、火の近くにいないと実に寒い。夜中は氷点下 $13^{\circ}\text{C}$ まで下がった。

10月30日

小屋を6時に出る。南北に控える間ノ岳と西農鳥岳が朝日に薄く赤みを帯びている。富士をはじめ東方の山々はシルエットのようになる。昨日とは違って天気は上々。西農鳥岳に立つと、間ノ岳の向こうに北岳の鋭峰も姿を見せ、南側は塩見岳をはじめに赤石山脈の連なりが見通せる。群馬県の山に見られぬ山容の大きさというものに目をみはる。

風が吹いているが、寒くてしようがないという程ではない。農鳥岳付近のおだやかな地点では昼寝でもしたいくらいなほど。

広河内岳分岐の大門沢下降点から先は下山路を急ぐだけである。かなり急な道を1時間程下ると大門沢に出る。富士が正面に構えている。沢沿いに紅黄葉の中を3時間で奈良田へ。温泉で汗を流してその日のバスに乗る。

## 足尾の山々

ワングル発足から10年以上経過し、ホームグラウンドとしての足尾の山々もほとんど歩き尽してきた。総まとめの意味でこの1年間、合宿を中心として歩いてみた。これはその記録である。尾根はほとんど歩き尽したが、沢は、ほとんど歩くことができなかった。過去の記録をまとめたかったのだが紙面の関係上でできなくなってしまった。

足尾の山々が登山の対象となったのはごく最近のことである。わが部発足当時はまだまだヤブの中であつたらしい。

信仰登山の歴史は古く、庚申山が8世紀後半、勝道上人開基によって始まつたらしい。それに対して、足尾の盟主である皇海山は、18世紀になるまで日の目を見なかった。庚申山の奥の院として信仰登山が行なわれるようになってきた。その後幕末になると維新の波がこの地に及び庚申山主大忍坊全祐がそむき死刑に処せられたため足尾山塊に人の訪れが急に減り、やがて忘れられていった。明治中期になると登山信仰の再興を志す人々が、この山塊に入るようになった。現在、皇海山頂に建てられている「二柱大神奉納当山開基木村惟一」と刻まれた青銅の大剣は、明治26年にかつぎあげられたものである。近代登山が移入されてもこの地域は登山の対象とされず、大正11年頃になって岳界の先覚者故木暮里太郎氏が皇海の西方の沢、不動沢を溯行して皇海山に到達した。そして現在庚申山から皇海山に足をのばす者が多くなったが、それでもまだまだ人知れずの山として静寂を保っている。

足尾山地の構成はコニエ状の皇海がある西部火山帯と、足尾日光分水嶺となっている北部の古生層山地と、東部ののびのびとした草原からなる壮年期準平原の花崗岩台地とから成っており、これらの三様の山地とそれらを刻む谷々はきわめて変化に富んだ山岳景観を作っている。

足尾の尾根は、群馬、栃木県境である日光白根から錫ヶ岳、宿堂坊、三俣山、皇海、鋸山、袈裟丸連峰と続く足尾山脈、三俣から東方へ伸びる黒檜、社山、半月山、細尾峠に続く前日光連峰、鋸山から庚申、オロ山、中倉へと続く尾根、錫ヶ岳から笠ヶ岳、三ヶ峰と続く尾根、また1300m前後の前日光高原、それに根本山から桐生梅田へと伸びる山々とから成っている。

これからの地域の詳しい記録は以下に記してある。

# リーダー養成春山合宿

## 袈裟丸山～国境平

3月27日～4月1日

海老原、長谷、鎌田、山口(昌)、山口(修)、太田

3月27日

桐生(6:38) — (8:00) 沢入(8:10) — (9:15) 林道分岐 — (9:50) 林道終点  
(10:20) — (12:00) 寝釈迦(12:45) — (14:55) 賽の河原小屋 合

3月28日

合(7:00) — (7:10) 賽の河原(7:20) — (8:20) 二子山分岐(8:30) — (9:  
35) 小丸山(9:40) — (9:55) 袈裟丸避難小屋(10:55) — (11:30) 袈裟丸手前P.  
(11:40) — (13:15) 袈裟丸山(13:40) — (15:45) 後袈裟丸山 ㊦

3月29日

㊦(8:00) — 鞍部(8:45) — (9:20) 坊主岳(9:35) — (11:20) 奥袈裟手前P.  
(11:55) — (12:35) 奥袈裟丸山(13:00) — (14:50) 小法師尾根分岐 ㊦

3月30日

㊦(6:45) — 法師岳 — (7:25) 六林班手前鞍部(7:35) — (8:05) 六林班峠(8:  
10) — (8:50) 女山(9:00) — (10:00) 鋸直下(10:30) — (10:45) 鋸山(11  
:00) — (12:35) 鋸下り岩場(13:00) — (15:00) 皇海山 ㊦

3月31日

㊦(7:00) — (9:45) 皇海下り北斜面(10:15) — (11:05) 国境平 ㊦

4月1日

㊦(10:30) — (11:45) ニゴリ沢(12:00) — (12:20) 松木沢(12:50) —  
(14:45) 砂防ダム(14:50) — (15:40) ダム(15:45) — (16:25) 間藤駅(16:  
59) — 桐生

### 行動概略

賽の河原までは、積雪約50～100cm程度で、古い踏跡が残っていたので、ロングスパッツのみを着装し、予定通りのタイムで行くことができた。しかし、賽の河原からは積雪も100～200cmとなり、わかんをつけてもかなりもぐる場所がある。約15分ごとにトップを交替しながら進んだが、急登ではかなり遅いペースとなる。また、前日の睡眠不足も悪影響を及ぼしたようだ。

2日目の行動終了地点は後袈裟山頂であったが、これは山頂到着時刻が15時45分と遅くなってしまい、予定の小法師尾根分岐までは積雪状態および時間的に無理と判断し、付近にテントサイ



トを探したが見当たらず、山頂南側約5mの地点を選び、雪をほぼ平坦にならし狭いがテントを張った。

後袈裟より奥袈裟までは、地図上では、大した距離も登り下りもないように思われるが、実際は小ピークの連続で、積雪が多いためもあって、予想外の時間をくってしまった。すなわち、後袈裟山頂より小法師尾根分岐までは、地図上水平距離にして、6~7cm程しかないのに、これだけに延べ7時間近くを費やしてしまった。この頃より、当初の予定に変更を加えねばならなくなってきた。

1日の行動時間は約8時間前後であるが、全員積雪期の縦走には不慣れであり、行動がもたつきがちであったので、今後改めねばならない。

第4日目の幕営地は予定では三俣山であったが、実際には皇海山頂となった。ここにおいて、今後の三俣山を経て、社山に至るコースをとることは、距離的、日程的に無理と判断し、国境平まで縦走を打ち切った。三俣山ピストンを予定したが、ガスによる天気不良のため、これもとりやめとなり、6日目に下山となった。

春山積雪期における足尾主稜は、道標が完備して(プレート、ペンキ、ナタ目)これに忠実に従えば、道に迷うことはめったにないであろう。しかし、体力的によりいっそうの充実をはかっておかねばならない。

### 3月27日 ○→①→◎

足尾線沢入下車。橋を渡り左折し、学校の裏を通っていく。ちょっと坂を登ると林道となる。この林道を約1時間も歩くと、袈裟丸への分岐に着く。左は西山線、右は双輪塔線である。袈裟丸へは右をとる。林道の終点からは沢づたいの道になる。日向には雪はないが、木陰には10cmぐらいの雪を残している。寝釈迦を過ぎる頃から、雪は60cm程となりスパッツをはく。広い沢に沿っての道である。沢がせばまってくると、すぐ賽の河原の小屋となる。

### 3月28日 ◎→⊗→①→○

小屋から10分程で賽の河原に着く。大きな岩(石?)の頭しか出ていない。袈裟丸連峰が姿を現わす。赤城も良く見える。ここから稜線上の歩行となる。道がはっきりせず、方向を定めてヤブの中を進んだ。途中でオーバーシューズ、わかんをつけて少し時間をくったが1時間で二子山への分岐となる。賽の河原から北に見えるピーク近くの分岐である。小高いピークを3つ越えると小丸山に着く。このあたりからの日光方面の眺めはすばらしい。小丸を下ると、この鞍部の南側に袈裟丸避難小屋がある。賽の河原の小屋と同じくトタン張りの小屋で、10名程は泊まれるであろう。ここでオーバーズボンをはく。前袈裟への登りは、体が雪の中にもぐって苦戦する。ここを通り抜けると山頂まではゆるやかな登りを少し行けば良い。山頂の標識は頭しか出ていなかった。掘り出して前袈裟丸山の文字を確認する。前袈裟と後袈裟の鞍部は岩場があり、岩がもろく注意しなければならない。わかんをはずし、はうようにして通り越す。ここから後袈裟へは急登である。後袈裟の標識も頭だけしか出ていなかった。ここまでだいぶ時間をくったので、山頂の南側に雪をならし

てテントサイトとする。

3月29日

後袈裟での眺望があまりにもすばらしかったので、出発の時間が遅れてしまった。至仏、笠あたりから上越方面までまる見え。後袈裟からの下りは急降であり、東側ガレ上は雪庇が続く。木々の間の積雪は2m弱である。鞍部はテントサイトに適し、シャクナゲが茂っている。坊主岳の山頂は狭い。この付近の鞍部は、どこも3~4張りのテントが張れそうな広さをもつ。ここからピークを4つ越えると奥袈裟山頂となる。山頂の標識は道からちょっと見にくい所にあり、ここが山頂か？と思われるような所で、うっかりすると見落としてしまう。奥袈裟の奥(北)のピークを越すと尾根は広くなる。プレートやペンキの道標を探しながら行く。小法師尾根の分岐にテントを張る。夜テントの脇をザクザクと動物の足音がして、熊ではないかと一瞬ふるえあがる。足跡を確かめようとしたがはっきりしなかった。

3月30日

小法師尾根分岐より法師岳へは、ゆるい簡単な登りである。しかし、広い斜面状の尾根なので、よく道標に従って行かないと、ガスっている時などリングワンデルングをする恐れがある。法師岳からは、1か所急降するすると六林班手前の鞍部になる。この鞍部は非常に広く、好きな所をテントサイトにすることができる。ここから六林班峠まではゆるやかな尾根である。六林班まで来ると鋸山、庚申山がすぐ目の前に大きな山容で静かに横たわっている。女山を越えると、鋸まではやせ尾根となり、気をつけないと危険である。これを過ぎるとちょっとした広い所に出る。テントが張れる。ここから鋸山頂まで急登であるが、長くはない。鋸山頂からは、北方に社山、黒檜の稜線、その向こうに男体、日光白根、すぐ眼前には足尾山塊の主峰皇海山とパノラマを織りなす。鋸からは急下降で、岩場もあり、表面が凍っていてたいへん危険である。岩場ではザックだけを先におろし、身軽になって、木を伝っており。この下りに1時間以上を費やす。皇海山への登りはトップをどんどん交替しながら進んだが、雪にかなりもぐり、だいぶペースが遅れる。山頂まで10分と書いてある岩を通り越えても、とうてい10分では着かない。皇海山頂より50mぐらい東寄りの所にテントを張る。

3月30日

皇海の下りは急である。皇海山頂からは、北に向かって一番左側の尾根を下らなければならない。道標は完備しているので常に確認すること。山頂から500mも下ると、県境沿いの道は90°東に曲がる。雪の深い斜面の下りとなる。プレートが雪に埋まっている所もあり、一度道をまちがえた。皇海の下りでは、三俣山より北へ宿堂坊山、錫ヶ岳、笠ヶ岳、三ヶ峰山および日光白根などの山々が良く見渡せる。皇海の急降が終わると、国境平まではゆるやかである。時間が早いので、縦走計画断念のため国境平をテントサイトとする。東側は松木沢を隔てたオロ山や庚申山が壁をなしている。

4月1日

国境平よりモミジ尾根を経て下山である。モミジ尾根は、はじめはゆるやかである。シガの足跡

が多数見られる。途中から急斜面となり、しかも東面であるので、雪がやわらかく、くずれやすいので、木につかまりながら慎重に下降する。尾根をおりきったニゴリ沢は、広く、川と言っても良い程である。ニゴリ沢が松木沢にそそぎ込む。川床を右に左に飛び石伝いに渡りながら進む。ふり返ると皇海山はもう小さくなっている。兩岸が狭まり、ゴルジュ的な所を抜けると砂防ダムに行く手をさえぎられる。ここは、器材置場の裏を通れば良い。やがて、はっきりとした道に出、遠くダムが見えてくる。鉾山を経て間藤の駅までは一本道である。

## 気象報告

3月26日

前日の天気図によると、日本付近は1025mbの高気圧におおわれているので、27日は良い天気であろうという予想であった。

3月27日

予想どおり朝から快晴。気温もかなり高く、まるで夏山を登っているようだ。しかし、12時頃から少し雲が広がりはじめ、のち曇りとなった。

3月28日

27日の天気図によると、28日は高気圧も去り、弱い低気圧が日本海付近に発生。このため、大きくくずれることはないにしても、天気は下り坂であろうという予想であった。

朝から曇っていて、7時頃から雪がちらついたが、たいしたことはなく、10時頃から天気は回復した。13時40分頃空は晴れ、風がでてきた。雪量1m~2m。

3月29日

日本付近には弱い低気圧がある。そのため、29日は天気がくずれるだろうという予想であったが、28日夜は星がきれいに見え、29日朝は快晴であった。9時頃から天気は下り坂になり、絹雲が現われ、太陽にカサがかかった。下り坂のしるしである。

3月30日

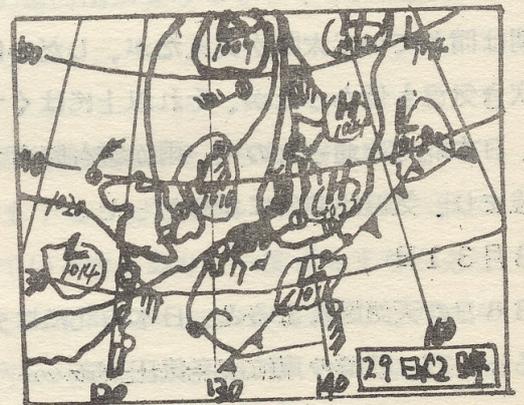
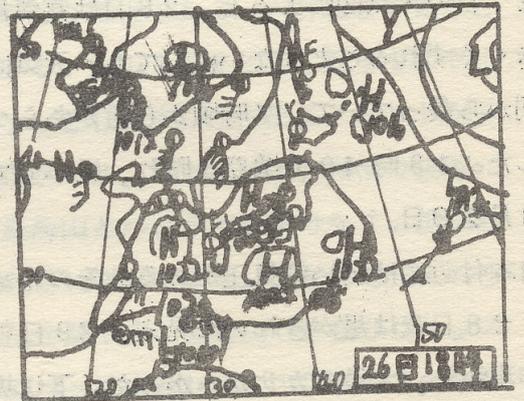
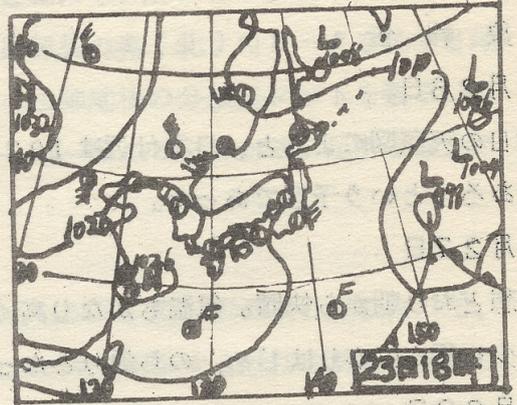
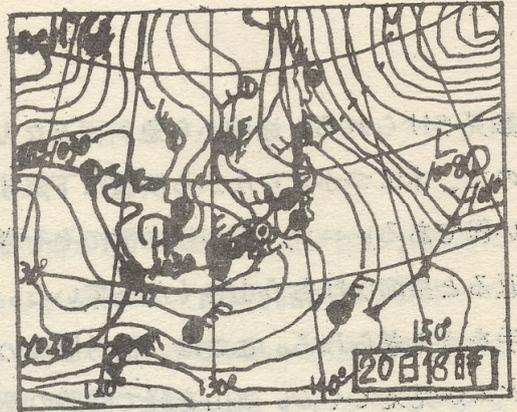
朝は晴れていて太陽が見えたが、しだいに下り坂になり、8時45分頃から曇ってきた。風も少し吹き気温も低かったが、それ以上にはくずれず、どうやら天気はもちこたえた。発達した低気圧は、日本北方を通ったので、雨か雪も降らずにすんだのだろう。16時頃から太陽が出てきて、風も強まり、気温は非常に低めだった。

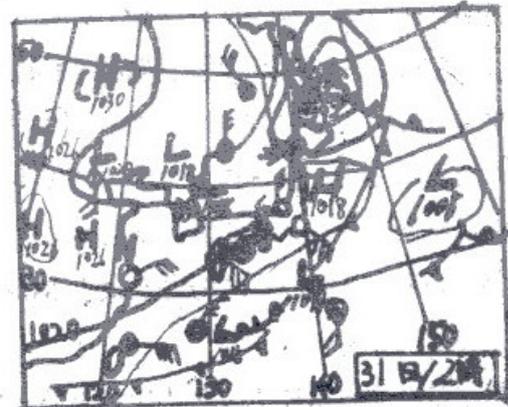
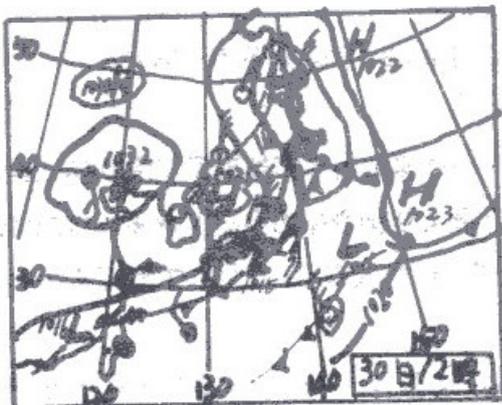
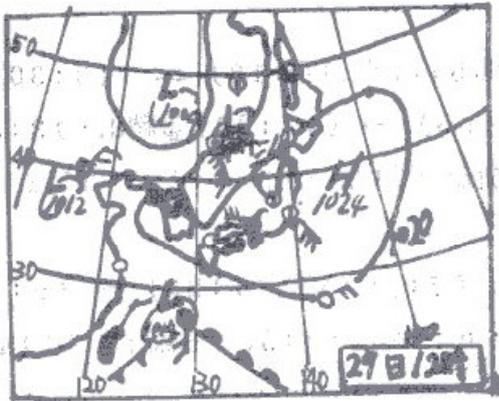
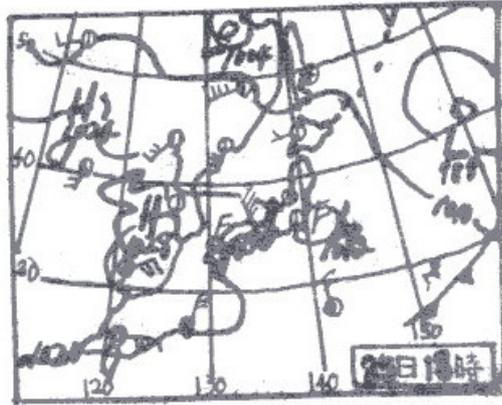
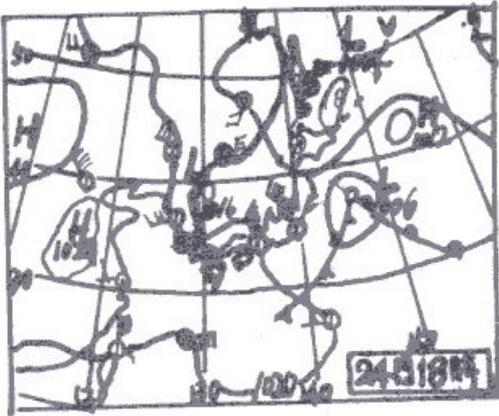
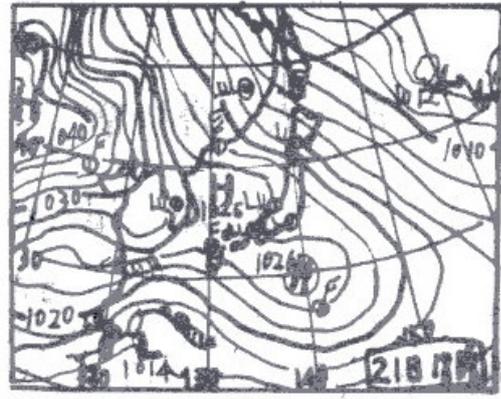
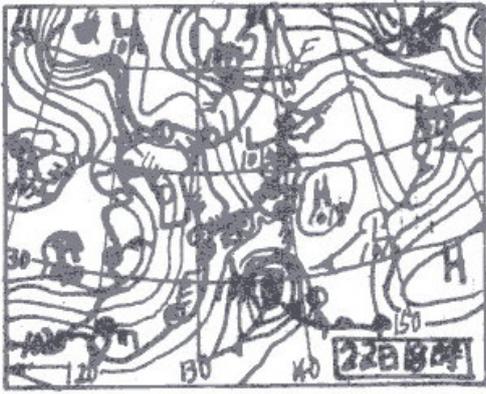
3月31日

30日の天気図によると、日本の北には強い低気圧があり、また前線が日本の東から南にのびている。一方、朝鮮の東には高気圧がある。予想はたてにくかったが、30日夕方より天気は回復に向かっていると思われたので、31日は大きくくずれないだろうと予想した。実際、朝から晴れていた。皇海山頂での日の出は格別であった。気温が低いので、雪はしまって歩き良い。しだいに風が強まりだした。

4月1日

31日の天気図を見ると、発達した低気圧(992mb)が依然日本の北にあり、また大陸には弱い低気圧が軒並み発生。天気は悪化しそうである。朝から曇りで風が強く、北西部はガスでおおわれていた。また、松木沢下山途中より、ガスは消え、上空には青空ものぞけた。





合宿一週間前より、合宿最終日前日までの天気図  
合宿前は18時のもの、合宿中は12時のものである。

# 新 人 合 宿

## 足 尾 ・ 日 光 山 塊

5月2日～5日

### 隊 編 成

#### A 白根隊

海老原、渡辺、酒田、海老沼

#### B 社山隊

太田、山口(昌)、鎌田、井上、広田

#### C 袈裟丸隊

長谷、山口(修)、滝野、田口

### 各隊行動報告

#### A 白根隊

5月2日

桐生(6:30)＝東武・日光(8:45)＝(10:05)湯元(10:10)＝(10:30)金精  
トンネル入口(11:10)－(11:45)金精峠(11:55)－(13:20)金精山(13:35)  
－(15:10)五色山(15:15)－(15:45)前白根山(15:55)－(16:30)避難小屋

5月3日

小屋(5:25)－(5:45)凹地中央(5:55)－(7:15)稜線(7:25)－(9:45)  
錫ヶ岳(11:25)－(12:30)2060mP.(13:00)－(13:55)三林班沢頭(14:00)  
－(15:30)宿堂坊西鞍部 

5月4日

 (6:35)－(9:40)三俣山(10:25)－(12:30)国境平  集中

5月2日 ①

東武日光駅より湯元行きのバスはすぐに出ている。金精峠まで行くには湯元で乗り換えねばなら  
なかった。金精トンネル入口でバスをおり、11時10分より歩き始める。トンネルの左側から踏  
跡が続いている。金精峠までの急登は、50～100cmぐらいの残雪で、たいしてもぐらないが、ス  
パッツをつけて行く。

金精峠には、売店風の小さな小屋がある。まだ雪のだいぶ残っている丸沼、菅沼などを見おろす。  
金精山への踏跡は、はっきりとは残っていなかった。金精山下で岩壁に行きあたってしまい、西側  
から大きく巻きこむようにして金精山に出た。

五色山へは稜線上を行く。雪庇が残っているので注意が必要である。五色山までの間に2～3か

所テントサイトがある。五色山山頂は雪が消えていた。ピークの頭の部分だけは雪が消えていたが、あたりはまだかなりの残雪である。しかし、雪はだいぶしまっているのだから、そんなにもぐらわずに歩けたのは幸いであった。五色山からは、日光白根が眼前に大きなドームをなしている。五色沼は、まだ雪の原である。その南方に白根の避難小屋が見える。

前白根を越えて避難小屋へ向かう。南西に延びる稜線をそのまま15分もたどると、避難小屋へおりの分岐がある。小屋到着が16時30分で、ここまで歩いた距離の割には、意外と時間をくってしまった。小屋は2軒建っている。すでに数パーティーが入っていて、合計20人近くが小屋に泊まったようだった。水は五色沼まで汲みに行けばあるそうだが、あたりの雪をとかせば充分である。昼間は天気は良かったが低気圧の影響で夕方より雲が多くなってきた。

5月3日 ③→①→③

5時半に小屋を出発する。スパッツとアイゼンをつけて行く。しまった雪にツアックは、サクサクと小気味よい音をたてる。小屋からは稜線に戻らず、凹地を経て県境に入るコースをとる。二段に分かれた凹地は、何やら不気味であやしげなムードが漂っている。凹地の南西の2380mP.と日光白根からの稜線の鞍部につき上げて、そこより南にピークを目ざす。地図上ではたいして急でもないようだが、実際は灌木帯の急登で、ここは雪がかなりやわらかく、腰までもぐりながらの奮戦であった。稜線にとび出ると、360°のパノラマが展開される。白根、男体、太郎など日光連山に対して、皇海、錫、三俣、黒檜などの足尾連山が双壁を成す。富士山ももやのかなたにながめられた。

錫ヶ岳までは、さして急でもない稜線上の道である。何よりもまわりの景色を思いのまま楽しむのがうれしい。錫ヶ岳到着が9時45分で予定より早く着けたので、錫ヶ岳西峰2340mピークをピストンする。往復時間は約35分である。ここからは、武尊、笠、三ヶ峰、至仏、燧、白根などが見渡せる。笠より三ヶ峰、峰山と続く稜線は、まだかなりの雪が見える。

錫の急降を過ぎ、三林班沢の頭、荷鞍尾根の頭と小さなピークを越し、宿堂坊に向かって東に進む。この二つのピークには標識板がある。荷鞍尾根の頭からは南に延びる道がついている。恐らく1793.4m三角点を経て、坪川方面に続いているものと思われる。

宿堂坊との中間点1980mP. (ネギト沢の頭)付近は、尾根が広いため道標に注意しながら進む。北東方に柳沢の林道が見える。

宿堂坊との鞍部は、南側は切れ落ちていて、北側はやや傾斜がゆるい。適当な所に、テントは2~3張りは張れるだろう。きょうはきのうと比べてだいぶ楽に来られたので、明日以後このペースで行けるだろうと予想して、ここにテントを張る。

5月4日 ①→③

朝の出発がやや遅れた。宿堂坊までは1ピッチ。山頂三角点付近は、雪が消え土が顔をのぞかしている。ここで、三俣山方面からの2人組に会う。ここより楽な下りが続く。所々、雪が消えている。ヤジの水場の鞍部は、まだ雪がべつとりと残っている。三俣山までは木の中の登りである。

1時間もすれば山頂に出る。山頂も木の中でたいして眺めは良くない。三俣山は、社山隊との合流点であるが、黒檜岳方面よりの踏跡がなかったので、まだ遅れているようであった。社山隊の到着をしばらく待ってみたが、だいぶ遅れているようなので、書きおきをして先に出発する。

三俣山から先は、道の雪はもう半ば解けていて、陽の当たる所はほとんど残っていない。国境平までは楽な稜線が続く。笹の茂った所は実に気持ちが良い。東側がかなり切れ落ちている場所もいくつか通過するが、プレートを追って行けば危険はない。

国境平の一つ手前の鞍部(1620m)はかなり広く、テントサイトに絶好である。雪は残っていない。「水場東側2分」という標識がある。ここからピーク1つを越せば国境平である。雪は所々にある程度だが、西側斜面はまだ30cm程度はある。水場は西側の沢におりた所で15分である。

どうやら無事に集中地国境平に着いたが、意外にも他の2隊をさしおいて、第1番目に到着してしまった。他の隊が来るまで、びしょびしょになった靴下をかかわしながらかゆくりとする。

全コース中、オーバーシューズ、わかんは一度も使用しなかった。常にロングスパッツのみで、3日の午前中のみアイゼンを使った。

## B 社山隊

5月2日

桐生 = 間藤(8:40) — (10:05) 十条の滝 — (10:15) 約1100m地点(10:45) — (11:15) 吊り橋(11:20) — (12:10) 見晴(12:20) — (13:25) 半月峠(13:35) — (14:00) 半月山(14:20) — (14:40) 半月峠 — (15:15) 阿世瀉峠

5月3日

(6:00) — (7:12) 社山(7:30) — (7:50) 社山西鞍部(8:35) — (9:00) 1780mP. (9:05) — (10:20) 1880m地点(11:00) — (11:30) 大平山分岐(11:40) — (12:40) 大平山(12:50) — (13:40) 大平山分岐(13:50) — (13:55) ワカン取付(14:15) — (14:45) 黒檜東鞍部(14:50) — (15:05) 黒檜岳(15:10) — (15:50) 黒檜岳西鞍部

5月4日

(6:20) — (7:20) 1920mP. (7:25) — (7:45) シゲト山(7:55) — (8:30) 西ノ湖下山道分岐 — (9:50) 1920mP. — (10:35) 1960mP. — (10:40) 昼食(11:05) — (11:55) 1980mP. (12:00) — (12:40) 三俣山(12:50) — (13:45) 1840mP. (13:50) — (15:00) 国境平 集中

5月2日

間藤駅から15分ぐらい歩いて鉄橋の手前を右に曲がる坂道が、半月峠への登山道である。左下に沢を見ながら10分あまり行くと道は沢を渡る。ここからしばらくの間道は沢の右岩を、沢沿いにゆるい登りで続く。部分的に荒れてはいるが、石垣が積んであったりして、古い登山道であるこ

とがしのぼれる。十条の滝を過ぎた所から道は沢と同じぐらいの高さになり、クマ笹が道の両側におおいかぶさってくる。

吊橋を渡って道はいくらか急となり、尾根に沿って1511mのピークの所へと続いている。1511mのピークを巻いて見晴に出ると、そこからはこれからわれわれが行く稜線や男体、袈裟丸連峰などすばらしく良く見えた。ここから道は、半月山の中腹を巻いて半月峠へと続く。半月峠より半月山ピストンをしたが意外と疲れた。半月山頂は木が切り倒されていて男体が良く見えるがゴミの多さにがっかりさせられた。

半月峠にテントを張るなら、日光側に1~2張りくらいなら場所はあるだろう。阿世瀉峠にわれわれは十分な広場を見つけてテントを張った。水は中禅寺湖まで汲みに行った。下り10分、上り17分を要した。

5月3日

阿世瀉峠から社山までは約400mのだらだらの登りが続く。社山を下った最初の鞍部にはテントサイト適地があるが、1720mの小さなピークを越えた所の鞍部の方が広くて良いであろう。ここから足尾側に5分も下れば十分水が得られることだろう。われわれもここで各自4ℓずつ水を補給する。このあとも道はなだらかに続く。1800mP.を過ぎたあたりでは、笹を倒せば絶好のテントサイトになるだろう。1900m地点で昼食をとる。このあたりは日陰の所などには雪が多く残っている。

大平山分岐手前でわれわれのパーティーは、鋭い鳴き声とともに鹿が2頭大平山方面に走り去るのを見た。

大平山へ稜線の南寄りを笹を分けながらピストンに行く。途中で再び鹿3頭が下の方に逃げて行くのを見た。大平山の三角点は雪の下に埋もれているようで、ついに発見できなかった。大平山分岐から急に雪が多くなって、皆ワカンをつける。黒檜岳手前の鞍部には、三沢側に水の標識があったが、雪が多いのでそのまま黒檜へと目指す。黒檜岳の登りは、たいへんゆるやかで、疲れも感じないで頂上に着く。黒檜岳頂上は見晴らしの悪い所で、干手ヶ浜への下山道がある。黒檜岳を下って最低鞍部の手前の道の上にテント1張りやっとな張れそうな所を見つけてキャンプする。

5月4日

明るい尾根上では雪はほとんどないが、木の茂っている所は雪が多く、腰くらいまでもぐる。1920mP.までゆるい登りで、頂上で直角に曲がって、道は南にシゲト山へ向かう。シゲト山の標識に1920mと書かれてあったのは明らかに誤りである。シゲト山を下ってなだらかな道を30分ばかり歩くと、西ノ湖下山道分岐点がある。

三俣山への道は踏跡が雪に埋まっていたりわかりづらい。三俣山頂手前で、白根方面からの足跡、および雪の表面に白根隊からのサインがしてあったのを見て驚く。

三俣山より集中地国境平までは、皆足が軽やかに動く。

## C 袈裟丸隊

5月2日

桐生(6:38) — (8:00) 沢入(8:05) — 林道分岐(8:54) — 林道終点(9:17) — (10:30) 双輪塔(11:00) — (12:58) 賽の河原と二子山との分岐(13:03) — (13:25) 二子山(13:35) — (14:05) 分岐(14:15) 小丸山(15:05) — (15:20) 袈裟丸避難小屋 合

5月3日

合(5:30) — (6:47) 前袈裟丸山(7:02) — (7:36) 後袈裟丸山(7:46) — 坊主(8:25) — (10:30) 奥袈裟丸山(11:05) — (11:20) 見晴らし(11:30) — 法師岳(12:50) — (14:07) 六林班峠 合

5月4日

合(6:00) — (7:42) 鋸山(8:00) — (9:55) 皇海山(10:43) — (11:13) — 西方調査(11:25) — (11:47) 皇海山(11:55) — (12:53) 国境平 合

5月2日 ①→◎

桐生発6時38分の電車は途中で学生で混む。沢入より、25分歩き5分休みのペースで歩き始める。50分で林道分岐に出る。右が塔の沢線、左が西山線。右の林道に行く。5分程歩くと雪が出てきた。沢に沿って歩くので、賽の河原まで水はほとんど不要である。このコースはほとんど急登がない。賽の河原手前で右に寄りすぎて道をまちがえる。ヤブこぎをして道に出、賽の河原と二子山との分岐に荷を置いて二子山をピストンする。二子山までは、巾5~6mの防火帯が道になっていて歩き易い。二子山には群大WVの道標がたっている。見晴らしはそれほどでもない。引き返して小丸山へと向かう。小丸山まで雪は所々であったが、下りはひざまでもぐった。袈裟丸避難小屋は入口のドアがなく、近くにあったトタンで代用した。小屋の半分に笹が敷いてあったが、敷いてないところは湿っていてジメジメした。水場は南側5分。水量はそんなに多くない。

5月3日 ◎→①

小屋を出、雪と笹の原を通り、前袈裟の急登にかかる。雪も多い。前袈裟、後袈裟間に5m程やせた場所があるが、土が露出していたので、3月に来た時ほどの危険もなく楽に行けた。後袈裟では赤城山が目の前に大きく見える。後袈裟からは雪はさらに多くなり、スパッツが必要であった。法師岳をややおりた所でわかんをつける。六林班峠のちょっと手前で、右に寄りすぎて道をまちがえる。六林班峠での水場は、群馬県側が下り5分上り7分、栃木県側は下り7分上り15分であった。

5月4日

スパッツ、ワカンをつけて出発。途中ワカンだけはずす。鋸山からは皇海は眼前に現われる。皇海山からの見晴らしはあまり良くない。昼食をとって山頂より西にのびる尾根を調査する。肩まで道はついているが、人の入った形跡はほとんどない。

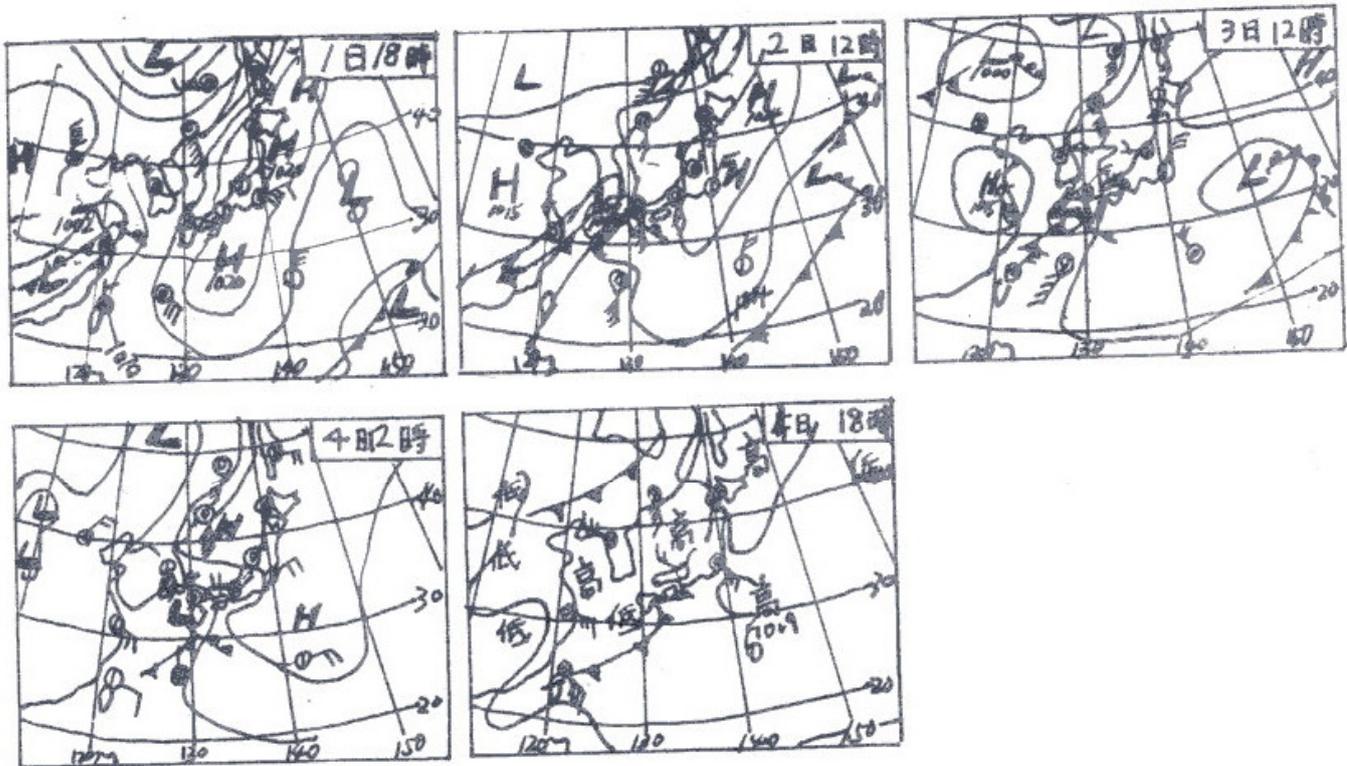
皇海からの下りは、プレート、フラッグをたどって行けば、積雪、残雪期のように、わかりづらいことはない。

## 集中後

5月5日

集中が成功したので、予定どおり6時起床とし朝はゆっくりとする。8時半3パーティーはそろって出発である。下り道はほとんど雪はなく、急降もかけおけるように下った。長い松木沢を終え間藤の町並みに出てから、工学部WVの恒例?とかで駅までマラソン。

## 新人合宿・気象報告



- 5月2日 朝から雲一つない好天であつたが10時頃から絹雲がでてきて、12時頃には曇りになつた。天気は下り坂の模様。
- 5月3日 九州の西にあつた低気圧は停滞しており、必配された雨もふらずくもり時々晴から、10時頃晴れになり、すぐまたくもつた。
- 5月4日 九州の西の低気圧はかなり衰える。朝6時には晴れていたが9時半頃からくもりとなつた。しかし雨の必配はない。皇海はガスにかくれる。
- 5月5日 上空は晴れていたが、西はガスがかかつていた。まもなくくもりとなつたが、雨が降つたのは20時過ぎで桐生に着いてからだつた。

以上

P 074: 欠

# 夏合宿準備山行 中倉山～オロ山～庚申山

6月27日～28日

渡辺 海老原 田口 井上  
海老沼 酒田 尾高

6月27日

桐生(8:49) ~~二重~~ (10:25) 間藤(10:30) - (11:35) ダムサイト  
(12:00) - (13:10) 中倉山東尾根 1070m (13:15) - (14:55)  
1499m 三角点 (15:00) - (15:10) 中倉山 (15:25) - (16:55)  
1690m 三角点 (17:00) - 17:10 同越えた鞍部 

6月28日

 (4:45) - (6:15) オロ山 (6:30) - (8:00) 剣が峰三角点 (8:10)  
- (8:50) 山荘手前水場 (9:10) - (9:50) 村道 (10:00) - (11:00)  
銀山平 (11:10) - (12:15) 原向駅 (13:10) ~~二重~~ (14:50) 桐生駅

6月27日 ◎ → ①

予定の6:38発に乗り遅れ、次の間藤行で行く。間藤駅より早いペースでダムの手前に30分で着く。が沢を渡るのに適当な場所がなく、30分もかかる。手前につり橋があったが、入口に鍵がかかっていて通れなかった。沢は深さ50～70cm、幅5m程であるが、流れが早く、下がすべる。渡りきった所で昼食。仁田元沢は、直径1m位の水道管のようなものの上が、通れるようになっている。防砂ダムまでは小道がある。そこから、東に延びている中倉の尾根にとりつく。尾根へ出るとすばらしいながめであった。社山、半月山、遠く男体山も見える。このころから晴れてくる。次のピークが岩がもろく、岩を引かないように慎重に登る。中倉手前の1時間ほどが楽なヤブであった。どの尾根も下の方は木はない。1499.4m三角点を一度まちがえる。中倉山山頂で1499.4mと書いてあるプレートをとりつける。(苦情が出たら部長が責任をとるそうだ。)その前で記念写真。山頂附近はかなりスペースがあり、5つ程度テントがはれる(但し水はない。)水が不足してきた。中倉からは、鞍部は笹原で道がついており、ピークの前後もたいしたヤブではない。北側斜面は概してガレていた。中倉とオロ山の中間に地図にない三角点があり、それを越した所にテント。海老原さんが鹿を見る。水が不足し、水を使わない簡単な食事をすまし、7時就寝。水のない苦しい夜、風が雨の音に聞こえる。

6月28日 ○

3時起床。2年の間で飯を炊かずに水場へ急ぐことで意見一致、しかし、部長の一声で朝食をとり出発。オロ山の手前のピークまで、だいたい道がついており、鞍部も幅も広く、深い笹原に

なっている。鞍部の最下点に沢におりるらしい道が左右についていた。はじめ斜面はヤブがひどく、苦勞する。上へ出ると笹原で踏み跡もあった。下の道が左から巻いているのかもしれない。しばらく笹原を進むと、又ヤブになる。山頂に近づくとつれ、激しくなり、最後には足が土へつかなくなる。オロ山三角点には、わが部のプレートがあった。北側はながめがすばらしく。白根まで見える。狭い山頂で水の配給を受け、一息ついて出発。ここからはほとんど踏み跡がある。例によって鞍部は笹原、庚申に近づくと、下草の少ない木々の間をぬって歩く。1時間半で剣ヶ峰と書かれた三角点に着く。庚申山の表示はないが、ここが1901mの三角点であろう。最後の水が配られる。ここから鋸へは道がついているようであった。ピストンはやめて水場へ急ぐ。15分程度で山荘へ着くと思ったら、なかなか長い。急な下りが続き、クサリをつたわって下りたり、岩のトンネルをくぐったりするうち、40分でやっと山荘の上の水場についた。待望の水をたっぷり飲み、ビスケットをたべてから帰途につく。林道までなだらかな坂が沢ぞいに続く。林道の少し手前で宇都宮大WVのテントに出会う。あとは10Km程の林道をひたすら歩く。銀山平まではバスが入っている。12:15分原向駅に到着。無事今回の山行をおえた。

## 第一次秋合宿 (O.B. 合同ワンデルング)

10月10～16日

O.B. 参加者	草場	山田	埋橋
4年生	堀江	高橋	
A 隊	海老原	鎌田	渡辺 海老沼
	尾高(草場)		
B 隊	長谷	山口	酒田 田口

B 隊 庚申山 - 笠ヶ岳 - 三重線沢

10月10日 ○ → ●

桐生~~原~~原向(10:30) - (11:35)小滝の里(12:05) - (12:30)銀山平(12:45) - 登山口(13:10) - (16:20)庚申山荘 

10月11日 ◎ → ○

 (7:10) - 剣ヶ峰(8:50) - (10:30)薬師岳(11:00) - (11:50)鋸山(12:10) - (13:50)皇海山頂(14:00) - 国境平(15:10) - (15:50) 

10月12日 ○→◎→( )  
ガス ガス ガス  
◇(7:00)ーカニキタコル(8:20)ー(9:20)三俣山(9:40)ー(11:00)ヤジの水場ー(11:48)ヤジの頭(12:30)宿堂坊山ー(13:10)鞍部 ◇

10月13日 ○ 沈殿

10月14日 →◎→◎  
ガス ガス ガス  
◇(10:10)ー(11:20)荷鞍尾根の頭ー(12:10)柳沢の水場(13:00)ー(14:20)錫ヶ岳ー錫ヶ岳下鞍部 ◇(15:30)

10月15日 ①

◇(6:15)ー(7:00)笠ヶ岳ー(10:30)三ヶ峰(11:00)ー峰山(12:05)ー(14:50)1645m Pー(16:30)三重泉沢 ◇

10月16日 ○

◇(5:50)ー(6:05)A隊と合流(7:00)二沼田 桐生

10月10日

原向うからいつものように林道歩きである。銀山平に新しい国民宿舎ができたためか、車が割合に多い。車の埃をあびながら歩く。小滝の里で昼食をとり充分休む。天気もよいことだしのみりと歩く。銀山平の国民宿舎を過ぎ道は北に向う。小さな橋を越え、すぐに馬鹿尾根登山口がある。普通は林道終点まで行き、そこから庚申山荘に行くのであるが、時間もあることだし馬鹿尾根登山に変更である。ちょっと登ると庚申山という標識がある。この道は全く見晴しが悪い。単調な道である。登りつめるとあとは斜面を巻いて行くだけである。斜面一面、木が切り出されていて小枝がいっぱいである。ここをぐるりと回り、また木の中へと変る。道ははっきりしている。やはり以前と変りなく単調である。この頃から空模様が悪くなってくる。小さな沢に出る。沢沿いに登るような踏み跡があるが、沢を渡らなければいけない。沢を渡る頃には、本降りらしくなってくる。急ぎ足となる。どんどん行くと、大きな岩が幾つもあるような所に出る。進入禁止のところには、木でサクが作られている。濡れてすべりやすい岩を歩いて石段に出るともう庚申山荘に着く。山荘の手前を幕营地とする。OBの参加者は、桐生から同行の草場氏と、後からやって来た山田氏と埋橋氏だけである。あと数人来る予定であったが急用のため参加していただけなかった。6時ごろ雨は小止みとなる。

10月11日

起床5時30分。雨は止んでしまった。昨晚が遅かったため起床が遅れてしまった。山荘で登山届を提出し、小屋の裏手から登り始める。OBはサブザックで現役はキスリングと差はあるが、現役の強みでがんばることにする。OBには国境平から下山してもらう予定であるが、起床が遅れてしまったので行けるかどうかわからない。大きな岩の下をぬけ急な登りを行う。普通ならば風景も良いそうだがきょうはあいにく曇空で、わずかにガスがかかっている。予想以上に時間がかかる。やはり試験後の合宿のためか、全員バテ気味である。OBは平然と歩いている。なんと

か剣ヶ峰に着く。きれいに刈り払われた道を行く。昨日の雨で先頭はびしょ濡れである。ちょっと時間がかかりすぎているらしい。OBがきょう中に国境平から下山できるか危しくなってきた。見晴台から埋橋は帰るそうだ。天気の方は良くなりそうにもない。いやな登り降りをくり返してやっと鋸山に到着する。鋸山でOBの人達は国境平下山が無理なので、六林班から庚申山荘に下山されることになった。OBの草場さんはA隊と合流して途中まで参加するそうである。山田さんと4年生の堀江、高橋さんが六林班に下山されることになった。ここから急な下りをおりて、鞍部に出る。鞍部から皇海への登りが始まる。予想以上に早く登れた。皇海の登りはいつも長いようであるが時間的には早い。皇海山頂は木々にかこまれていて、景色は一切だめだが、何かほっとした感じがするものである。ここで2度目の昼食をとりA隊と別れる。我々は国境平に向う。きょうはカニタコルまで行く予定であったが無理なようである。今日は国境平をこえて次の水場まで行くつもりである。国境平まではいつもの様にかけあして行く。ガスが強くと視界はあまり良くない。1時間ちょっとで着いてしまう。国境平から小さなピークを2つばかり越えるときょうの幕営地である。国境平の水場は群馬県側、こちらは栃木県側である。どちらも水量は割に多い。両者とも水場の標識がある。

テントを張った頃にはガスが強くなり、雨も降り始める。

#### 10月12日

起床3時。雨が降っている。ガスも濃い。天気図からしても良くない様だったので、一応出発を延期する。7時頃には雨も止み、時々ガスが晴れる。出発する。熊笹の中の道のため全員びしょ濡れになってしまう。時々ガスが消え、きれいな紅葉が現われてくる。ガスの合い間に見る紅葉は実にすばらしい。鹿の鳴き声がいろいろな所から聞えてくる。群馬県側からがほとんどである。カニタコルは熊笹におおわれているが、テントは張れるようである。水場の確認はできなかったが、栃木県側にあるそうだ。ここから急な登りである。少し登ったあたりで道がわからなくなったが、すぐに標識を見つけて道にもどる。まだ天気は回復しそうにない。時々ガスがスーと消え紅葉が姿を見せるだけで、曇り空のままである。三俣山頂で休み、5分程で、シゲト方面と日光方面の分岐に出る。分岐からは割合に倒木が多くなり歩きにくい。どんどん下って行くところヤジの水場であるが今回は気づかずに通り過ぎてしまった。熊笹が多くかきわけての前進である。小さなピークがヤジの頭であるが、標識はない。わずかに下ってまた急な登りになり、この頃から雨が降り始める。もうしょうがないのでどこかにテントを張ることにするが、よい場所がないので宿堂坊を越えてしまうことにする。宿堂坊から西ノ湖に下山できるらしいがヤブこぎらしい。宿堂坊をおりたところにやっとテントが張れそうなのでそこに張ることにする。雨はまだ降っている。道の上に張ったためにテントは斜めに傾むいている。水場を捜しに行くが約20分程であった。このあたりはどこでも栃木側に下れば、水の確保はできそうである。また柳沢林道にも楽に下れそうである。

予定より遅れているので石油を節約する。ガスは濃く雨は止んでしまった。

10月13日 沈殿

10月14日

雨がまた降っている。ガスも濃い。雨がやむまで待機する。9時頃雨は止んだが、ガスは濃い。出発は10時になってしまった。ガスは晴れそうにもない。昨日からの雨で濡れた笹が体にまとわりつく。顔から足までびしょ濡れである。靴の中まで水がはいってピシッピシッ音をたてている。寒い。休むとなおさら寒い。ネギト沢の頭、荷鞍尾根の頭と登りつめる。荷鞍尾根の頭から時々ガスが消え群馬県側の紅葉がすばらしい。赤や黄色の木々の美しさは山でなければ味わえないものであろう。ここからはあまり大きな登りはない。三林班沢の頭、2077m P.と続いている。2077m P.を下ったところが柳沢の水場である。栃木県側に下ったところにテントサイトがある。数張りは可能である。道から約20分で水場に出る。大きな沢である。明日の水を確保して道にもどり、昼食をとりまた登り始める。もう錫ヶ岳への登りである。急ではあるが休むと寒いので、休まずに山頂まで行ってしまおう。1時間ちょっとで登ってしまった。途中で雨が降り始める。山頂で笠ヶ岳への道がわからなかったが、まっすぐ進めば良いようである。右に曲れば白根方面である。笠ヶ岳へは、はっきりした道が続いている。錫ヶ岳の下の2040mピークの手前で、北に下ってしまい道をまちがえてしまった。もとにもどり南に向う。このあたりは下草がなく林の中のため、道らしいものがいろいろあるから注意を必要とする。またきれいな道が続き鞍部へと出る。鞍部の北側は、木がきれいに切り払われている。鞍部に池塘があるがきたなく、水として使えない。天気は回復してくる。きょうはここまでとする。テントを張り、たき火をする。石油が残り少ないので、炊事以外は節約。石油はあと1日ももちそうにない。明日中に定着地に到着できないと困る。

星がとてもきれいで、明日は晴れそうである。

10月15日

3時半起床。まだ空一面星である。きょうは久しぶりに晴れそうである。笠ヶ岳までは道がはっきりしている。だんだん木が少なくなり下草が多くなってきた。予想したように快晴となる。皇海、宿堂坊、武尊がよく見える。笠ヶ岳には標識はなく、だんだんヤブ状の道となってきた。赤いポールがうめこまれているのでこれを頼りにして行く。背丈の高い笹の中へと変ってくる。びっしり張りつめられた竹の中を進んでいるようなものである。手でかきわけ進む。三ヶ峰に近づく程ひどくなってきた。手が痛くなってくる。自分の背丈よりも笹の方が高いのだからどうにもならない。ところどころ、木がすっぱり斜めに切られて切り口がとがっていて危険である。切り口の上に倒れようものなら大ケガである。何とか三ヶ峰に到着する。1升ビンがころがっている。赤布をつけて昼食とする。三ヶ峰から峰山までは尾根も広く方向が取りにくい。適当に方向を定めてヤブこぎをする。ところどころ道らしいものがあるだけであった。峰山から南西の尾根に向う。峰山からちょっと下りたところで、カモンカに出くわす。ここで急に刈り払われた熊笹の草原に出る。1645mピークまできれいにい見渡せる。しかし刈り払われた笹はここだけで、

あとはまた背丈の高い笹となってしまう。ところどころ道状に刈り払われているがすぐ笹の中にはいってしまう。遠くから見るときれいだが、歩くとなるとたいへんだ。1645 m P. から奈良の部落に下りても、きょう中に定着地に着くことはむずかしい。ちょっと危険かもしれないが南西の尾根を下り、三重泉沢と坪川の合流点に下ることにする。ピークから下りたところは、植林された林の中である。下草が刈り払われていないためひどいヤブである。しかし、植林されているため道があるだろうと期待する。予想通り道に出る。ところどころ不明となっているがもう楽である。あとは下る一方である。急なところを下りてしまうと林道そばの三重泉沢に下山してきた。明日からの沢登りに少しでもアプローチを短くするため上流に行き幕営する。濡れた物を干してから、A隊の幕営地を捜し始める。計画ではA隊は林道終点に幕営することになっていたの、林道をつめていく。この林道は廃道となっており、自動車は全然通行できない。終点についてA隊を呼んでみるが全然返事がない。坪川に下りて河原を上流に向って歩いてみるが、靴跡が1つあるだけでテントも人影も全然ない。何らかの事故があったのではないかと思い、あきらめてテントにもどる。石油はほとんど残っていない。食料も少なく、米だけラジウスでたいて、あとはたき火で行なう。

10月16日

2時起床。林道を奈良に向う。道に矢印をつけてB隊が奈良に向ったことがわかるようにした。しばらく行くと青い服を着た人影が見え始める。A隊である。B隊が遅れたため、奈良から峰山に捜しに行くところであったらしい。とにかく両隊の無事を喜ぶ。沢の方はアプローチが長くて無理とのことであったのであきらめて下山する。

## A 隊 庚申山—皇海山—坪川

10月10日～16日

海老原 (CL) 鎌田 (SL) 渡辺 尾高 海老沼 草場 (OB)

10日 B隊に同じ

11日 ◎ → ○キ

庚申山荘 (7:10) — (11:50) 鋸山 (12:10) — (13:50) 皇海山 (14:10) — (17:45)

12日 ○

(6:10) — (7:20) 滝上部 — (8:50) 滝下部 (9:15) — (10:10) 湯の沢出合 — (10:45) 三俣沢出合 — (11:20) 村落跡 — (12:00) 三重泉沢 (12:

30) - (12:45) 

13日 ○ 沈殿

14日 ○ 沈殿

15日 ◎→①→○

 (6:30) - (7:25) 平滝村落跡 (7:30) - (8:15) 三俣沢出合 (8:20) - (9:00) 荷鞍尾根の頭からの沢出合 (9:10) - (9:15) 三俣山からの沢と宿堂坊山からの沢の出合 (10:30) 引き返す - (13:00) 

16日 ○

 (7:25) - (9:30) 切通しバス停 (9:50)  沼田  桐生

11日

皇海山頂でB隊と別れる。山頂から西にのびている尾根上には、踏跡程度の道がついていたので、それについて南へ進んだが途中で見失なう。標高2000m位の地点から北に向ってトラバースし、皇海山から北西にのびる尾根に出る。この尾根上には道がついている。尾根に出たのは15時35分。道は1920Pから北に向う尾根へと続いている。16時10分には、我々が歩いている道と直角に交わる道と出合う。標高1800m位の地点と思われる。17時10分に、1536mPの南約1kmの地点で、そのピークの東側の沢の上流に入る。約20分で、5m位の滝の上に出る。滝を降りた所にテントが一張はれる位の平らな所があったので、そこをT.S.とする。平といっても、下は岩だったので、エアーマットのなかった人は、さぞ寝心地はよかったと思うヨ。

12日

朝から雨。T.S. 出発6時10分。7時20分に、尾瀬の平滑ノ滝をおもわせるような斜めの滝の上に出る。当然高巻きをするわけだが、右岸は全んど垂直の絶壁。左側は右よりは楽そうに見えたが、それでもかなり急であった。登るのは腕力とつかまった木が抜けなことを信じながら、ヒヤヒヤして登る。下りは、ガレ場をこれまた慎重に下る。結局、この滝一つを巻くのに要した時間は1時間30分。滝の高さは約50m。滝の下で20分休み、出発は9時15分。10時10分に湯の沢に出る。10時45分に三俣沢。11時20分に平滝村落跡。くずれかかった家が5軒ぐらいあり、無気味な感じがする。グミの木が多くある。三重泉沢を越えてから昼食をとり、そこで草場氏と別れる。草場氏は帰り、我々は三重泉沢の西方500mの地点にテントを張る。今日下ってきた沢は、最初の滝以外には、たいしてむづかしい所はなかった。それから地図では村落跡まで林道がのびているが、途中がかずれていて、車は入れない。後で解ったのだが、車は我々のT.S. まで入れた。

13日

沈殿。朝から雨。昼頃に渡辺氏が口笛をふきながらやってくる。

14日

沈殿。この日も朝から雨。沈殿2日目となると、さすがの山男も頭の方に少々狂いが生じてくる。近くで、猿か鳥の声が聞こえると、それに応じてものすごい奇声を発している。さすがの猿たちも、すっかり恐れをなしてしまってシュンとしてしまったようだ。

15日

きょうはめずらしく雨が降っていない。三俣沢へ行くことになる。B隊がまだ合流していないので、昼頃には帰ってくることにして出発。湯の沢との合流点から5分の所に堤防があり、20分の所には10mの滑滝がある。この滝は左岸を巻く。この滝から10分上流の右岸に小屋がある。この小屋は営林署の職員が使っている小屋のようだ。三俣山からと、宿堂坊山からの沢の合流点で昼食をとったりして休む。三俣山からの沢の岩場になっている所は、落差20m位のねじれた滝になっている。そこから引き返し、村落跡から林道に入らず、三重泉沢との合流点まで平川を下る。T.S.には13時に着く。B隊はまだきていなかった。明日は、奈良まで行き、そこからB隊のコースを逆に登ることに決定する。

16日

5時起床。朝食を終った頃に、市川学園OB会が車3台でやってくる。女性が5名混っていた。彼等はこのあたりの沢にはくわしいので、話をしていたので出発が少々おくれた。しかしそれが幸いした。我々が出発の準備をしていた時にB隊が上流から下ってきたのである。一同安心したところで出発。切通しのバス停まで2時間歩いて、そこで昼食、そして桐生へ。

## 第2次秋合宿 日光白根山～社山

11月21日～24日

海老原 長谷 渡辺 山口 鎌田 太田 尾高 海老沼

21日 ○

桐生(5:31) 東武日光(8:42) 湯本(10:30) - (13:18) 天狗平 - (14:05) 前白根山 - (14:35) 避難小屋

22日 ○

避難小屋(6:45) - (8:20) 県界 - (10:35) 錫ヶ岳(11:00) - (12:40) 三林班沢の頭(13:00) - (14:20) 宿堂坊山(14:35) - (15:30)

ヤジの水場 

23日 ○→①

(6:50) - (8:10) 三俣山(8:20) - (10:40) シゲト山 - (11:35) 黒檜岳 - (13:25) 社山(14:00) - (17:05) 間藤(18:53) (20:36) 桐生

21日

紅葉もすっかり落ちてしまい、所々に白い雪を見せる日光の山並をながめながら、バスにゆられて湯本へといそぐ。一面にさざ波をたたえた中禅寺湖は、とても冷たそう。

湯本で昼食をとり出発。リフトの取り付けに忙しいスキー場を登りつめ、白根沢へ入り、ガレ場を通る道に入る。一頭のカモシカを発見する。冬を前にしてブクブクと太っている。天狗平の手前から雪が表われる。雪の少ない所では、その雪が氷っていて歩きづらい。前白根山の手前あたりから少し雪が多くなってきたが、それでも思っていたよりも少く、深い所で30cmぐらい。スパッツは必要としなかった。前白根山の頂上には雪がなく、そこから見る白根山も半分くらい土を見せている。避難小屋は2つあるが、大きい方の小屋を使う。小屋は大小2つ使うと、30人は入れる。水は雪をとかして使う。

22日

全員スパッツをつけて出発。10分で前白根から錫ヶ岳への尾根に出る。尾根に出たから5分で小屋がある。何のための小屋かわからない。錫ヶ岳手前鞍部西側に水場がある。下り1分、登り2分かかる。錫ヶ岳に10時35分につく。昼食をとり出発は11時。12時に柳沢の水場を通過する。ここまでくると、雪は全んどなくなってしまった。13時30分に柳沢林道への近道と書いてあるプレートに出会う。13時40分にネギト沢の頭を通過、ネギト沢の頭と、宿堂坊山との鞍部の北側に水場がある。14時35分に宿堂坊山を出発し、15時30分にきょうのテント場であるヤジの水場に着く。ここはテントが2張ぐらい張れるだけ、ささがかりはらわれている。水場は鞍部の東側で下り3分登り5分、11月で水量は多かった。きょうのコースで、T・Sに適地と思われるのは、ヶ岳手前の鞍部、ここは2張ぐらい張れる。それから、宿堂坊山手前鞍部、ここはかなり張れると思う。そして、ヤジの水場である。その他の地点でも、水さえあれば張れる所はかなりある。

23日

テント場出発6時50分。きょう中に桐生に帰ることをめざして、ピッチを上げる。三俣山の手前で少し道からそれたが、すぐ道にもどり、8時10分に三俣山到着。ここからはズッと平らな尾根が続くので、ピッチはどんどん上がる。道は昨日のコースよりも見分けにくい、プレートがしっかりしているので迷うようなことはない。シゲト山から方向が急が変わり、次のピークでまた方向が急に変わるから注意を要する。このピークから黒檜岳を過ぎて大平山分岐までは、高い木立に囲まれた快適な道である。黒檜手前10分の地点に雨量観測の機器がある。黒檜山から5分頃の西側に水場がある。下りが3分とのことである。大平山分岐からは、背高の小さな笹

の道であり、見晴しがよくきく。道も、何本も表われてくるが、社山まで行くのだったら、一番尾根に近い道を歩くのが無難である。社山には、1時25分に着く。ここで昼食をとり、社山出発2時。バカ尾根を途中1回の小休で下り、間藤駅到着5時5分。きょうのコースは平らな所ばかりで、水さへあれば、T.Sにことかくことはない。景色も、日光側と足尾側を共に見渡せるのでまことに良い。

今回の合宿は、雪が思ったより少なかった事と、好天に恵まれたという事で、予定より一日早く全コースを歩くことができた。

## 日光白根山

10月31日～11月1日 鎌田 山口(昌)

10月31日

桐生 東武日光(8:45) 湯元(10:20) 前白根(14:00) (14:45) 避難小屋

11月1日

避難小屋(9:30) (10:00) 白根山(10:25) 避難小屋(10:45) (1:00) 五色沼(11:10) 金精道路(13:10) (13:50) 湯元(14:15) 日光 桐生

10月31日 ①→②

湯元に着いてみると、雪が降っているので驚く。新雪が少し積った白根沢沿いの道を登る。外山方面の尾根状の道を登り外山手前の鞍部に出ています。登山靴が見えなくなるくらいの雪の中を、風に吹かれて震えながら登る。前白根山頂では、寒さと風が強く前に向いていられない。早々に小屋へ向う。小屋は風の静な所にあるが、氷づけになったようで、冷える。

11月1日 ①

2人とも、寒くてなかなかシュラフから出ようとしなない。夕べ寝る間に、出しっぱなしにしておいたベーコンとマーガリンが、ネズミに持っていかれたようで頭にくる。そういえば、寝ている時ガタガタやっていたようだったが、寒いと言って、放っといたのが悪かった。そんなことをしていると、外で登山者の声がしたので、大急ぎで白根山にピストンに行く。帰りは五色沼沿いに歩いて、五色山で少々休んで、金精山へと歩く。湯元への分岐を過ぎて、金精山との最低鞍部から右へ、金精道路へ出るらしい道があったので、そこを下山する。雪とササに足を取られてころびながら、湯元へと向った。

## 錫ヶ岳～笠ヶ岳～三ヶ峰

5月30日～6月2日 海老原 海老沼 堀江

### 5月30日

桐生 ⅢⅢ 日光 ⅡⅡ 葛蒲ヶ浜(8:45) - (9:50) 千手ヶ浜(10:00) - (10:25) 西ノ湖前(11:00) - (11:55) 赤岩滝分岐(12:05) - (13:05) 飯場(13:25) - (14:37) 稜線(14:45) - (15:05) 三林班沢頭 

### 5月31日

 (5:50) - (7:45) 錫ヶ岳(8:00) - (9:20) 笠ヶ岳(9:55) - (11:37) 三ヶ峰東鞍部(12:50) - (14:00) 三ヶ峰 

### 6月1日 沈殿

### 6月2日

 (6:20) - (7:00) 峰山(7:05) - 1645m三角点(8:35) - (9:10) 1229m標高点(9:20) - 奈良雨量観測所(9:40) - (11:25) 切通しバス停(11:47) ⅡⅡ (12:40) 沼田 ⅢⅢ 桐生

### 5月30日 ○→◎→○→◎→○

桐生を始発で出発する。日光から湯元行きのバスに乗り、葛蒲ヶ浜で降りる。湖岸沿いに細道を歩くと、やがて千手ヶ浜に通じるしっかりした道に出た。千手ヶ浜を過ぎ大学村を右に見送り西ノ湖への分岐でひと休み。西ノ湖へは行かずに、林道を北に少し歩き、そこより赤岩滝方面への柳沢林道にはいる。道の両脇にぼつんぼつんつつじがきれいである。林道は、赤岩滝への沢を大きく曲り返して西へのびる支流の沢沿いに続く。この赤岩滝への分岐から20分程すると、道の右側にトタン張の飯場が2軒建っている。そこを越しさらに15分程行くと大きな飯場に出る。近くで材木の切りおろしをしている音が聞こえる。ここでわか雨にあう。20分程様子を見て、小やみになったところで出発する。飯場より、ほぼ西に伐採された尾根に道がある。尾根といっても、このあたりはなだらかな広い斜面である。しばらく行くと道は消えてしまった。稜線へ出る急登の前である。稜線へは、伐採された倒木地帯を南西に向って見当をつけながら進む。切りおろしのワイヤー線に沿って行くと、すぐに稜線に出た。三林班沢ノ頭より南に10分の地点である。時間、天候を考えて、三林班沢ノ頭にテントを張る。3人用ビバークテント1張を張るのがやっとである。雪は稜線上の所々に少し残っている程度である。

### 5月31日 ○→①

三林班沢ノ頭より錫ヶ岳は、稜線上の道を約2時間。錫が近くなるにつれて、残雪がやや多くなってきたが、問題なく進める。

錫ヶ岳からは、いよいよ未知の領域である。西北西にのびる稜線は、くさった雪が30～50

cm程残っている。錫ヶ岳の西峰までは5月上旬に調査済みなので楽に行けた。ずっと雪の上である。そこより西に稜線は笠ヶ岳へと向かう。雪はしまっているのので滑るようにして下る。最初の予想では道の無いヤブの稜線だと思っていたが、雪の消えている所は、営林局によるものらしい幅1m程の刈りはらいがしてあり、まだ完全な道とは言えないが、稜線上の木は切り倒されていて、予想外であった。所々営林局の、赤いプラスチックのクイもささっている。これは行程中最後まで見うけられたので、これをたよりにして行けばまちがいない。

笠ヶ岳の山頂近くの大きな岩の横を通り、小さな窪地から上がると三角点である。錫ヶ岳が木枝越しに見えるだけで、あとは何も見えない木の中である。山頂より南にしばらく進み、やがて西に折れる。最初は木の中だが、そのうち、北側斜面が枯れ木地帯となって下が良く見えるようになる。最低鞍部は近い。錫ヶ岳からの稜線上は、はっきりとした水場は一ヶ所もないので、この三ヶ峰東約1kmの鞍部で水場を調べた。地図上、及び実際の状況から考えて、北側よりも南側の滝ノ沢側におりた方が、水を得やすいだろうとのことで、ポリタンを持って沢を下る。方向は南南東である。初めは木の中で、それからずっとササの急斜面を沢筋らしきものに沿って下ると水が、地面からしみ出しているような場所に出、そこからさらに少し下ると、右手からの水流が合流し、くむのに十分な地点に出る。下り約10分である。登りは、傾斜がきついため30分を要した。水場としては往復40分は条件が悪い。水を汲み終えてあがって来た時に気がついたのだが、稜線からこの水場へのおり口あたりの木に、連続的に黄色のペンキが塗られていた。鞍部の最も低い地点から西側に50m程奇った地点である。

再び稜線に戻った時、100mくらい西の稜線の所でシカを1頭目撃する。小柄な感じのシカで、すぐに逃げて行ってしまった。

三ヶ峰までは1時間足らずで着く。山頂はピークが2つに分かれていて、西側のピークのササの中に三角点がある。2つのピークの間の中鞍部の雪の上にテントを張る。テントサイトからは南側は木ばかりで何も見えないが、北側は笠ヶ岳からの尾根や、谷を隔てた向この側の山々が見渡せる。テントを張ったあと、峰山へ続く尾根を確認する。三角点から南側斜面は、最初広い尾根が続き木の中で方向が定まらないが、約10分も下ってみれば、南南西に峰山が見えてくる。

6月1日 ○→◎

昨夜より雨が降り出し、朝になっても強い風を混じえた雨模様だった。一日中雨は降ったりやんだり、風と共に、深いガスがあたりを包んだきりなので行動をあきらめ沈殿とする。

6月2日 ◎→①

出発時、上空をかなりの速さで雲が飛んで行くが、幸いにもガスはかかっている。峰山からさらに南西に奈良部落に続く稜線は、これまでと同様木を切り倒した所を歩けば良い。また峰山から1645mの三角点までの稜線はひざぐらいのササが続き、坪川を隔てた南側の皇海山を中心とした山々の絶好の展望台となる。三角点附近で再び1頭のシカが現われ、南東へ逃げて行くのをずっとながめていられた。まだ訪れる人も少ない裏尾の秘境的ムードに十分ひたれた。

三角点に至るまでの間に数ヶ所テントサイト適地がある。但し水場は不明である。三角点からは、1229m標高点に至る尾根上に道が続いている。このあたりは付近の部落から登る人もいるらしく、はっきりとした道になっており、もうだいぶ葉がひらいてしまったが、わらびをとったあとがある。

標高点で道は不明となり、稜線上を西に進んでから適当に方向を定めて斜面をおりると、奈良部落に通じる細道に出た。

奈良部落は家が4～5軒程度で、林道に出るとすぐに奈良雨量測候所の小さな建物があつた。林道を1時間10分程歩くと尾瀬方面からの国道120号線に出、そこに「切通し」バス停がある。あとは沼田へ行くバスを待つばかりである。

## 袈裟丸連峰

5月31日～6月1日 太田 井上

5月31日

桐生(8:49)→(9:55)沢入→双輪塔方面分岐(10:45)→山道入口(11:12)→(12:05)寝釈迦(12:40)→(13:18)→避難小屋→(13:25)賽ノ河原(13:50)→(14:32)小丸(14:45)→袈裟丸避難小屋(14:55)

6月1日

小屋(5:35)→前袈裟(6:23)→後袈裟(6:50)→坊主(7:18)→(20分位迷う)→奥袈裟(不明)→1958P.(9:00)→小法師屋根分岐(10:20)→沢(10:40)→(12:20)昼メシ(12:35)→1678P.(13:00)→分岐(13:15)→(14:00)林道(14:10)→袈裟丸橋(14:55)もちがせ橋(15:48)→林道終点(16:05)→(16:20)原向(17:14)→(18:30)桐生

5月31日 ①

背中が重いわけでもないのに太田氏ばてぎみ。まだ初めの沢沿いの道だというのに。ペースをおとして進む。40～50分も歩くと、目の前がちょっとひらける。ここの左手が寝釈迦である。つき出た岩にお釈迦様がほつてある。寝釈迦から先も沢沿いの道である。沢から離れるとすぐ避難小屋がある。トタン張り。7～8人寝られる。内は半分がベッドで、半分が土間。水も最後の沢で間に合う。道はここから左へ左へと進む。林の中から飛び出ると賽ノ河原がきれいである。ここからの袈裟丸連峰が美しい。目の前のピークの手前で二子からの分岐と合う。小丸まではほんのちょっと。小丸からは北のながめがすばらしい。庚申がサイクロイドをえがき、鋸がギザギ

ザをえがく。我々があした下りる小法師尾根がでっかい。小丸を下った鞍部の左側に袈裟丸避難小屋がある。水場は、南に下った沢である。我々が行った時は2人分の水がやっとであった。

6月1日 ◎

霧が深く、雨もまじっているので出発をどうしたものか迷った。前袈裟がもうちょっとだからと言う事が出る。視界5m。でもはっきりした道であるから頂上まではいける。前袈裟の山頂でどうも先へは行きたくなかったけれど、どうも井上の手前どうしようかと……。行きましようという声につられて前へ前進。小法師尾根の分岐は指導標があったから、まあいいだろうと、これから先1回も休まず、又休む気にもならず。後袈裟、坊主と越える。下をみたまま、その外みたくも何もみえず。これが道をまちがう源であった。奥袈裟への芝工大の指導標の前で、右へ行ってしまった。初めいいチョウシであったが、急にガクンと下へおちている。磁石を出すと東へ向かっている。あわてて後もどり。芝工大の指導標の前で。いい所にある。奥袈裟はわからず。小法師尾根分岐の手前のピークを法師岳とまちがえて、その鞍部からおりようとする。どうも急である。コリヤーおりられない。尾根がみつからない。もどるか、いくか。もどるにしてもヤナもんだ。まあいくか。最悪でも六林班からおりられる。そうしよう。決まって前のピークを越えると、小法師尾根の指導標。いちもくさんでかけおりする。又このはずみが悪く出る。尾根をはずれていると思うが、前の木には指導標がある。ままよと進むと沢におこちた。直登開始。それからは、尾根上をヤブをこぐ。1660P.もヤブである。これと1678Pとの鞍部で道を見つける。地図通り腹を巻いている。しかし、ちょっと行くと道はブツつり。またまた直登。しかし、黒雲は袈裟丸連峰にあるだけで、ここまでおいかけてこないから安心であった。先がみとおせる。1678Pまではすばらしく美しい林である。スワーと空に伸びる木々は、おとぎの森を想わせる。1678P.をすぎると、餅ヶ瀬川沿いに林道が見える。林道がこんなに奥まで伸びているとは知らなかった。黄色ペンキがそこまで導く。ここから足尾独特の長い林道歩きがはじまる。ここではもう空は青くはれあがってはいるが……。

## 袈裟丸山荘～庚申山荘

9月12日～15日 海老沼 児玉(医進)

12日 ◎→①

桐生(14:52)→(16:20)原向駅

13日 ◎→①

原向駅(4:15)→(4:55)県境(5:05)→(7:06)1160P(7:20)  
→(11:10)二子山(11:20)→賽の河原分岐(12:10)→(12:25)小丸手

前P(13:30)-(14:00)小丸山(14:15)-(14:25)袈裟丸小屋

14日 ○→◎→○

袈裟丸小屋(9:05)-(10:00)前袈裟(10:05)-(10:35)後袈裟(11:05)坊主岳(11:15)-(12:50)小法師尾根分岐(13:05)-(13:55)1869P手前コル(14:00)-(14:35)六林班峠(14:40)-庚申山荘(17:30)

15日 ◎→①

(9:35)岩場一周(11:35)庚申荘(11:45)-(12:45)林道-(13:35)銀山平-(14:50)原向駅(15:26) ~~原向~~(17:01)桐生

9月12日

この日は駅泊り。原向駅は無人駅であるが、待合室には、畳が1帖あり、そこに2人寝る。

9月13日

国道を県境まで歩き、そこから登り始める。最初の登り20分は急登であるが、それからはだらだらの登りがつづく。県境に沿って2mぐらいの幅で伐採してあるので、楽に歩ける。二子山の東方の平らな所はすっかり伐採してあり、オミナエシヤリンドウ等の花がたくさん咲いている。沢の水もかなり上まで流れている。二子山をすぎると、袈裟丸から鋸山へと続く尾根が見えてくる。賽の河原分岐を過ぎてからのピークで約1時間昼寝をする。ここからは、赤城が全望でき、袈裟丸も目の前に見ることができる。袈裟丸の小屋に着いたのは14時25分。はずかしいほどのチンタラワンデルグである。小屋はトタン造りで、土間であり、15人ぐらい入れる。水場は小屋から南1分ぐらいの所だが、水量はごくわずかであった。

9月14日

4時頃起きると、雨であった。朝食をとり、雨が止むのを待ったが降り止まず、9時5分に雨の中を出発。前袈裟の登りは急だが、一気に登る。雨は降ったり止んだりの状態になったが、視界は悪く休む気にもならずピッチを上げていく。袈裟丸の尾根から東側のガレ場を見下すと、全んど垂直に落ちていて、ガスのために底は見え、恐ろしいような変な気分になる。後袈裟のプレートは見つかったが、奥袈裟は知らぬまに過ぎてしまった。奥袈裟は道から少しはずれているらしい。小法師尾根分岐あたりから尾根が広くなり、道もはっきりとはついていないので迷いやすくなる。法師岳を過ぎると、笹が出てくるので歩きづらくなる。六林班峠から鋸山への道と、庚申山荘への道はまぎらわしいが、1分位歩いて庚申山と書いたプレートが見つければ、それが山荘への道である。六林班から直接銀山平の方へ下る道は見つからなかった。六林班から庚申山荘への道は、途中で沢を何回か渡るが、その附近がガレている場所が何回もある。道が分かれている場所は、山荘に行くには左側の道をとる。山荘についたのは5時30分。この日山荘に泊ったのは我々だけであった。

9月15日

朝起きると、一面の雲海で、はるかかなたの雲の上に、筑波山が形のよい乳房型を見せていた。そのまま下山するのはもったいないので、庚申山の岩場を一周する。このコースは、鎖場や、絶壁をはしごを使って渡る所などがたくさんあり、変化に富んでいるので、なかなかおもしろい。紅葉の時にいくと、すばらしいと思われる。一周して山荘にもどり11時45分に山荘を出る。原向の駅に着いたのは14時50分。

## 根本山：周辺

1月15日 尾高他一名

群大(6:39)→北沢(7:20)→(8:15)登山口(8:40)→(10:20)野峰(10:50)→丸岩岳(12:05)→熊鷹山(12:55)→十二山の分岐(13:15)→(13:55)根本山(14:10)→林道(14:50)→(16:50)落合

前の晩に思い立って同じ下宿のKと出かけることにする。すこし早めに下宿を出、部室に山行届を出して、学校前からバスへ。2丁目からは我々2人となり、運転手と話しているうちに終点北沢に着く。1時間ほど林道を歩くと、野峰登山口の標識がある。材木を運び出す木道を行くと道標があるが、そのまま進むと丸岩岳との中間に出てしまうようなので、地図の道を選んだ。ところがまもなく道がなくなってしまった。やまをえず西側の尾根へ上がった。急に視野が開け、三境山や、連なる山が目の前に見える。どこにもあるような、しかし美しいながめだ。尾根をつきあげ、山頂へ出ると遠く袈裟丸が見える。思わぬヤブコギで時間がかかってしまった。Kのぼやくこと……。このあたり一面20cm程の残雪である。丸岩までは道がはっきりせず、時々見失なう。夏はヤブに悩まされるだろう。丸岩のくだけから雪が30~70cmとなりスパッツをつける。右も左も山また山、日本は山国だネエ……。熊鷹山手前から林道へ降りる道があった。(但し道悪し)このあたりから平坦なはっきりした道が続く。が、雪に足をとられる。十二山-根本山の鳥居のそばに3~4人収容可能の小屋がある。道はトラバースしながら根本山へ。GWVのプレートがあったが、本根本山と書いてあるらしい(よごれている)。ここから一気に林道へと下り、氷った林道を急ぐ。北沢でバスがないので落合まで歩くが、10分差で乗りおくれたしまった。

## O.B. 寄稿

草 場 彰

G W V 現役諸君、O B 諸氏お元気ですか。小生、今の所横浜のはずれて呼吸しております。学生の時ある理由で会社に就職しようと決め、昭和45年4月よりサラリーマンとなった訳ですが、覚悟はしていたものの学生の頃の多少は気ままな生活から比較すれば、息のつまりそうな会社生活です。今ごろこんな事をいうと「イイ年をして何を言ってやがる」というO B 氏らの声が聞こえてくる様です。

会社では全く没個性的、非人間的な生活ですが、寮には我々G . W . V . と部誌の交換をやっている静大のW . V . 出身者と会社の出岳部に入っている者がいて、休みの前になると道具の自慢や知識の交換等でにぎやかです。

学生時代に行った地域がそれぞれ異っているので、俺は上信越辺を、静大は南アを、山岳部は東北の山々をという分坦です。でも、みな自分の計画を立てるので、3人がそろって出かけた事はありません。

会社に入ってからなかなか山へも出かけられませんが、いろいろと計画を立てています。つまらない事があった時など、いろいろ計画を立てたり山の本など読むという所ですかネ。こんな事ではダメだと思っても、少しも仕事の勉強などする気にはなれません。

45年4月以後12月迄に行った山は次の様なものです。

- |             |                |
|-------------|----------------|
| ① 5月1～4日    | 鳥海山(O B 山行)    |
| ② 5月24日     | 尾瀬公開ワンデルング     |
| ③ 7月18～19日  | 日光(太郎 男体山)     |
| ④ 8月12～14日  | 南ア(鳳凰三山)       |
| ⑤ 8月29～30日  | 丹沢(水無本谷～主稜)    |
| ⑥ 9月12～14日  | 南ア(白峰三山)       |
| ⑦ 10月10～12日 | 足尾(秋合宿兼O B 山行) |
| ⑧ 11月1～3日   | 南ア(甲斐駒)        |
| ⑨ 12月20日    | 上州武尊(山頂まで行けず)  |

③④⑥⑧ 単 独

天気は良いものもあり悪しきもありでしたが、8月の南アが台風で途中下山したため、南アの主稜計画はあと2年位かかりそうです。今年(昭和46年)は南アと妙高を主としてやりたいと思っています。又、春には四阿山・守門・浅草岳のスキーを計画しています。冬のうちに丹沢と伊豆の山も歩いてみたいのですが、計画倒れになりそうです。

内心は山行の長期計画だけでなく、仕事に対する長期計画も立てねばならぬと思いつつ、ダラダラと遅れてしまうきょうこのごろです。そして、今年位は我が人生感も決めねばならないだら

うと思っていますが、これもどうなるやらわかりません。人生感は変えられるが、女房は変えにくいなどとも言えね。いやどちらか決まらないから変えようがないかな。

以上、45年の極で簡単でいてだらだらしたしまらない報告と、46年の抱負を記しました。これで自分にノルマをつけてガンバリたいと思います。

0日諸氏も、又現役諸君もゴム袋、いや胃袋に気をつけてガンバって下さい。

## これから山に登ろうとする人へ

松田 衛 次

山を好きになり自分から進んで山行を楽しむようになったのは並の人より遅かった。しかし学部3年、4年となるに従って増す増す山が好きになり卒業するときは、たとえ会社を休んでも山に行こうと考えていた。

いざ入社してみると状況はきびしかった。有休を取るには半年の勤務期間終了後でないととれないことになっていたし、試用期間中に休日を取るのも気がひけることだった。小生のように技術的、精神的に中途半端な人間には山行持続は不可能だと思った。一度こんなことがあった。週5日制の当社においても入社当時は変化した環境に慣れることで山行の計画など立てられなかった。そして忙がしい中を奥秩父縦走を計画し、食料の買い出しも終了し、今日1日勤務すれば夜行で出発する予定だった。しかしその日の午後急ぎの仕事ができてしまい残業をしペーパー山行で終わってしまったことがあった。

話しは変わるがG、W、Vにおける特徴ある行動は、やや目的が明確化している夏合宿であると思う。これに参加しない者はワンゲルなど口にしない方が良い。この合宿こそワンダーフォーゲルとしてはじない活動が包まれている。10～15日間の時間と労力を費やして山に行くとこ始めて色々な自然を見ることができる。それも1回だけでなく2、3、4年と続けて行くことによってそれぞれ違った見地から自然を幅広く観察できるようになるのではないかと思う。

こういった時間と労力を費やす山行は、まず会社に入ってからでは不可能と言える。従って学生中はできるかぎり長期にわたる山行をしておいた方が得であると考え。もうひとつやっておくべきことは、広く技術を修得すること。例えば身近なものでは、スキー、ワカンさらにアイゼン、ピッケル、ロッククライミングなども将来本当に山行を持続しようとするならやっておいた方がよいと考える。

飛躍しただけのことをマスターして行動をしていたならば今ごろは、どこかの海外遠征隊に入隊して、仕事よりも山々ということになったのではないかと想像する。

立山 松田他3名

6月28日 ○→◎

富山 千寿原 美女平 室堂(11:10) — 一の越 — 雄山 — 室堂(15:00)

富山

晴天にめぐまれたこの日、美女平と弥陀ヶ原の間、車窓からはイワカガミ、水芭蕉、ニッコウキスゲ、コバイケイソウ、チングルマが見えた。弥陀ヶ原と室堂の中頃になると遠く雪のかぶった弥陀ヶ原に所々散在する池塘の群が美しい。西方には遠く雲にかすんで白山が見えた。バスの終点に近くなる頃剣の岩肌が近づき立山、浄土山も真近だ。室堂附近では、スキーキチが10人くらいやっていた。バスは雪の間を通り抜け終点室堂に到着した。室堂と一の越間は、まだ雪がいっぱいだった。一の越に立った。

一の越 真近に見ゆる 槍ヶ岳

槍を見て ひとりたたずむ 笠ヶ岳

と口ずさんだ。雄山頂上まで一気に25分。頂で御酒を受け、鼓の声に聞き入った。この時ばかりは厳かに聞こえた。眼下には黒四ダム、黒部湖、赤沢岳の展望が絶好。もう間もなく黒四ダム～大観峰までケーブルが運行する。剣は別山の影で菱を現わさない。帰りがけつがいの雷鳥がひょっこり現われ私達を喜ばせてくれた。ラッキーな山行だった。しかし会社に勤めてからの日曜一日だけの山行は、あまりにもあっさりとしすぎ、物足りなさを感じた。

なお天気について付記すると、6月20日夏山開きをしてからは、ずっと曇ったり雨でひどかったと山頂の人達は言っていた。小生が富山県高岡市に5月25日から7月30日までの間に、立山連峰が良く見えたという日は、3、4日あったに過ぎない。

## 秋 田 駒 ヶ 岳

8月2日～6日 松田他2名

8月2日～3日 ◎

足利 盛岡 田沢湖 駒ヶ岳登山口(12:08) — 頂上小屋(16:30) —

8月4日 ○→◎

(6:00) — 女岳 — 男岳 — 横岳 — 頂上小屋(19:30) — 登山口(12:05) 田沢湖 盛岡 宮古

8月5日 ○→○

宮古駅前(8:20) 浄土ヶ浜(8:40) ~ 水泳(12:00) 宮古 盛岡 — 岩手公園

8月6日 ◎

岩手公園—盛岡(09:30) 帰省

現在噴火を続けている駒ヶ岳。我々が行ったのは噴火をする1カ月くらい前だった。目的は、今だ見たことのないコマクサの群落を見ることと、駒ヶ岳から岩手山まで縦走することだった。しかし行ってみると天候にめぐまれず後者の計画は断念しなければならなかった。コマクサの群落は、横岳頂上から20分くらい下がった所にあった。雨にうたれ、小きざみに花をゆすっているコマクサが印象的。

以後変更計画に従って行動をした。登った道をまた下り、盛岡そして宮古へと向かった。宮古では、駅前に待合所があったのでここを宿とした。すっかり晴れわたった翌朝浄土ヶ浜に向かった。半日泳ぎ、また盛岡にもどる。盛岡では、ちょうどお祭りにでくわし、東北の代表的なおどりをほとんど見ることができ、幸運だった。特に小鹿おどりの鼓が印象的。この日の夕方、いやみにも岩手公園から岩手山がきれいに見えたのがしゃくである。

## 巻 機 山

3月21日～24日 齋藤 小沢

3月21日 ◎

新前橋(8:34) 上越線(10:10) 六日町(10:50) 上越線(11:20) 沢口(11:22) — (14:30) 泉屋 Y. H.

新前橋駅で両毛線から上越線に乗り換える人はものすごく、客の1人か2人ぐらいは線路に落ちるのではないかと思われた。それらの人に混じって私たちはやっとのことで車内に身体をねじ込んだ。水上では晴、土樽では雪、塩沢では曇、六日町は雪といった天気です少し心配であったがバスが沢口へ着くころは雪も止み心も軽く清水へ向かう。泉屋へ落ち着いた後、明日の為に泉屋の裏手で少しスキーをする。

3月22日 ◎

泉屋(7:30) — (13:40) 前巻機山山頂(14:00) — (16:15) 泉屋

空は曇っている。昨夜いくらか雪も降ったようである。去年は雪の降る中をスキーで登って苦戦しているので、今年は輪カンを用意し初めより着用する。きょうは大分多くの人々が登っており雪がよく踏んであるので歩きやすい。そのことを見こして出発を遅らせたのであるが、山やとスキーヤと合せて5パーティくらい前を登っている。今年の雪はまだ全然しまっていない。踏み跡をはずすとモモまで雪にもぐってしまう。途中でスキーをはいて登っている人を追い抜いたが、かなり苦戦している。檜穴の段附近で私達が先頭になってしまい、ラッセルに苦しむ。後続の2

人が追いついて来て4人で交代にラッセルする。上部はかなりクラストしておりワカンのくいをきかせて登る。前巻機山でしばし休んだ後下りにかかったが、上部はクラストしておりこわごわ下った。恐怖感から体重がスキーに乗り遅れ何度かころんだ。クラストしたところを過ぎると今後はヒザまでもぐる雪であるが、雪が軽いので気持よく曲がる。

3月23日 ◎時々⊗

泉屋(9:20) - (10:28) 沢口(10:35) - (11:10) 六日町(12:40) - (12:55) 上越MSスキー場

今日はゆっくり泉屋を出る。小雪の中を気持よく下る。今年は雪が多く沢口までスキーをはいたまま下れた。まだ時間も早く明日も休みをとってあるので、今日明日と六日町のスキー場で少し遊んで行くことにする。

3月24日 ①

MSスキー場(12:55) - (13:57) 六日町(14:02) - (15:25) 湯沢(15:30) - (16:31) 新前橋

スキー場からは六日町ユースの前を通り駅まで下る。

## 吾妻耶山

5月24日 斎藤

伊勢崎(6:53) - (7:10) 新前橋(7:12) - (8:05) 上牧(8:5) - (9:35) 大峯沼(10:05) - (10:45) 大峯山(10:45) - (11:35) 吾妻耶山(12:15) - (12:45) 仏岩(13:05) - (15:35) 水上(16:20) - (16:30) 大宮

下駄ばきで歩ける程度の山ということで捜したところ吾妻耶山が浮かび上がった。上牧駅下車したハイカーは割合に多いが、水上周辺で見る登山者と違いソフトなムードの人がほとんどだ。上牧駅から少し行くと道路の左側に大峯山の指路標がある。それに従って橋を渡り、橋の向こう側で左へ折れて河沿に少し行くと道は坂になり河から離れる。少し部落の中を行き、畑中の道を進んで小和知の部落に入る。部落の駄菓子屋でアイスクリームを2本買い求める。山の畑を歩くと間もなく山道らしくなり、ピッチが下がる。山道らしくなればもうすぐ大峯沼である。沼の手前は落葉松になっており、新緑や紅葉の季節は美しそうである。沼のホトリにはモリアオガエルが盛んに鳴いている。湖畔を一周した後、大峯山へ向かう。大峯山へは45分程の登りだ。山頂へは湯宿側から車道が通じていて、数こそ少ないがドライバーの姿も見える。吾妻耶山へは車道の終点を横ぎり真直ぐに進む。吾妻山頂は余り見通しがよくないが、仏岩方面へ少し

行ったところに谷川連峰がよく見える所がある。そこでしばし休憩をとり、おフクロの心づくしの弁当を食べる。ここから先は千葉大の女子学生2人と後になり先になりして下る。景色の方の記憶はさだかではないが、学生さんの方はちょっとしたカワイコちゃんでした。

## 大 真 名 子 山

6月6～7日 ① 斎藤

大宮(19:39)→(20:58)宇都宮(21:36)→(22:19)日光(3:45)→(4:45)裏見の滝入口(4:45)→(5:20)宮林署小屋(5:35)→(7:00)薬研堀(7:05)→(9:00)志津小屋(9:45)→(11:30)大真名子山(11:55)→(12:25)鷹の巣(12:35)→(13:15)小真名子山(13:20)→(13:45)富士見峠(13:45)→(14:30)女峰・富士見峠分岐(14:30)→(15:15)裏見の滝・寂光の滝分岐(15:15)→(16:00)寂光の滝(16:05)→(16:55)田母沢バス停→(17:05)日光(17:20)→(18:55)大宮

宇都宮へは20:58に着き、日光行きの最終列車まで30分以上間があったので駅前へ出てみた。大谷川の峠には屋台がズラリと並んでいる。その中の1つに入り、ラーメンを食う。1人でかうラーメンの味気ないこと。最終電車内ですることもなく車内を見わたす。向かい側に座った2人の超ミニの女の子は極端に細い脚と極端に太い脚の持ち主で、日光駅へ着くまで興味深くながめていた。

国鉄日光駅にはルンペン風の先客が1人居ただけであった。賑やかな東武日光の駅前を歩いて早朝の街中を約1時間歩くと裏見の滝入口に着く。そこから1km程行くと目指す大真名子山が紫色に映えている。右手に沈殿池を見てしばらく行くと道が大きく右にカーブしているところで宮林署の小屋にあたる。その少し下から沢を渡って、水道の導水管の上に出る。少し左へ戻ると道標がありそれに従って登る。わずかで植林して間もない台地へ出るが見晴しは悪い。薬研堀には少し水があり、オタマジャクシ、ポーフラが生息している。幾度か林道を横切って進むと男体山を真直ぐに望むところになる。ここで道は林道からはずれる。ケルンその他に注意が必要だ。私も道を見失ない10分程ヤブをこがざるを得なくなったが、ヤブコギ中20m前方から急にカモシカが飛び出してびっくりさせられた。志津小屋には井戸があり水を一杯たたえているが、流れていないのでそのまま飲むことはひかえた方がよさそうである。亦、この附近では急速に伐採が進められており近年中には景観が大きく変わってしまうだろう。志津から大真名子山の登山道のまわりも木が切られていて余りいい気分でない。睡眠不足・トレーニング不足・体調不調などが

重なり、アゴを出してしまった。半分ぐらい登ったところでどうにもがまんならず20分間昼寝をしてしまった。鉄バシゴがいくつか現われると間もなく頂上だ。山頂には御嶽神社があり青銅の像も立っている。少しゆるい道を下った後、針葉樹の中のいくつきつい下りで鷹の巣とよばれる鞍部につく。大真名子の下りから小真名子山まではうっそうとした針葉樹の林の中の道を進む。心の底から休まった気分になる。小真名子山頂でも10分間昼寝をしでもまった。小真名子から富士見峠へはガレ場を一気に下る。ここから寂光の滝を経て田母沢へ出た。

## 浅 間 山

6月14日 〇→◎ 斎藤他1名

大宮(23:27) 直江津(3:32) 小諸(5:30) 二子(6:20) 車坂峠(6:25) - (7:05) トーミの頭(7:35) - (7:58) 黒斑山(8:15) - (8:55) 蛇骨岳(9:00) - (9:15) Jバンド(9:15) - (10:45) 浅間山頂(12:00) - (13:15) 峰の茶屋(14:13) 二子(14:45) 軽井沢(15:14) 大宮(17:03) 大宮

直江津行鈍行列車に乗車。小諸では4時少し前から懐古園を散歩する。かなり静かであるが、幾組かのパーティーが目ざわりだ。車坂峠行きのバスは3台来、3台ともちょうど一杯になった。我々2人は峠までうつらうつらしていた。峠でバスを下りるとすぐに歩き始める。峠の付近はコイワカガミがいっぱい咲いている。時たまアズマシャクナゲの花が見られる。トーミの頭で朝食をとる。予定のコースタイムより2時間も早い。雨の降りがここで大分はげしくなったが雲は余り厚くはないようだ。黒斑・蛇骨を経て湯の平高原へ。ここには高校生らしい女子パーティーが大勢居て賑わっていた。それらには目もくれず我々は真直ぐに山頂を目ざす。山頂附近では照月湖の方まで望まれた。山頂附近の岩かげで風雨を避け、紅茶をわかして昼メシを食う。「〇〇山岳部」と書いた旗を先頭に2~30人が登って来る。フウフウ言って登って来る人々を上から見ながら飲む紅茶がこれ程うまいとは今まで思っていたこともなかった。下りは峰の茶屋へ出る。中軽井沢行きのバスが満員だったので次の小瀬温泉回りのバスに乗る。このバスでG.W.V.のO.B.である須藤君に会う。会社の慰安旅行とかで来ているところだった。

## 女峰山～大真名子山

6月21日 © 齋藤 小沢

大宮(19:39)→(20:58)宇都宮(21:36)→(22:19)日光(5:30)→(6:00)霧降高原(6:00)→(8:50)赤薙山頂(9:00)→(10:00)水場(10:5)→(10:45)女峰山(12:05)→(12:40)帝釈山(12:50)→(13:10)富士見峠(13:20)→(14:00)小真名子山(14:10)→(14:20)鷹の巣(14:30)→(15:10)大真名子山(15:40)→(16:30)志津(16:55)→(18:15)三本松(18:20)→(19:27)日光(20:00)→(20:39)宇都宮(20:42)→(21:00)小金井(21:04)→(22:02)大宮

先々遊に乗ったのと同じ電車で日光へ着く。既に小沢は来ていた。日光駅のベンチで寝る。かなり寒い。寒さで目が覚めると4時であった。霧降高原まではタクシーで約30分である。霧の中を歩く。未だキスゲは咲いていないがやがて花をつけるべく長い茎が何本ものびている。開花の頃お二人で歩くのにいいところだろう。モミジカラマツがきれいに咲いている。針葉樹林帯に入るところで猿が下を這っていた。遠くからそれを見て熊の子と間違えて一瞬ギョッとした。女峰山までの登りは思ったよりもきつい。女峰山頂で小沢の背担って来たビールで乾杯する。女峰から帝釈まではいくらもない。昨夜ね不足だった我々は山頂で何分か居眠りをしてしまった。帝釈山からは標高差300mを一気に下り富士見峠へ出る。先々遊通ったコースを逆に志津まで下る。志津からは林道を三本松まで出る。戦場が原はまだ桜の花が見られた。

このコースの中には女峰山の少し下と、志津とに水場がある。女峰山を赤薙山寄りに少し下ると、縦走路からほんの10m横に入るだけで小さな流れのあるところに出る。ここはテントを2張り位張れるスペースもある。志津には御存知のように小屋と井戸とがあります。

## 石筵牧場から安達太良山

7月5～6日 齋藤

7月5日

大宮(0:21)→(4:52)磐梯熱海(8:10)→(8:30)石筵牧場(8:30)→(9:25)チヨシの滝(9:45)→(10:8)猿岩(10:15)→(11:40)昼食(12:10)→(12:25)和尚山(12:35)→(13:05)水場(13:

05) - (13:35) 安達太良山 - (14:45) くろがね小屋 (泊)

7月6日

くろがね小屋 (11:30) - (12:25) 奥岳温泉 (12:45) - (13:40) 岳温泉  
(14:02) 二本松 (14:35) 二本松 (15:04) 大宮 (17:53) 大宮

台風2号が九州に接近しており、それに伴う湿舌が南岸の前線を刺激しており関東地方でも5日6日は雨天であった。大宮駅から最終の急行列車に乗る。列車の前の方が磐梯5号であり、後の方が松島となっている。後の方に乗ってしまい、途中で前に乗り換える。車内は満員であるが荒天の為登山者は少ない。郡山で会社の人2人にバッタリ会ってしまった。磐越西線の磐梯熱海で下車する。駅前から石筵牧場行きバスは出るが、そこには発車の時刻表もなければバスのストップの目印もない。駅員に8時発のバスがあることをきき、駅前散歩したりしながらバスの時間を待つ。バスは8時5分ごろやって来た。牧場までは約20分80円である。牧場で下車したのは私ともう1人単独行の人、2人の女性の4人3パーティーだけだった。牧場を横切って登山道に出る。この辺りから4人が一緒になって登る。単独行の人はたびたびこの辺には来ていて地理にくわしい。他は全員初めてであったので、道案内役を引き受けてくれた。銚子の滝は登山道から少し下ったところにある。滝の中央附近に岩があり、落下する水がその岩に当たってパッとちってあたかもトックリのような形になる。元の道まで登るのが一仕事であるが、滝の美しさの代償としては安いものである。少し行くと滝の上流で沢を渡る。ここから先が登りらしい登りになる。猿岩の近くからは踏み跡も割合に細くなる。雨は降っていないが霧と露とで胸から下はびしょりになってしまった。和尚山の少し下で3人は戻ることになり、そこで4人一緒に昼食をとる。和尚山の三角点は道から大分右へいったところにあるが、体力をできるだけ消耗しない方がよからうと考え、そちらへ行くのは止めた。ここの十字路を左へ行けば安達太良山だ。真直ぐに行く道が一番よく踏まれているが、先程、別れる時に聞いたところでは途中で道が消えてしまうとのことであった。ここから先はブッシュの中をくぐるようにして進む。頭の前からびしょりになってしまった。だらだらと尾根を上がったあとで安達太良山の登りになる。霧が深くなり15m位しか視界がきかない。山頂で少し休んだ後下りにかかる。今までと違って今度は全くのハゲ山となり、しかもガスがひどくて動きがとれない。しかたがないので、くろがね小屋から登ってくるくろがね小屋へ下るパーティーの後からついて行く。小屋までは40～50分の下りである。日曜の晩に小屋に泊る人はさすがに少なく私を入れて2人だけであった。

翌日晴れば鬼面山へ向かう予定であったが朝から雨だったので、小屋へ泊ったもう1人の人と一緒に馬車の通う道を岳温泉まで下った。日曜日は奥岳温泉までバスが入っているのだが、月曜なので奥岳二岳の間を55分もかけて歩かねばならなかった。

## 男 体 山

7月12日 ○ 齋藤

大宮(20:05)→宇都宮(21:32)→宇都宮(21:36)→日光(5:20)→三本松(6:10)→三本松(6:35)→(9:30)男体山西三角点(9:45)→(10:15)二荒山神社(10:22)→(10:25)男体山頂(11:35)→(13:00)二荒山神社(湖畔)(13:45)→(13:55)中禅寺バスターミナル(14:30)→(15:05)日光(15:17)→(16:52)大宮

社内の人事異動で課が変わり、歓迎会に招かれてアルコールが入ったので日光までよく眠った。東武の夜行列車のある日は東武日光駅から5時30分ごろに臨時バスが出る。このバスは全員座れるのでありがたい。

三本松で下車する。白根方面は霧がかかっている。三本松のバス停を真直ぐに北へ上り指導標に従う。広い畑を横切り林道を行くと小さな道標で登山道が示されている。少し登ると北八ツガ岳に見られるような針葉樹の林に入る。その所々に戦場が原の見下せる好展望台がある。道が尾根へ出ると間もなく三角点に出る。中禅寺湖の水は目にしみる程青く、その上をオモチャのような船が白い波を立てている。三角点からはだらだらとゆるい登りが続きやがてついたてのような大岩の下に出る。これを右からまけば二荒山神社があり山頂はもう2~3分のところだ。帰りはまっすぐ中禅寺湖へむかっておちる。この道はかなりのガレ道で余りいい道ではない。

## 飯 豊 連 峰

8月6日~10日 齋藤 小沢

8月6日 ○

小山(1:14)→山都(5:08)→山都(7:50)→川入(9:00)→川入(9:00)→(9:45)御沢小屋(10:00)→(11:00)中の十五里(11:20)→(13:15)地藏小屋(泊)

久喜で貨物列車の脱線事故がありダイヤは混乱していた。しかし、我々の乗る予定の列車は定時に入って来た。空席はなく通路にグランドシートを敷いて寝た。会津若松で新潟行きの鈍行に乗り換え、山都駅へ行く。飯豊山へ向かう登山者はおよそ30名であった。川入までバスは入っており、下車してすぐに歩き始める。時々強い雨がおそって来る。御沢小屋をすぎたところからきつい登りになる。このころから雨の降りは一層強くなり中の十五里からはひどい雨となった。

横峰小屋は満員であった。休みをとりたかったがスペースが無く、やむなく地藏小屋へ向かう。地藏小屋の手前は尾根道のはずなのに沢のように水が流れている。途中少しヤブコギをしたりして地藏小屋まで行く。飯豊の小屋は面白い。石を積んでコの字型に壁をつくり、その上に柱を渡して屋根のせただけの簡単なものである。小屋というよりもむしろ石室と言うべきものである。

8月7日 ①

地藏小屋(7:50) - (8:15) 三国小屋下の水場(8:45) - (8:50) 三国小屋(8:50) - (10:30) 切合小屋(11:20) - (11:45) 草覆塚(11:55) - (13:15) 飯豊神社(13:40) - (13:55) 飯豊本山(14:10) - (15:00) 御西小屋(幕営)

今朝は雨も上がり、霧の間から切合小屋も望まれる。我々はゆっくり小屋を出る。雨上りの朝の山は気持ちよい。三国小屋の少し下に水場がある。道から2~3分の下りで水場まで下りられる。ここでゆっくり昨日の分まで休む。切合小屋の手前はなだらかな草原状で気持ちよい。小屋のすぐ下に水場がある。小屋から近いためかそれ程きれいでない。草覆塚をすぎて少しゴロゴロした道を登ると神社はもうすぐだ。神社の裏手で休みをとっていると、他のパーティーの人がしゃもじを買って来た。スポン類を全く持ってこなかった我々も最速買い求めて今夜から使うことにする。丸いなだらかな山道はたいした登りもなく御西小屋まで続いている。目の前の大日岳が美しい。ここで小沢の背負ってきたゆであづき1Kgをあけて氷あづきを食べる。とても食べきれない。いやと言う程食べた後で見る山の景色はなんとも言えない。御西小屋は余りきれいではない。中は水が一杯だし、小屋のまわりはキジが一杯だ。

8月8日 ①

御西小屋(5:55) - (6:35) 大日岳(6:40) - (7:15) 御西小屋(7:45) - (9:30) 御手洗池(9:40) - (10:05) 烏帽子岳(10:40) - (11:20) カイラギ小屋(12:05) - (12:35) 北股岳~門内岳の最低鞍部(12:45) - (13:05) 門内岳(幕営)

小屋から大日岳まで空身で往復する。荷物がないとピッチは快調に上がる。この道は御西からピストンする人がほとんどで、交通量も多く大分ぬかっている。御西小屋を出たのは7時45分であった。なだらかなスロープが続き、相当歩いたようでも御西小屋がはっきり見える。しばらく歩くとどこかのワンゲルらしい一行がテントを撤収しているところに出合った。中に一目で新人とわかる者が2、3人いた。態度が余り素直なので、我々がワンダーフォーゲル部へ入部した当時を思い出し、少しの間足をとめてしまった。

更に行くと御手洗池に着く。昔、誰かがここでキジを打って手を洗ったのであろう。池の付近では見通が悪い。逆に外から見えにくくて好都合だったのかもしれない。池のちょっと先から見上げる烏帽子岳はかなりきつそうな感じであったが、思った程ではなく簡単に上に着いてしまった。ここで昼食をとる。

カイラギ小屋はトイレ付の立派な小屋である。水場はカイラギ沢の反対側を少し御西寄りに下ったところにある。沢が2筋流れており、どちらかというとも奥の方がきれいそうな気がする。ここで大休止した後、重い腰を上げて北股岳へ。北股岳には鳥居がある。ここでは休まずに門内岳へかなりのハイピッチで向かう。門内小屋は石室で中は割合にこざっぱりしていた。小屋から少し下ったところにテントを張る。水場は小屋の反対側へ少し下ったところの雪溪である。

8月9日 ①→②

門内小屋(6:35) - (6:50)扇の地紙(6:55) - (7:15)地神山(7:30) - (8:10)頼母木山(8:45) - (9:22)大石山(9:30) - (10:00)鉾立峰(10:45) - (11:25)杵差岳(12:40) - (13:20)一杯清水(13:30) - (14:15)大熊小屋(14:30) - (18:00)大石バス停(18:20) - (18:50)下関駅(19:07) 坂町(22:49) 高崎

霧の中を門内小屋から出発する。小屋から扇の地紙と呼ばれる飯豊温泉への分岐まではわずかである。ここにはチングルマの実がかなりある。地神山を過ぎた次のピークにも飯豊温泉へ下る道がある。扇の地紙から下る尾根よりも下る尾根の長さは短いようだ。ここから見る杵差山は遠く且つ高く見える。道はどんどん下る一方である。頼母木山、大石山の辺は笹がすごく茂っている。下りはともかく登りになると上からおおいかぶさる笹には閉口する。大石山からは胎内小屋へ通じる道がよく刈り払われている。杵差へ向かう道は相変わらずの笹道だ。鉾立峰の登りはかなりきつかったが、大石山からはいくらか時間をとらない。鉾立峰で昼寝をしたりしてのんびり過ごす。時々霧の合間に杵差小屋が望まれる。鉾立峰を下り、少し登ると石に銅板をはめこんだ碑が立っている。ここから2~3分間草原を歩けば杵差小屋である。小屋の付近では水場はわからなかった。小屋から幾本か道が出ているが、いずれもキジ場へ行く道のようにであった。小屋には鐘が設備されているが、ガスっても鐘を必要とする程広い草原とは思えない。小屋より少し登ると杵差岳で、石の小さな小さな祠が一つ立っている。ここへ来るまでは大熊小屋へもう1泊する予定だったが、2人で相談した結果、今日中に大石部落へ下り、夜行列車で帰ることになった。下りはいくらかピッチを上げて下る。きつい下りだ。大分膝もつかい、咽もかわいて来たところにおいしい清水が湧いている。一杯清水と名札がついていたが、我々は3杯も水を飲む。うまい。大熊小屋へはまだ下る。大分下って橋を渡ると道はほゞ平となり、平坦な道をしばらく行くと大熊小屋へ出る。小屋の周囲にはかなりのテントサイトもあり、小屋のすぐ近くを沢が流れている。小屋では15分の休憩で出発。橋を渡り、坂を登り、沢を渡って行けども行けども山道は続く。沢を横切って上り下りすること3時間余でやっと林道へ出る。この時つくづく飯豊の山の深さを思い知らされた。大石バス停で下駄にはき替えたところでバスが来る。バスは2つ3つ小さな温泉へ行って来たりしてのんびり越後下関の駅へ着く、下関からは昔なつかしい陸蒸気で城町まで出る。山の端近くにかかった三日月がとても印象的であった。

# 会津駒が岳

8月14～16日 斎藤

8月14日・8月15日 ○→◎

大宮(20:01) 黒川(22:55) 郡山(2:15) 黒川(5:27) 会津田島(5:45) (7:50) 滝沢橋登山口(7:50) - (9:20) 水場(標高1650m) (9:30) - (10:40) 池の平大池(10:45) - (11:00) 駒が岳(11:20) - (11:50) 中門岳(11:50) - (12:20) 駒が岳(12:25) - 駒の小屋(12:35) (13:21) 大津岐峠(13:25) - (14:05) 送電線下(14:10) - (15:30) 七入(泊)

郡山で仙台発会津田島行き「尾瀬フラワー号」を待つ。駅にはフラワー号に関する掲示は何もないので、改札口で駅員に尋ねた。駅員は「ああ、今日はフラワー号のある日でしたネ」と言って表示板を引っ張り出してかけてくれた。フラワー号というのは国鉄のエック用の列車のようでフリーの乗客は余り見られない。会津田島ではエック用の団体バスにフリーで乗る。檜枝岐まで一金440円也である。バスはノンストップで気持ちよい。駒が岳登山口には7時50分に着く。水場までは快調に進む。そこから先は睡眠不足と朝メシ抜きだったのとで大分バテた。道は主に尾根の南側につけられており、いいかげんバテたころ道は北側へ廻り駒が岳、駒の小屋が見える。樹林帯を抜けると小屋まではすぐだ。駒が岳から中門までは往復で約1時間を要する。駒が岳まで来て中門岳へ行かないのでは片手落ちになるので出かける。大分台風の影響が出て来て風が強い。今は渇水期なのか、池塘の数は思ったほど多くない。最初の予定では小屋で1泊する予定であったが、台風10号の影響が出そうなので、七入から御池へ下ることとする。風は強いが汗は全くかかず、快調に進む。時々湿地がでてくる尾根の道を進んで送電線の辺りまで来ると雨がいくらか落ち出し、尾瀬の方の雲行きがよくないので、七入へ下る。七入までの下りはそうとう下り、いいかげんいやになったところ下につく。今夜は七入山荘へ泊る。

8月16日 ◎時々

七入山荘(6:45) 黒川(7:00) 御池(7:05) - (7:35) 横田代(7:35) - (9:10) 温泉小屋(9:15) - (9:45) 見晴(10:00) - (11:30) 山の鼻(12:05) - (13:00) 鳩待峠(14:05) 黒川(15:50) 沼田(16:36) 黒川(17:10) 新前橋

昨夜山荘に泊った人の車に便乗させてもらって御池まで行く。今年は車が沼山峠まで上っているので三平を越えるのが最も楽であるが、裏燧林道はまだ歩いたことがないのでそこを歩き尾瀬でもう1泊しようかと考える。横田代をすぎるところ雨が降り出し、温泉小屋へ着くころまで降っていた。見晴では診療所へ顔を出すと、草場、清水の両君が来ていた。ここで下駄に履き替えて

山の鼻へ向かう。下駄バキの尾瀬も亦いいものだ。山の鼻でツエルトでも張ろうと考えたが、私が山の鼻へ着くのと同時に再びにわか雨が降り出したので、このまま帰ってしまうことにする。鳩待からはちょうど沼田行きのマイクロが出るところであった。

## 根子岳～四阿山

8月30日 ① 斎藤

大宮(0:13)直江(3:27)上田(6:35)菅平高原(7:45)  
- (9:50)根子岳(10:30) - (11:35)四阿山(12:00) - (14:35)  
菅平高原(15:00)上田(16:10)大宮(18:57)

大宮から11時27分発の直江津行に乗る予定であったが、満員であったので次の急行にする。急行はガラガラで1人で1ボックスを自由に使って寝る。

上田から菅平へ行くバスは6:30が最初だ。スキーシーズン中は4:30と5:30に臨時バスが出る。今はもちろん臨時ではないので6:30まで待つことになる。駅前の屋台でラーメンをすすり、駅前の噴水のそばでひと寝りする。菅平行きの登山者は私を含めて7人であった。バス停で10分程休憩し、一番後から歩き出したが、文部省の体育研究所を左に見るころにはトッパになってしまった。それ程急いだわけでもないのに。右手にユースホテルを見ても今夜はここに泊りたいなどと考えず歩いた。別荘やら山寮やらも減ってようやく坂道になる。道は相変わらずハイウェイ並のよい路だ。路傍には山萩、ヤマハハコ、マツムシ草 etc が咲き楽しい朝のブロードとなる。やがて路は林の中に入っている。その入口に高さ10cm程のキイチゴがあり、赤を実をいくつつけている。よくうれていそうな実を2、3つ歯んでみたが、とてもすっぱくて思わずはき出してしまった。少しの時間で樹林帯はぬけてしまう。もうすぐ山頂である。山頂には石の祠があり、ここで1回目の食事をとることにして、ザックのひもをとく。余り道がよかったので、ここまで下駄で来てしまったが、まだよい道が続くそうなので四阿山目ざして下る。鞍部のきれいな笹原を横切って四阿山へ向かう。根子岳～四阿山は約1時間の距離である。山頂から鳥居峠へ下る予定であったが、どこをどう間違えたか、菅平高原の牧場に出てしまい今朝歩き出したバス停へ戻った。

## 苗 場 山

9月27日 ○ 齋藤他1名

大宮(23:50) ~~上野~~(2:23) 越後湯沢(4:40) ~~上野~~(5:35) 被川(5:35)  
- (6:25) 和田小屋(6:45) - (7:25) 下の芝(7:25) - (7:35) 中の芝  
(8:10) - (8:40) 神楽が峰(8:45) - (9:05) 台上(12:05) (14:  
05) 和田小屋(14:25) - (15:00) 被川(15:30) ~~上野~~(16:20) 湯沢  
(17:50) ~~上野~~(20:23) 大宮

26日の午後4時半ごろ同僚のS氏と尾瀬へ行こうという話がまとまり出かける。長岡行の鈍行に一度乗り込んでみたが登山者・通勤客etcで混んで居たのでホームにまた下りてしまった。次の急行はガラ空きであった。列車が沼田へ着いてホームを歩き始めたのだが、余りに多くの人下車したのに驚ろき再び同じ車両に乗り込んでしまった。そんなわけで結局苗場山へ行くことになってしまった。湯沢駅で1.5時間程寝た後タクシーで被川まで行く。被川で日の出を見る。雨上がりの朝の日の出はまた格別だ。今までに数回通っている道だが、同僚の方のペースなので苦しい。ようやくのことで下の芝まで出、中の芝で休憩とする。この付近で休憩をとるのが常であるが、今日の景色はとくに美しい。しばしの間遊ぶ。仙の倉山の肩に皇海山も見え、日光白根・燧岳も見える。中の芝を過ぎれば神楽峰はもうすぐである。神楽が峰から見る鳥甲山は痛々しい感じする。雷清水で一息入れ最後のつめにかかる。何度登ってもこのつめはきつく感ずるが、それだけにまた台上へ出たときのよろこびは大きい。山頂では皇海山の写真を撮ったりしてちょうど3時間過ごす。12時05分に下りにかかり、被川まで順調に下る。被川発15時30分のバスに乗ると湯沢で1.5時間も列車を待つのは閉口する。

## 部 員 住 所 録

現住所・帰省先

院 1 W	広 田 雅 司	桐生市宮本町 1660 松村方 栃木県宇都宮市崔田町 3346-3
4 L	堀 江 英 雄	栃木県足利市月谷町 332 同 上
4 P	高 橋 徹 夫	栃木県足利市助戸新山町 1559 同 上
4 P	吉 野 栄 二	桐生市天神町 3丁目 啓真寮 埼玉県熊谷市久下 530.
4 P	滝 野 哲 司	桐生市天神町 3丁目 啓真寮 群馬郡箕輪町生原 1745-1
4 P	鳥 居 寿 一	桐生市仲町 1-4-2 福田方 神奈川県横浜市戸塚区阿久和町 3662
4 P	河 野 政 美	桐生市菱町黒川 4-2357 中村方 徳島県麻植郡鴨島町知恵島境 815
4 K	川 野 行 由	桐生市梅田町 1丁目 202-1 峰岸方 兵庫県尼崎市常光寺西ノ町 1-34
4 W	大 橋 進	桐生市菱町 4-2368 武井方 埼玉県浦和市別所 2-14-9
4 W	宮 川 英 夫	桐生市宮本町 1464 坂口方 茨城県下館市金井町甲 873
4 W	五 十 嵐 和 男	埼玉県本庄市大字山王堂 212-2 同 上
4 L	浅 見 武 義	桐生市天神町 3丁目 啓真寮 藤岡市上戸塚 497
3 M	斎 藤 功	桐生市天神町 3丁目 啓真寮 群馬県藤岡市
3 M	渡 辺 等	桐生市東 1-10-8
3 M	山 口 昌 男	太田市矢場 2961 同 上
3 M	鎌 田 篤 夫	栃木県佐野市出流原町 991 同 上
3 E	海 老 原 孝 司	桐生市東 1-10-8 東京都墨田区本所 2-13-9
3 E	長 谷 健 二	桐生市東 1-10-8 東京都板橋区蓮沼町 24

- 3 L 太 田 博 桐生市仲町3-2-7
- 2 K 海 老 沼 義 郎 栃木県下都賀郡藤岡町大字大前557  
同 上
- 2 E 尾 高 秀 一 桐生市宮本町1681-1 荒居方  
埼玉県本庄市宮本町2070

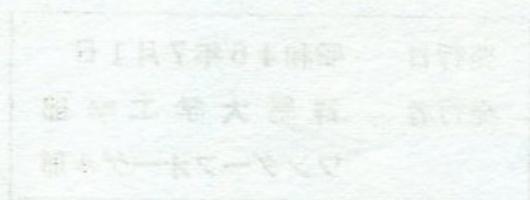
## O . B 住 所 録

勤 務 先 ・ 現 住 所 ・ 電 話

- 40 C 奥 原 功 群栄化学工業  
群馬県安中市下秋間甲1524
- 40 E 宇 多 川 絃 日本サーボ  
桐生市相生町5-154 日本サーボ社宅D-3号
- 41 W 岩 下 佳 司 日清紡績徳島工場  
徳島市川内町中島 日清紡寮
- 41 C 大 島 隆 夫 山陽パルプKK大阪営業所  
大阪府門真市垣内町7-21 古川橋方
- 41 S 浅 海 英 二 昭和化学工業KK研究課  
大阪府泉南市男里995
- 41 M 鳥 居 寛 治 郎 千野製作所 生産技術課  
藤岡市小林483 千交荘 藤岡(2)1115
- 41 M 見 供 滋 忠 三菱油化KK  
茨城県鹿島郡神栖町知手 三菱油化知手寮
- 41 E 鳩 原 恵 二 東芝電気器具前橋工場  
渋川市南町2536
- 41 S 秋 草 洋 三 平岡染織草加工場  
東京都葛飾区小菅2-16-18 才3正革荘
- 42 S 藤 村 孝 道 モーリン化学  
栃木県足利市駒場770 0284(4)8344
- 42 M 内 田 邦 夫 神戸製鋼所 兵庫県神戸市灘区篠原字牛小屋1014  
六甲台神鋼寮 078(86)0856
- 42 E 朝 倉 正 博 日本電気玉川事業所  
川崎市野川3139 日電野川寮
- 42 E 大 塚 光 守 東芝電気器具前橋工場  
前橋市古市町 東芝電気器具寮

- 4 2 S 鹿 山 公 群大(工)合成化学科 桑村研  
太田市竜舞 2 0 7 0
- 4 2 C 小 林 弘 一 明成商会東京営業所  
東京都大田区田園調布 3 - 4 6 - 3 明成寮
- 4 2 M 田 沼 正 也 日立製作所  
茨城県日立市城南町 知明寮
- 4 2 教 深 沢 鼎 桐生工業高校定時制  
群馬県勢多郡粕川村前皆戸 1 4
- 4 3 W 川 田 裕 一 堀田産業  
栃木県足利市元学町 8 2 3 0 2 8 4 ( 4 ) 1 5 3 0
- 4 3 C 黒 田 宏 埼玉化学工業  
埼玉県浦和市埼玉化学工業 K K 浦和工場寮
- 4 3 S 小 島 昭 群馬工専 工業化学科  
桐生市本町 4 丁目 3 3 8
- 4 3 K 金 子 岩 男 日東製粉  
埼玉県草加市栄町松原団地 B 4 6 - 7
- 4 3 K 五 十 嵐 信 之 東洋インキ製造 K K  
埼玉県浦和市南浦和公園住宅 4 2 - 5 0 1
- 4 3 K 久 保 田 耕 司 東芝セラミックス 日比谷会館内  
会社：東京都千代田区内幸町 2 - 1 - 6
- 4 3 M 藤 井 幸 吉 油研工業 K K  
神奈川県藤沢市宮前町 4 1 9 油研工業 2 青雲寮
- 4 3 M 横 尾 国 夫 横尾製作所  
栃木県鹿沼市西沢町 3 8 5
- 4 4 W 小 沢 達 樹 桐生繊維試験所  
群馬県群馬郡群馬町棟高 1 9 2 8 - 9 9
- 4 4 S 齋 藤 謙 大日本印刷 K K 埼玉県入間郡福岡町上野台  
1 5 0 0 大日本印刷若竹寮 0 4 9 2 ( 6 1 ) 2 6 1 7
- 4 4 C 横 山 崇 雄 倉敷紡績 K K  
三重県津市江戸橋倉敷紡績男寮
- 4 4 K 原 文 雄 日本酸素 東京都大田区池上 8 - 2 1 - 5  
日本酸桑安方寮 0 3 ( 7 5 9 ) 0 9 2 8
- 4 4 M 江 黒 茂 東武鉄道  
埼玉県熊谷市石原 1 9 0 7
- 4 5 院 草 場 彰 日立製作所 横浜 ( 8 5 1 ) 1 9 9 0  
横浜市戸塚区原宿町 4 8 7 日立吹上寮
- 4 5 院 木 村 隆 男 電々公社 茨城県水戸市見和町 2 3 1 - 2  
電々公社見和寮 0 2 9 2 ( 5 1 ) 5 4 7 5
- 4 5 W 加 藤 芳 彦 日清紡浜松工場 静岡県浜北市貴布禰 1 2 0 0  
日清紡浜松工場 1 松和寮

45	S	中島好司	日本楽器 日本楽器清韻寮	静岡県浜松市中沢町7-5 0534(71)6954
45	K	上山悟	建材社KK	栃木県下都賀郡国分寺小金井 甲賀屋酒店方
45		岡部宣男	樹徳高校	栃木県足利市板倉町800
45	M	埋橋文人	日立製作所	栃木県下都賀郡大平町富田500 太平寮
45	M	根岸秀明	ソニー	東京都国立市北3丁目4番地2-2
45	M	山田定男	古河アルミ 古河アルミ大谷寮	栃木県小山市中久喜1330 02852(3)2111
45	L	松田衛次	三洋自動販売機KK	三洋自動販売機KK吹上寮 0485(48)1845
45	E	須藤誠	富士通	横浜市緑区藤ヶ丘2-1 富士通才3藤ヶ丘寮
45	E	中島恒弥	三菱電機KK	京都府乙訓郡長岡町大字今里小字 南平尾20 三菱電機竹真寮 075(921)0827
45		斎藤勝男	(不明)	
顧問		大浦勝	群馬大学工学部合成化学科	滝口研 太田市東今泉 140



## 編集後記

皇海第7号をおとどけします。

この皇海第7号は、三本の柱から成っております。その一本の柱は、これは野性味いっぱいの柱と言うより生木そのままなのですが、これからまだまだ大きく、たくましくなり、大きなものをその枝で、その幹で、その根で、支えることでしょう。

又、一本の柱は——いままで多くの人の手あかでごれた柱に、そのよごれた跡に美しさを見出したのですが——その「ほり」を深くすることでしょう。

最後の柱は、まだピカピカと光っています。しかし、その光りは都会的です。部屋の明りに似ています。この柱に太陽の輝きを与えてください。O・B・諸氏の皆様、私達に手紙をください。

これら三本の柱で我々は地上に足をふみ出すことができ、どっかと立つことができる。

発行日	昭和46年7月1日
発行者	群馬大学工学部 ワンダーフォーゲル部

# 前略

皇軍大下等は皆國士一也。

吾輩、天下の大下等は、深き其國實

に對し、一也。之れを以て、其の

忠實の心を、一也。其の

也。

大下等は、皆國士一也。其の

一也。其の心を、一也。其の

也。

大下等は、皆國士一也。其の

一也。其の心を、一也。其の

也。

社會の、其の心を、一也。其の

其の

6月23日

皇軍大下等

一也。其の